埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第10集

一般国道140号（寄居町・花園村工区）

埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

上　南　原

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県における道路網の整備は、関越自動車道などの国土幹線道路と地域開発、環境整備にともなう国道、県道の新設、改良が計画され、着々と建設されています。

一般国道140号線も、関越自動車道花園インターチェンの開業にともない、花園村黒田から寄居町桜沢まで建設されることになりました。埼玉県文化財保護課では、事前に路線内の分布調査を実施し、4ケ所の遺跡を確認し、慎重に協議を重ねた結果、発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、埼玉県の委託を受けて、埼玉県教育委員会が直営で実施し、整理作業は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が県の委託を受けて実施したものであります。

本書は、一般国道140号バイパス建設にともなう、上南原遺跡に関する報告書でありますが、多くの新しい事実が発見され記録保存の成果はもとより、これらの資料の数々は、学術研究及び学校教育に資するところが大きいと思われます。

最後になりましたが、発掘調査から、報告書の刊行に至るまで、種々御協力をいただいた花園村教育委員会や地元の方々、埼玉県道路建設課、熊谷土木事務所の方々に深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　長　井　五　郎

例　　言

1. 本書は、一般国道140号バイパスにかかる埼玉県大里郡花園村大字黒田に所在する上南原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県の委託により埼玉県教育委員会が主体となって県立歴史資料館が昭和52年１月～３月において実施したものである。
3. 整理、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵調査事業団が昭和56年度に行なった。

   なお、調査の組織は２ページに示した。
4. 整理および図版の作成は市川　修、曾根原裕明、宮　昌之、鈴木えり子野口知子、深井澄江があたった。
5. 発掘調査における写真撮影は、高塚卓史、小渕良樹が、遺物写真は、市川、坂野和信が撮影した。
6. 本書の執筆者は、文末に氏名を記した。
7. 挿図類の縮尺は、遺構全体図1/400、遺構図1/60、竈1/40、土壙1/60土器実測図1/4、1/5、土器拓影図1/3、石器実測図1/3を原則とした。又住居址の柱穴の数字は床面からの深さ（cm）を示し、断面図の数字は基準線の標高（m）を示す。
8. 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団第４課の職員があたり、横川好富が監修を行なった。
9. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御助力を得た。

   青木秀雄、新井和之、石井　寛、猪股喜彦、入江淳一、江里口省三、小倉　均、栗原文蔵、笹森建一、下村克彦、白石浩之、谷井　彪、土肥　孝、中島　宏、成瀬正和、羽生淳子、原田昌之、本間岳史
10. 発掘終了後の遺物保管体制の不備により、雨水を受け註記ラベルが腐ってしまい、遺物の多くが出土遺構不明となっていた。中でも石器はその殆んどが不明である。土器は現存するものを図示した。

目　次

序

例　言

Ⅰ　発掘調査に至る経過……1

Ⅱ　立地と周辺の遺跡……3

Ⅲ　調　査　の　経　過……7

(1)　遺跡の概要……7

(2)　調査日誌……8

Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物……12

(1)　住　居　址……12

(2)　土　　壙……22

(3)　土　　器……27

a　住居址出土土器……27

b　土壙出土土器……83

(4)　石　　器……88

Ⅴ　平安時代の遺構と遺物……100

(1)　住　居　址……100

(2)　出土土器……101

Ⅵ　結　　語……103

(1)　縄文時代……103

(2)　平安時代……105

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……４・５
第２図　遺構全体測量図……９・10
第３図　第１号住居址……12
第４図　第３号住居址……13
第５図　第４号住居址……14
第６図　第５号住居址……15
第７図　第６号住居址……16
第８図　第７号住居址……17
第９図　第８・12号住居址……18
第10図　第９号住居址……19
第11図　第10号住居址……20
第12図　第11号住居址……21
第13図　土壙　(1)……23
第14図　土壙　(2)……24
第15図　土壙　(3)……25
第16図　第１号住居址出土土器　(1)……27
第17図　第１号住居址出土土器　(2)……28
第18図　第３号住居址出土土器　(1)……30
第19図　第３号住居址出土土器　(2)……31
第20図　第３号住居址出土土器　(3)……33
第21図　第３号住居址出土土器　(4)……34

第22図　第３号住居址出土土器　(5)……35
第23図　第４号住居址出土土器　(1)……39
第24図　第４号住居址出土土器　(2)……40
第25図　第４号住居址出土土器　(3)……41
第26図　第５号住居址出土土器……43
第27図　第６号住居址出土土器　(1)……45
第28図　第６号住居址出土土器　(2)……46
第29図　第７号住居址出土土器　(1)……48
第30図　第７号住居址出土土器　(2)……49
第31図　第７号住居址出土土器　(3)……51
第32図　第７号住居址出土土器　(4)……53
第33図　第８号住居址出土土器　(1)……56
第34図　第８号住居址出土土器　(2)……57
第35図　第８号住居址出土土器　(3)……58
第36図　第８号住居址出土土器　(4)……59
第37図　第８号住居址出土土器　(5)……60
第38図　第８号住居址出土土器　(6)……61
第39図　第８号住居址出土土器　(7)……63
第40図　第９号住居址出土土器……65
第41図　第10号住居址出土土器　(1)……67
第42図　第10号住居址出土土器　(2)……69
第43図　第10号住居址出土土器　(3)……70
第44図　第10号住居址出土土器　(4)……71

第45図　第10号住居址出土土器　(5)……73
第46図　第11号住居址出土土器　(1)……75
第47図　第11号住居址出土土器　(2)……76
第48図　第11号住居址出土土器　(3)……77
第49図　第12号住居址出土土器　(1)……80
第50図　第12号住居址出土土器　(2)……81
第51図　土壙出土土器　(1)……83
第52図　土壙出土土器　(2)……84
第53図　土壙出土土器　(3)……86
第54図　石器　(1)……90
第55図　石器　(2)……91
第56図　石器　(3)……92
第57図　石器　(4)……94
第58図　石器　(5)……95
第59図　石器　(6)……96
第60図　石器　(7)……97
第61図　第２号住居址……100
第62図　第２号住居址竈実測図……101
第63図　第２号住居址出土土器……101

図　版　目　次

図版１　上　第３号住居址
　　下　土器出土状態
図版２　上　第４号住居址
　　下　第５号住居址
図版３　上　第８、12号住居址
　　下　第９号住居址
図版４　上　第11号住居址
　　下　第12号住居址
図版５　上　第２号土壙
　　中　第３号土壙
　　下　第９号土壙
図版６　上　第13号土壙
　　中　第20号土壙
　　下　第25号土壙
図版７　上　第１号住居址出土土器
　　下　第３号住居址出土土器
図版８　　第３号住居址出土土器
図版９　　第３号住居址出土土器
図版10　　第３号住居址出土土器
図版11　　第３号住居址出土土器
図版12　　第４号住居址出土土器
図版13　　第４号住居址出土土器
図版14　　第７号住居址出土土器
図版15　上　第７号住居址出土土器
　　中　第７号住居址出土土器
　　下　第８号住居址出土土器
図版16　　第８号住居址出土土器
図版17　　第８号住居址出土土器
図版18　　第８号住居址出土土器
図版19　　第８号住居址出土土器
図版20　　第８号住居址出土土器
図版21　　第10号住居址出土土器
図版22　　第11号住居址出土土器
図版23　　第12号住居址出土土器
図版24　　第12号住居址出土土器
図版25　　第12号住居址出土土器
図版26　上　第３号土壙出土土器
　　下　第19号土壙出土土器
図版27　　第５号土壙出土土器
図版28　上　第10号住居址出土土器
　　中　第10号住居址出土土器
　　下　第12号住居址出土土器
図版29　上　第１号住居址出土土器
　　下　第３号住居址出土土器
図版30　　第３号住居址出土土器
図版31　　第３号住居址出土土器
図版32　　第４号住居址出土土器
図版33　　第４号住居址出土土器
図版34　上　第５号住居址出土土器
　　下　第６号住居址出土土器
図版35　　第６号住居址出土土器
図版36　　第７号住居址出土土器
図版37　　第７号住居址出土土器
図版38　　第８号住居址出土土器
図版39　　第８号住居址出土土器
図版40　　第８号住居址出土土器
図版41　　第８号住居址出土土器
図版42　上　第９号住居址出土土器
　　下　第10号住居址出土土器
図版43　　第10号住居址出土土器
図版44　　第10号住居址出土土器
図版45　　第10号住居址出土土器
図版46　上　第10号住居址出土土器
　　下　第11号住居址出土土器
図版47　　第11号住居址出土土器
図版48　　第12号住居址出土土器
図版49　　土壙出土土器
図版50　　土壙出土土器
図版51　　出土石器
図版52　　出土石器
図版53　　出土石器
図版54　　出土石器

Ⅰ　発掘調査に至る経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を進めているが、一般国道 140 号線でも関越自動車道の建設等に伴い、寄居町、花園村地内でバイパスの建設が計画された。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を図っている。今回の事業の担当課である県土木部道路建設課とも同様の調整は進めていた。

道路建設課から路線内の文化財の所在について文化財保護室（当時）あて照会があったのは、昭和48年12月17日付け第建第1103号をもってであった。これに基づいて文化財保護室では分布調査を実施した結果、縄文時代の集落跡及び古墳群が所在することが確認された。この結果を検討して、昭和49年５月28日付け教文第 905 号をもって、1. 文化財は現状保存することが望ましい。2. やむを得ずかかる区域については発掘調査を実施されたい。という主旨で道路建設課あて回答した。

その後、文化財保護課と道路建設課では保存策について種々の調整がなされたが、路線変更は不可能となったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。路線内には小前田古墳群をはじめ４ケ所の遺跡が確認されているが、これらの遺跡について改めて発掘調査のための協議を開始した。

昭和52年２月22日付け道建第 741 号をもって道路建設課から文北財保護課へ「一般国道 140 号寄居町、花園村地内の道路改良事業区域内における埋蔵文化財調査について」という協議書が提出された。その内容は次のとおりである。

1.　調査時期および範囲
2.　調査費用（概算）
3.　調査機関

また、調査は昭和52年度中に実施してほしい旨の連絡もあった。

文化財保護課ではこれらに基づいて道路建設課と協議を進め、昭和52年度中に花園村黒田地区所在の上南原遺跡の調査を実施することとなった。発掘調査は文北財保護課が執行委任を受けて行なわれた。

埼玉県知事からは文化財保護法第57条の３に基づく埋蔵文化財発掘通知が、県教育長からは同法第98条の２に基づく埋蔵文化財発掘調査通知が文化庁長官へ提出され、昭和53年１月23日から調査が開始された。

文化庁からは委保記第17—1637号をもって調査通知を受理した旨の通知があった。

（文化財保護課）

発掘調査の組織

1. 発　掘

主体者	埼玉県教育委員会		
	埼玉県教育局文化財保護課	課長	杉山泰之
		課長補佐	秋葉一夫
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早川智明
			柿沼幹夫
			駒宮史郎
			本間岳史
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	長谷川　清
			太田和夫
			干村修平
発　掘	埼玉県立歴史資料館	調査研究部長	金井塚良一
		調査員	高塚卓史
			小渕良樹

2. 整　理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井五郎
		副理事長	沼尻和也
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊東悦光
			関野栄一
			福田　浩
			本庄朗人
整　理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究第四課長	増田逸朗
			市川　修

3. 協力者

大里郡花園村教育委員会、地元区長及び地元住民

Ⅱ　立地と周辺の遺跡

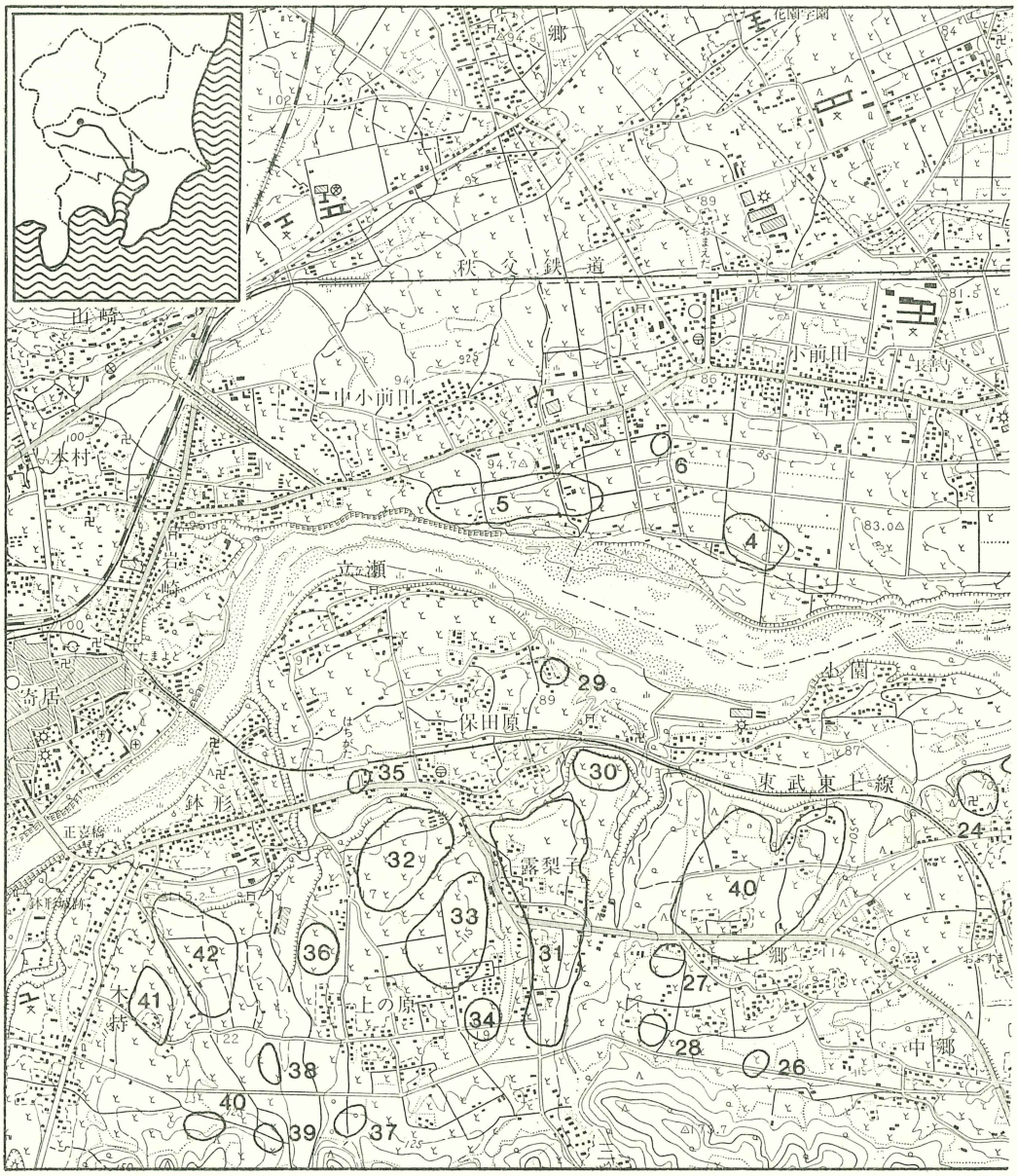
上南原遺跡の位置は、大里郡花園村大字黒田1236番地である。遺跡は甲武信岳を源流とする荒川が秩父山地を離れて東へ流れる左岸の河岸段丘上に立地する。荒川は秩父山地を離れると寄居町部分を扇頂部として扇状地を形成するがこの荒川のつくった古扇状地が開析されでさた荒川扇状地は左岸で広大な櫛引台地となっている。右岸では古扇状地の南部にあたると考えられる江南台地がある。櫛引台地は三角形状を呈して、西は藤治川により画され、南は荒川に沿う崖線で画されている。台地面は２つの段丘面に分けられる。高い面は櫛引面とよばれ、櫛引ケ原の主体をなし、寄居高校付近より、東へ花園村下郷、深谷市境、折ノ口、上宿と続く崖線より北側の面である。低い面は寄居面とよばれこの崖線の南側で荒川に沿って発達しており、北東側櫛引面に比して突出しており、深谷市原郷、熊谷市別府にかけてゆるい崖線をつくっている。櫛引面は関東ローム層の武蔵野面にあたり畑が多く、寄居面では立川面にあたり水田が多い。寄居面では立川ローム上層に対比される浅間火山の墳出物である大里ローム層ののる面とのらない面がある。荒川右岸の江南台地は下末吉面となっている（堀口1980）。

荒川扇状地を開析する現河川は両岸に河岸段丘をつくり、東へ流れている。左岸では櫛引台地寄居面に荒川に沿って段丘が数段みられ、花園村黒田では荒川が流路を北東方向に変え、滝付近で再び東へ流路を変える。段丘は黒田付近で特に明瞭となり、３段確認認される。

上南原遺跡は第３段丘面の縁辺に存在している。第３段丘の崖線は、黒田地区で北東に流れる荒川に沿って形成され、現在の国道140号線まで接近し、この地点より急に東へ向って、荒川に接していく。上南原遺跡はこの崖線が北東方向に向い始める地点に立地しており、遺跡の現在の地目は、畑、桑畑である。段丘下は桑畑であるが東端の段丘下は、谷部を形成し現在では水田となり段丘崖湧水が現在でもみられる。この谷部は第３段丘の崖線が北東から東へ向い第２段丘と合流する地点まで続いており、この谷部以東及び以南の第２、第１段丘面は、桑畑と畑、黒田の集落が形成されている。第１段丘下には沖積面があり、水田、畑及び民家が数軒ある各。段丘下には湧水がみられる。

上南原遺跡に近接する遺跡としては、第３段丘上に立地する下南原遺跡があり、縄文中期加曾利Ｅ式期の住居址、土壙が検出されている。更に東側の第２、３段丘面には宮台遺跡がある。上南原遺跡の調査と前後して関越自動車道花園インターチェンジ建設に伴い台耕地遺跡の発掘調査が行なわれている（鈴木他1980）。台耕地遺跡は、上南原遺跡の東と接続して、第３段丘から第１段丘面にかけて広がり、第１段丘面では古墳２基、国分期住居址１軒、第２段丘面には縄文中期（勝坂～加曾利Ｅ期）住居址25軒、第２、３段丘面に和泉～国分期住居址が10軒、そして第３段丘の段丘崖の斜面部には、製鉄址が３基検出されている。第１段丘面の古墳は黒田古墳群の一部であり、台耕地遺跡の西に展開して第２段丘面に築造されている。昭和50年に20基が調査され、既に報告書が刊行されている（塩野1980）。

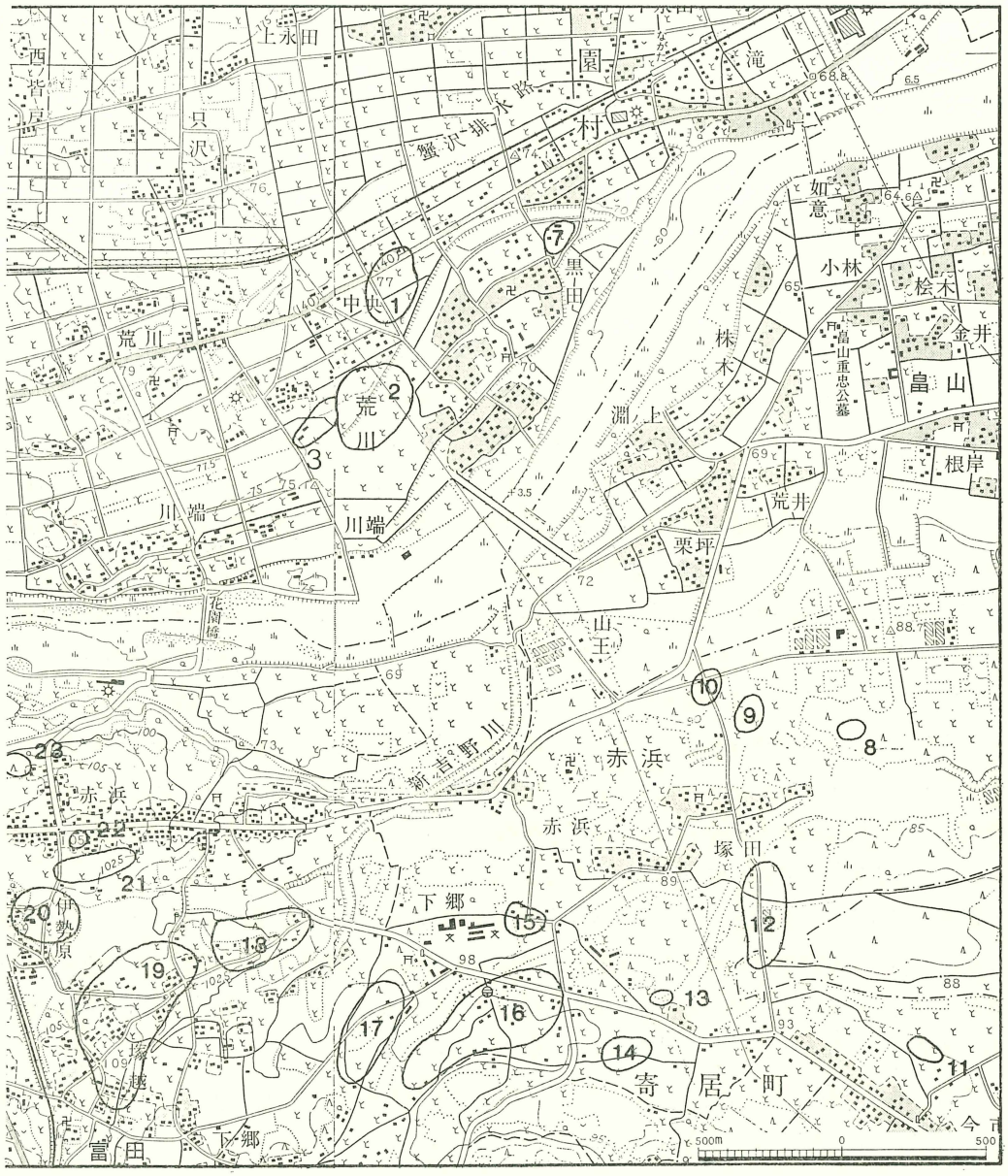
次に黒田地区以外の周辺部における縄文時代の遺跡について概観すると、寄居町桜沢には河岸段



第1図　遺跡位置図

第1表　縄文時代遺跡地名表

1　下南原遺跡　　2　台耕地遺跡　　3　**上南原遺跡**　　4　橋屋遺跡　　5　北塚屋遺跡
6　橋屋遺跡　　7　宮台遺跡　　8　No.19　　9　No.20　　10　No.21　　11　No.2（縄文中期）
12　No.15（縄文中期）　　13　No.10　　14　No.11（縄文中期）　　15　No.14（縄文中・後期）　　16　No.12
17　庚申塚遺跡（縄文中・後期）　18　No.24（縄文中期）　19　No.25（平安）
20　伊勢原遺跡（縄文中期）　　21　宮の前遺跡（縄文中期）　　22　宮側上町遺跡（縄文中期）
23　常楽寺南遺跡（縄文後期）　　24　昌国寺遺跡（縄文後期）　　25　むじな塚遺跡（勝坂、加曾利E）



26　№36　　27　上郷西遺跡　　28　上郷A遺跡（諸磯b）　　29　羽毛田遺跡（安行Ⅰ、Ⅱ）

30　日向上遺跡（諸磯b、c、加曾利E）　　31　露梨子遺跡（前期・加曾利E・後期）

32　甘粕原遺跡（黒浜・諸磯・勝坂・加曾利E）　　33　ゴシン遺跡（前・中期）

34　大塚遺跡（早・後期）　　35　町田耕地遺跡（早期～後期）　　36　東遺跡（後期）

37　上の原遺跡（早期・中期）　　38　八幡台遺跡（中期）　　39　愛后山東遺跡（中期・後期）

40　愛后山北遺跡（早期）　　41　氷川台遺跡（加曾利E）　　42　薬師台遺跡（黒浜・諸磯・加曾利E）

丘上に北塚屋遺跡が同じ、バイパス建設に伴い調査され、縄文時代前期～後期に亘る大集落が検出され、立地は段丘縁辺に相当する（市川1980）。 東方には後・晩期の遺物を豊富に収集された橋屋遺跡がある。

荒川右岸の地形は立川面の河岸段丘から下末吉面の江南台地へと続き、比企丘陵へと連なっている。この段丘と江南台地との比高差は約20ｍある。荒川右岸は対岸の遺跡の数に比して極めて密度が高くなっている。右岸の河岸段丘立川面には後期の土器の散布地が２ヶ所確認されているのみで、他は全て江南台地上に立地している。

扇頂部にあたる寄居町付近右岸の鉢形地区では台地上を北流して荒川に合流する小河川が台地を開析し、台地を小区分する。遺跡は各小台地の縁辺ないし、縁辺よりむしろ小台地の中央部に中心をもつものが存在する。このうち上の原台では既に発掘調査及び報告のなされいる第１図32、33、36の遺跡がある。32は甘粕原遺跡、33はゴシン遺跡、36は東遺跡である。東の露梨子台には31の露梨子遺跡がある。上の原台の東部は北東より走る小谷により開析され北側に甘粕原遺跡が、南側にゴシン遺跡がある。甘粕原遺跡では早期、黒浜、諸磯、勝坂、加曾利ＥⅠ期の住居址、土壙、遺物が検出されている。露利子遺跡は前期から後期にかけての遺跡があるが加曾利ＥⅣ期の柄鏡型住居址が検出されている。遺跡は上の原台の西端にあたる東遺跡では称名寺期の配石遺構が検出されている（並木　1979、梅沢　1973）。 鉢形地区の遺跡は小河川による谷筋に沿って遺跡が立地しているといえる。この小河川は、比企丘陵及び比企丘陵山麓より流れ始めている。鉢形地区の東側では北流する小河川は殆ど見られず、吉野川が江南台地を東へ流れ最後は荒川に注がれるが谷筋は東西方向へ走っている。この地域も台地の縁辺と小谷に沿った小台地縁辺に立地すると思われる。この地域縄文時代の遺跡は中期を主とし、ほぼ全時期にわたって存在し、縄文時代の遺跡の豊富さを示し、良好な立地条件を有している地域である。

既に柿沼幹夫より県北地方における縄文時代遺跡の立地条件について述べられている。遺跡の集中地区として寄居町桜沢から用土、山崎山丘陵にかけての低丘陵地帯山麓、櫛引台地上の志戸川・藤谷川の谷筋にかけて、深谷市柏合、上野台付近の小河川による谷筋に成立する中期、後期遺跡等の立地条件とは異なった一つの特徴を有している（柿沼　1978）。

荒川右岸の遺跡に対して荒川左河岸段丘上には、上南原遺跡をはじめ北塚屋、台耕地という遺跡が存在するが、遺跡の数は非常に少なく対称的なあり方を示している。　　（曾根原裕明）

引用文献

堀口万吉　1980「埼玉県の地質」『埼玉県市町村誌』第20巻　埼玉県市町村史刊行委員会
1979「日曜の地学—埼玉県の地質」
鈴木敏昭、中島宏　1979「台耕地遺跡の調査」『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
小久保徹　1976「黒田古墳群」　黒田古墳群発掘調査会
市川　修　1980「北塚屋遺跡の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
並木　隆　1979「甘粕原、ゴシン、露梨子」　埼玉県遺跡調査報告会報告書第35集
梅沢太久夫　1973「大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告」『埼玉考古第11号』
柿沼幹夫　1978「前畠・島之上・出口・芝山」　埼玉県遺跡調査報告第12集
柿沼幹夫　1979「埼玉県北部における縄文遺跡の立地について」『埼玉考古第18号』

Ⅲ 調査の経過

1. 遺跡の概要

上南原遺跡は、荒川左岸の河岸段丘中位面に立地して、東西に走る段丘崖に沿って展開する。標高は75m前後に位置して、平坦ではあるが西南方向に向って高くなっている。

調査区域は遺跡の中心部を横断するように設定され、全長185m、幅20mで約3700m²の面積で10m四方のグリットを設定し、北から南へA～L区、東から西へ1～18区として呼称した。A～C—1区は台耕地遺跡と接続している。

遺跡の層序は、第1層、耕作土で20～30cmの厚さで黒味の強い茶褐色土で果粒状の荒い土であった。第2層、暗褐色土で若干粘性を帯びており10～20cmの厚さを測る。第3層、黒褐色土で厚さは20cm程で砂質を帯びている。第4層は基盤層として遺構検出面となった黄褐色砂質土である。第4層は、砂質のため、乾燥、凍結が激しく、調査の進行に困難をきたし、覆土との差違が明瞭に把握されなかった。厚さは20～30cmである。第5層、ブロック状の黄褐色土で厚さは15cm程であった。第6層は礫層である。

調査により検出された遺構は住居址12軒、土壙28基であった。

住居址は、縄文時代前期の諸磯a、b式期のものが11軒検出されて、調査区の中央部に整然と位置している。住居址のプランは、方形、長方形、楕円形のもので、長軸は5m前後の規模をもつものである。壁高は10～20cm程のもので、浅い掘り返みであった。柱穴の検出は覆土と基盤層の差違が不明瞭のため検出できない住居址も存在し、炉についても砂質土のため焼土の残存が悪く第3、4、5号住居址において検出されたに留まっている。第8、12号住居址からは埋甕が検出されている。第2号住居址は、ただ1軒の平安時代の住居址で隣接する台耕地遺跡の集落の拡がりを示すものである。

土壙は、帰属不明も含めて28基が調査され、そのほとんどが諸磯a、b式期のものであるが、諸磯c式を出土した第8、9号土壙、中期加曾利E式期の第12号、称名寺式期の第28号土壙が有り台耕地遺跡との関連でその拡がりを示すものである。また、土壙内に埋設土器を伴った第3、5、19号土壙等がある。

遺物の出土は、第3、4、8号住居址において多量の土器が検出されている。

（曾根原裕明）

2. 調 査 日 誌

1月23日（晴）午前中は、現地での最終的な打合せを、熊谷土木事務所と行い、その後、重機により、耕作土を約30㎝程削平する。遺構の確認面は、砂質の黄褐色土であった。

1月24日（晴）重機による削平を続行する。引続いて発掘作業を東側より開始する。住居址及び土壙が点在する。遺物の出土量が多く、縄文時代前期の土器が検出される。

1月25日（晴）遺構の確認作業を継続する。5列まで進む、住居址4軒、土壙を確認する。

1月26日（晴）遺構確認を進め7列まで終了する。遺構の確認順に号数を与える。

1月27日（晴）10列まで遺構確認が進む、住居址、土壙が集中的に確認される。

1月30日（晴）遺構確認が14列まで進む。10列以後は、遺構の確認が希薄となってきた。

1月31日（晴）遺構の確認作業が一応終了する。各々の不明瞭なものは再度精査を行うこととする。

2月1日（晴）住居址及び土壙を掘り下げる。遺物の出土量は極めて少量であった。

2月2日（晴）第1号住居址と第1～5号土壙の作業を継続する。第3、5号土壙より完形品が各々1個体検出する。

2月3日（晴）第1号住居址の作業が終了する。遺物の出土量は少く貧弱であった。

2月6日（晴）第2号住居址を掘り始め、各土壙も順番に作業を継続する。土壙からの遺物の出土量は少い。完掘された遺構は順次写真撮影を行う。

2月7日（晴）継続して住居址及び土壙の作業を行う。

2月8日（晴）第2号住居址の竈南側より須恵器坏が纏って検出される。土壙の実測を始める。

2月9日（曇）第3、4号住居址を掘り始める遺物の出土量多く、そのままの状態で図化することとする。第2号住号址の竈を切る。土壙は順次掘り進める。

2月10日（雨後曇）雨上がりを待って、作業を始める。遺構確認の不明瞭な部々を再精査する。

2月13日（晴）第3、4、5号住居址に作業を集中する。ともに遺物の出土量が多く難行する。

2月14日（晴）土の凍結が激しく、作業能率が低い。継続して作業を行う。

2月15日（晴）第3号住居址の遺物の出土状態の図化を行う。土器と礫が半月状に広がる。

2月16日（晴）第3、4、6号住居址の作業を継続する。

2月20日（晴）第3、4号住居址の作業が終了する。第7、8号住居址の作業を開始する。第8号住居址は、遺物の出土量が極めて多い。

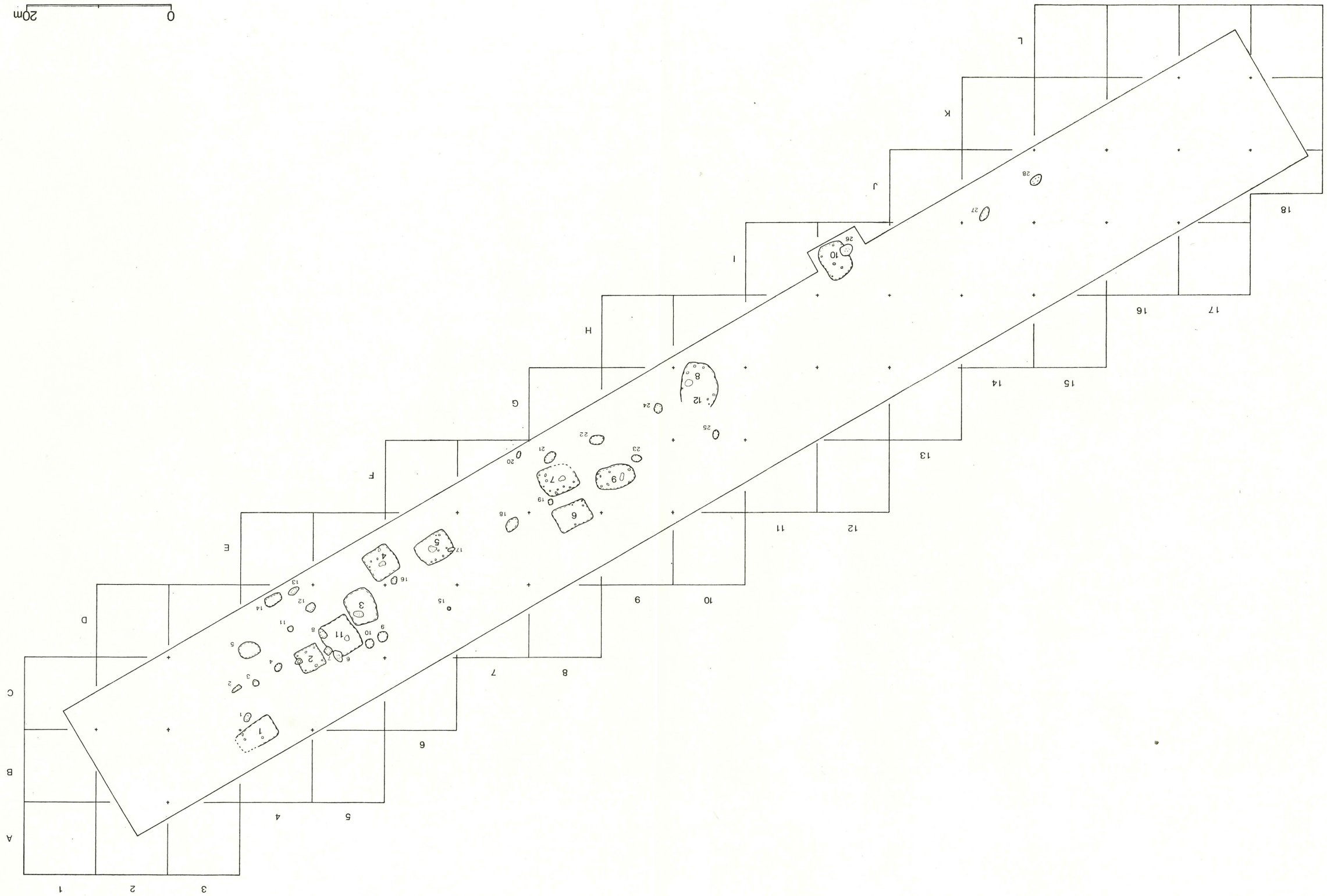
2月21日（晴）第3号住居址の写真撮影を行う。その他は継続する。

2月22日（晴）第3号住居址の出土遺物が多量に検出され作業難行。第4号住居址作業終了する。

2月23日（晴）作業を継続する。第2号住居址を除いては縄文前期諸磯系の土器を出する。

2月24日（晴）第5号住居址が掘り上がる。遺物の出土量は少い。

2月25日（晴）第6号住居址が掘り上がる。第8号住居址に作業を集中する。



第2図 道構全体測量図

2月27日（晴）各住居址は遺物を残したまま写真撮影を行うこととする。

2月28日（晴）作業を継続する。

3月1日（晴）強風のため、作業を中止する。

3月2日（晴）第9、10号住居址を掘り始める。第10号住居址も遺物出土量が多い。

3月3日（晴）作業を継続する。

3月6日（晴）第7号住の遺物出土状態の図化を行う、他は作業を継続する。

3月7日（晴）作業を継続する。

3月8日（晴）第7号住居址が掘り上がる。清掃の後、写真撮影を行う。

3月9日（晴）最後に残っていた第11号住居址を掘り始める。遺物の出土量が多い。

3月13日（晴）第7号住居址の作業が終了する。清掃の後、写真撮影を行う。

3月14日（晴）第9号住居址の作業が終了し、写真撮影を行う。

3月15日（晴）第11号住居址の作業が終了する。

3月16日（晴）第22～25号土壙の実測を行い終了する。

3月17日（晴）第27、28号土壙の実測が終了し清掃及び写真撮影を行う。

3月20日（晴）第8号住居址の遺物を取り上げ床面の精査を行い、2軒の住居の重複が判明し、第12号住居址とする。

3月21日（晴）第8、12号住居址の最終的な精査と第10号住居址が掘り上がり、写真撮影を行う。

3月22日（晴）第10号住居址の実測を始める。

3月23日（晴）第10号住居址の実測が終了する。

3月24日（晴）第11号住居址の実測を始める。第8、12号住居址を写真撮影を行う。

3月27日（晴）第11号住居址の実測が終了する。

3月29日（晴）第8、12号住居址の実測を始める。第10、11号住居址の写真撮影を行う。

3月30日（晴）図面の不備なものは、補正、修正を加える。

3月31日（晴）図面、遺物の整理、点検と行い全ての作業を終了する。

（高塚卓史、小渕良樹、市川　修）

Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物

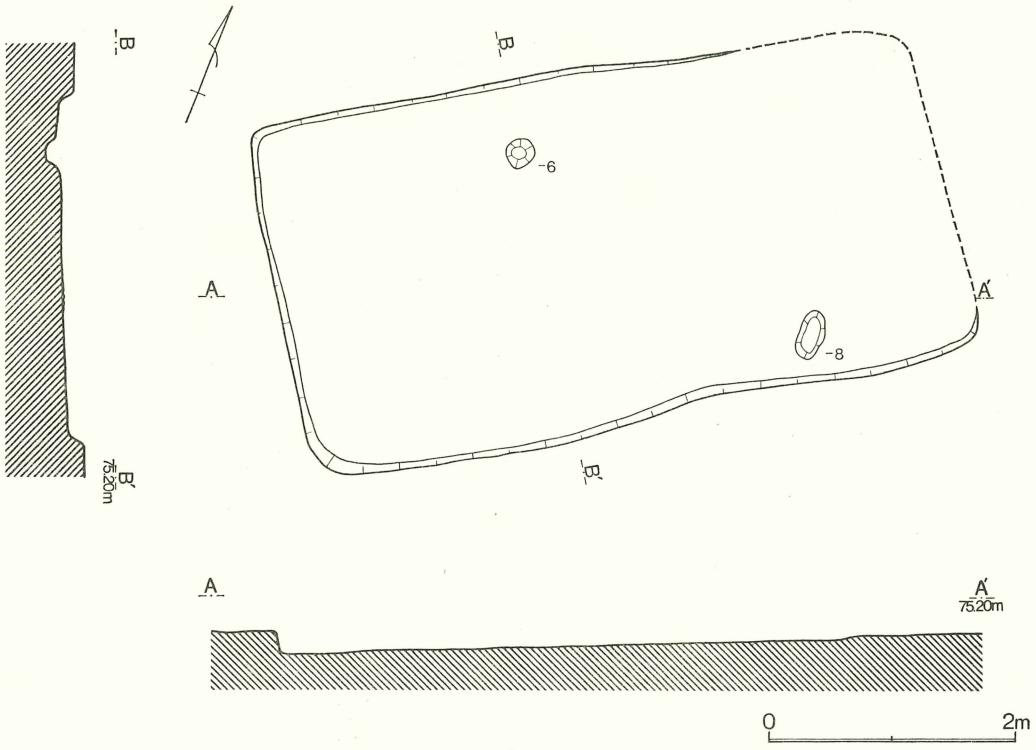
1.　住　居　址

第１号住居址（第３図）

調査区の東側Ｂ、Ｃ区に位置している。北東コーナー部は壁の立ち上がりが不明瞭であるが、長辺約5.5 *m*、短辺約2.9 *m*の長方形のプランを呈すものである。壁高は最も深い西側で約20*cm*を測るが、東に向って傾斜する床面で、全体に軟弱な状態であった。柱穴は２ケ所検出され、北、南壁に寄っている。深さは、６*cm*、８*cm*を測り浅いものであった。炉址は検出されていない。

覆土の状態は、暗褐色砂質土が堆積して分層の不明瞭なものであった。

出土遺物は、諸磯ｂ式土器が検出され、図示した１個体を除いては細片のものが少量であった。

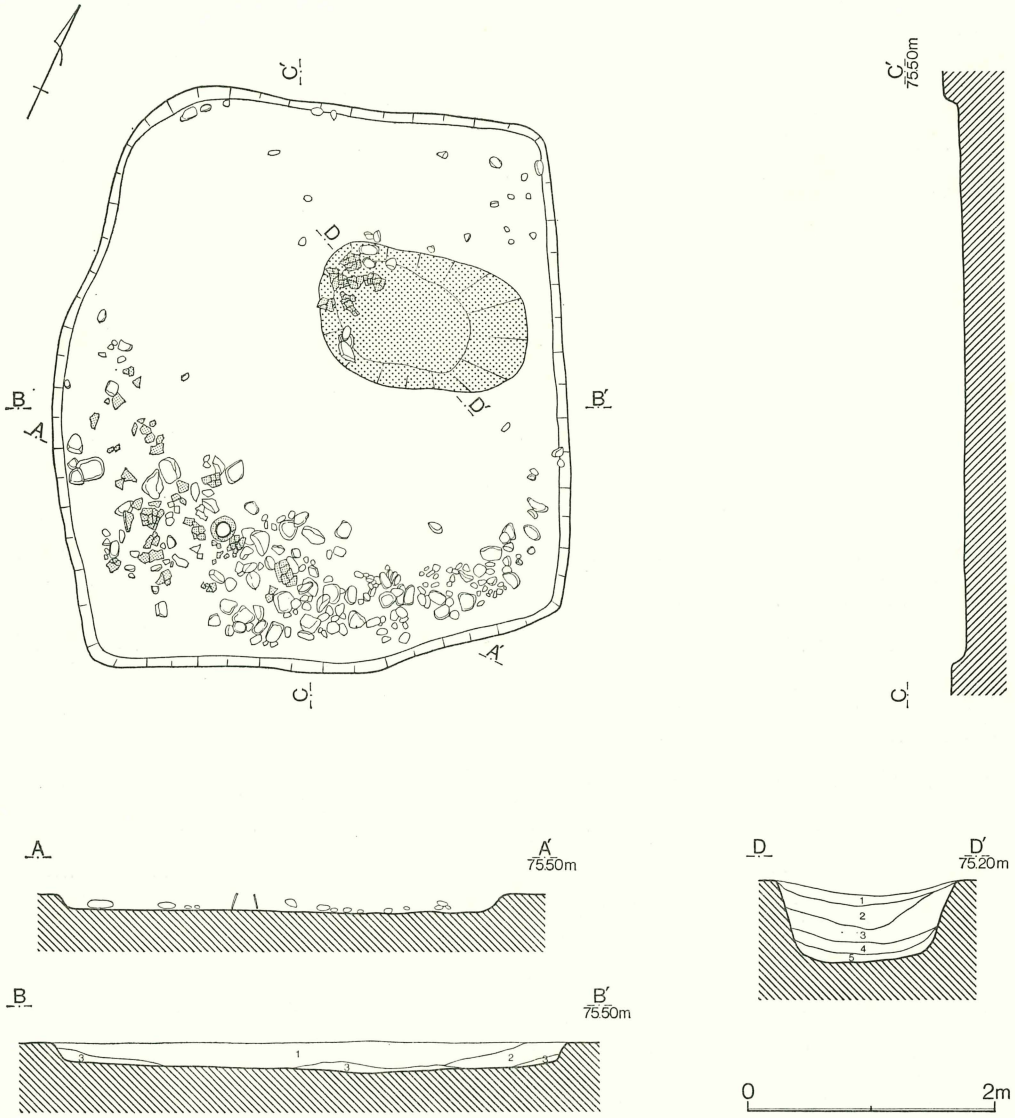


第３図　第１号住居址

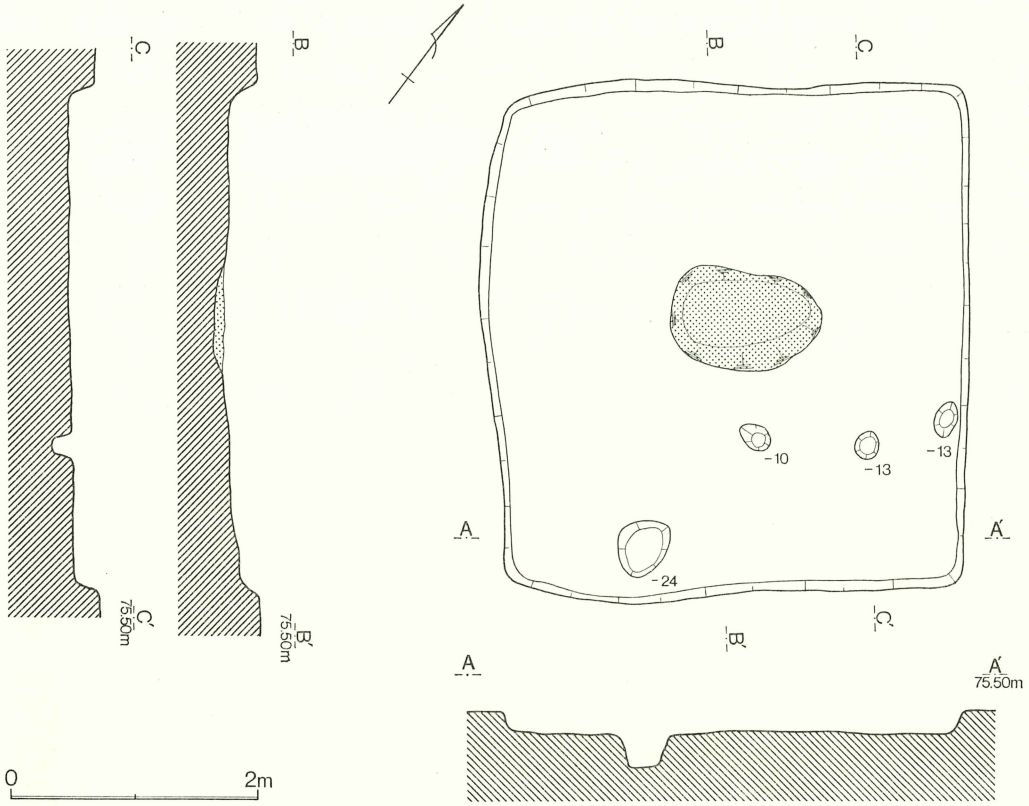
第3号住居址（第4図）

C、D—5区に位置する。長軸約4.5 m、短軸約4.1 mの規模をもった不正方形を呈している。壁高は15cm前後を測る。床面は平坦であるが軟弱な状態であった。柱穴は検出されていない。炉は北東コーナー部に寄って位置し、長径約1.7 m、短径1.1 mの楕円形で深さは約60cmを測る。掘り方が深いもので規模の大きいものである。

覆土の堆積は、第1層明褐色土、第2層黄褐色砂質土、第3層暗褐色砂質土である炉内の状態は、第1層黒褐色砂質土で大粒の焼土と炭化物を含む。第2層暗褐色砂質土で少量の炭化物と焼土む含む。第3層暗褐色砂質土で少量の焼土を含む第4層茶褐色砂質土で少量の焼土を含む。第5層茶褐色土で大粒の炭化物を含む。



第4図　第3号住居址



第5図　第4号住居址

遺物の出土は、床面に接して集中的に検出された。多くの復原可能個体と扁平で径10～30㎝前後の河原石が南壁部より半月状に認られ、混在していた。炉覆土からも火熱を受けた土器が多量に出土した。土器は胴下半部を欠損するものであり、炉の特殊な形態、配石状の礫の集中は、特殊な意識作用の想定が可能かもしれない。出土遺物は諸磯b式土器である。

第4号住居址（第5図）

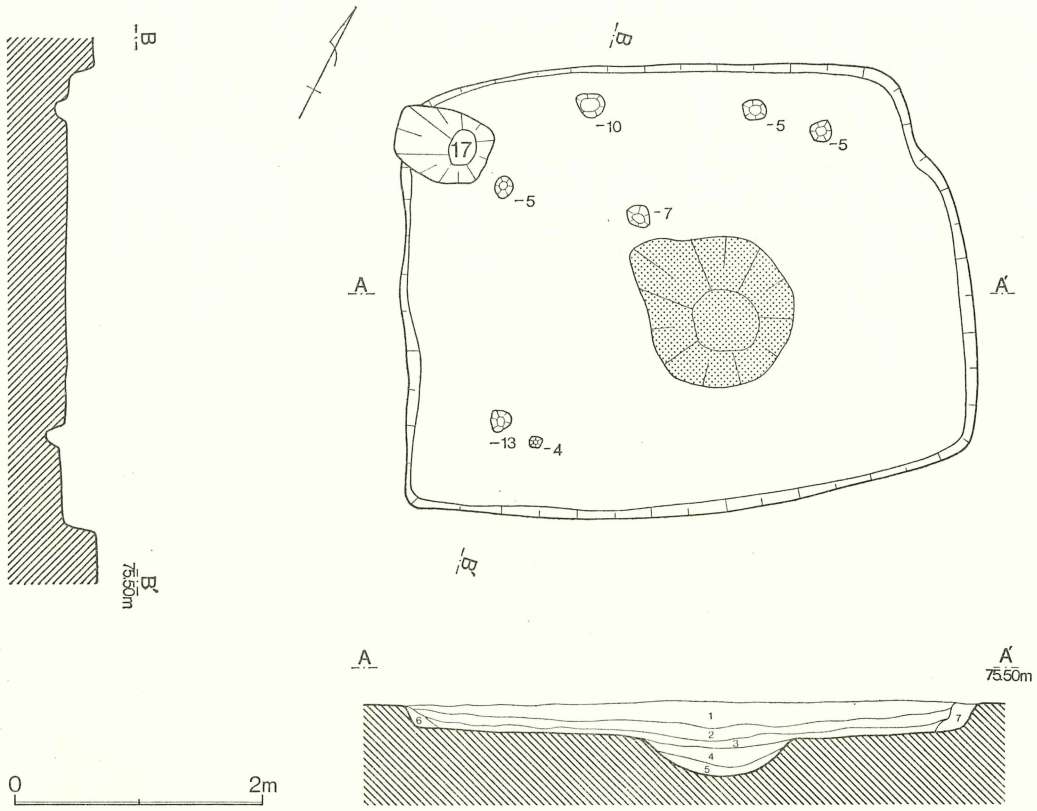
D—5、6区に位置する。方形のプランを呈し一辺が約4ｍを測る。掘り込みは深く全体に約20㎝である。床面の状態は軟弱であったが平坦面を作っている。柱穴は南半分に片寄って検出され、深さは10～13㎝と24㎝のものである。炉は程中央に位置して長軸約120㎝、短軸約70㎝の楕円形のもので、基盤層に若干の焼土を含み約10㎝の掘り近みのものであった。

覆土の状態は、暗褐色砂質土で分層の不明瞭なものであった。

遺物の出土状態は全て床面から浮いて検出されている。出土遺物諸磯b式土器である。

第5号住居址（第6図）

E—6区に位置する。長辺約4.6ｍ、短辺3.6ｍの方形を呈す。北西コーナー部には第17号土壙と重複している。壁高は20㎝前後を測る。床面の状態は軟弱であるが平坦な面で検出された。



第6図　第5号住居址

柱穴は6本が検出され北壁部に偏在している。深さは13㎝未満と浅いものであった。炉は中央部で検出され、長征160㎝、短径120㎝の不整楕円形のものである。

覆土の堆積状態は、第1層暗褐土、第2層黒褐色土、第3層黄褐色土であり全て砂質系の土である。炉内の状態は、第4層茶褐色砂質土で焼土のブロックを含んでいる。第5層茶褐色土砂質土で第4層より焼土量が少い。

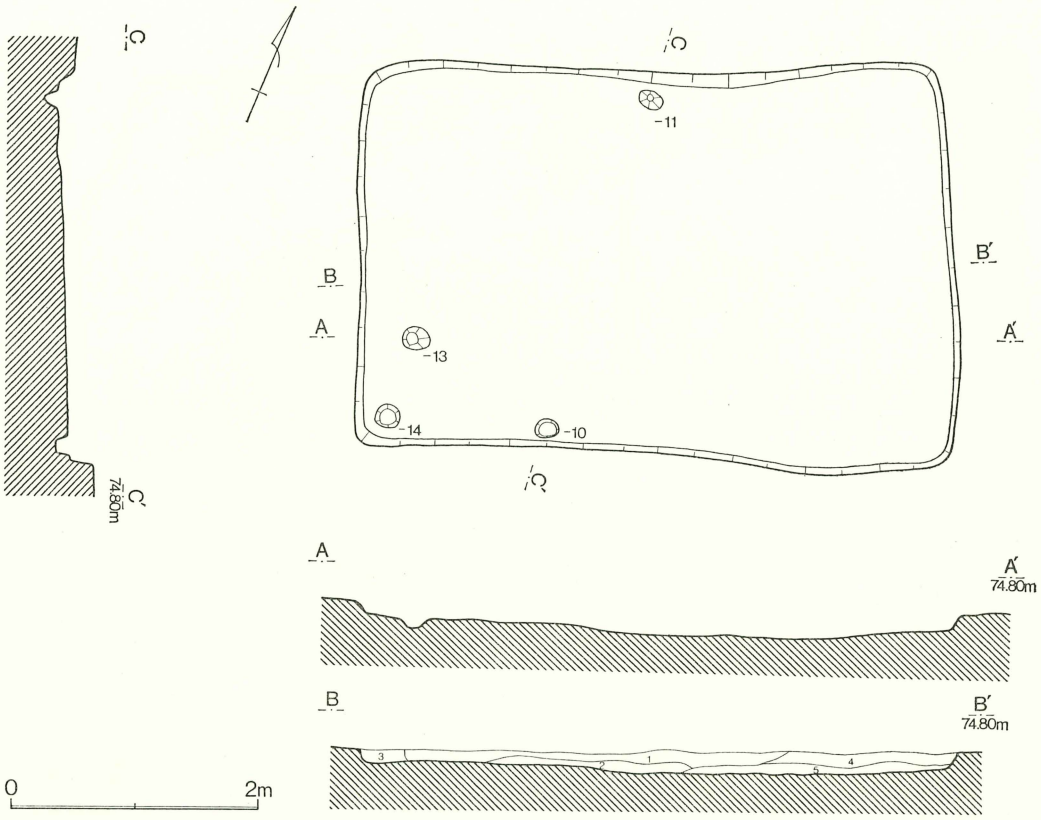
出土遺物は、諸磯b式の浮線文土器が検出されて全体としての量は少数であった。

第6号住居址（第7図）

E、F—8区に位置する。長軸約4.8㎞短軸約3.8㎞の長方形のプランである。壁高は約10㎝前後と浅いものであった。床面は軟弱な状態であった。柱穴は南西コーナー部に3ヶ所、北壁中央部に1ヶ所検出され、深さは10㎝前後を測る。炉址は検出されていない。

覆土の堆積は、第1層明褐色土、第2層黄褐色砂質土、第3層黄褐色砂質土（第2層）より黄色味が強い。第4層暗褐色土、第5層茶褐色土であった。

出土遺物は諸磯b式土器である。



第7図　第6号住居址

第7号住居址（第8図）

F—8区に位置する。長軸約4.8 m、短軸約3.8 mの不正方形を呈している。南西コーナー部には大きな攪乱を受けている。壁高は西側で約20cm東側で約10cmを測る。床面は平坦で軟弱な状態である。床面の中央には径約90cmの掘り込みが検出され、柱穴は10本検出され深さは6～14cmを測る。焼土の検出はなく炉址は不明である。

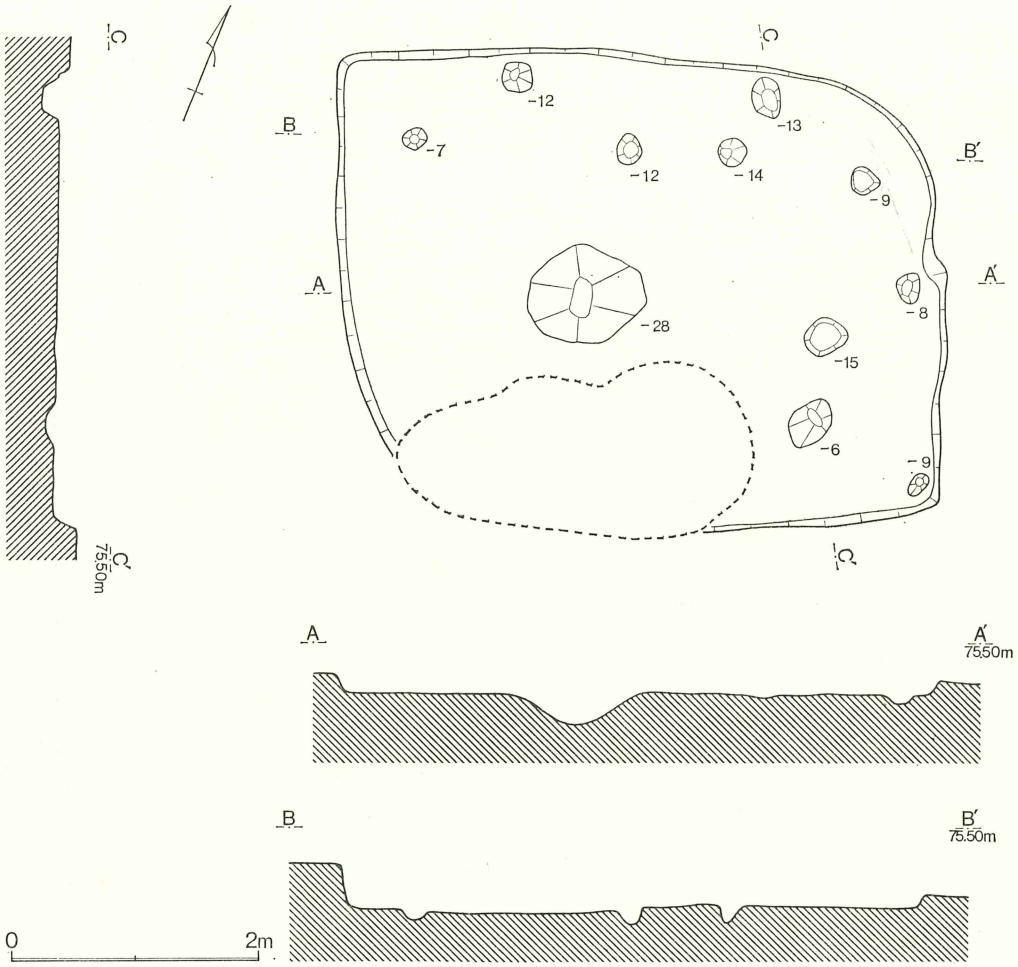
遺物は諸磯a、b式土器が出土した。

第8、12号住居址（第9図）

G—10区に位置する。調査段階の後半で2軒の重複が判明したため第12号住居址及び全体のプランは不明な部分が多い。短軸は約5.4 mで、南壁部は約10cmの掘り込みをもつ、床面は軟弱で傾斜の強いものである。埋甕が2ケ所検出され各々の住居址に帰属する。柱穴は7本検出され深さは8～17cmのものである。東壁部には径1 mの土壙状の落込みが検出されている。

覆土の状態は、第1層暗褐色砂質土、第2層黄褐色砂質土、第3層茶褐色砂質土、第4層明褐色砂質土であり、第1層が12号住居址の覆土である。

遺物の出土は、第8号住居址では南半分に多く検出され、床面に近い状態のものが多い。第12号住居址では第1層の上面で集中的に出土している。第8号住は諸磯a式、12号住は諸磯b式期



第8図　第7号住居址

第9号住居址（第10図）

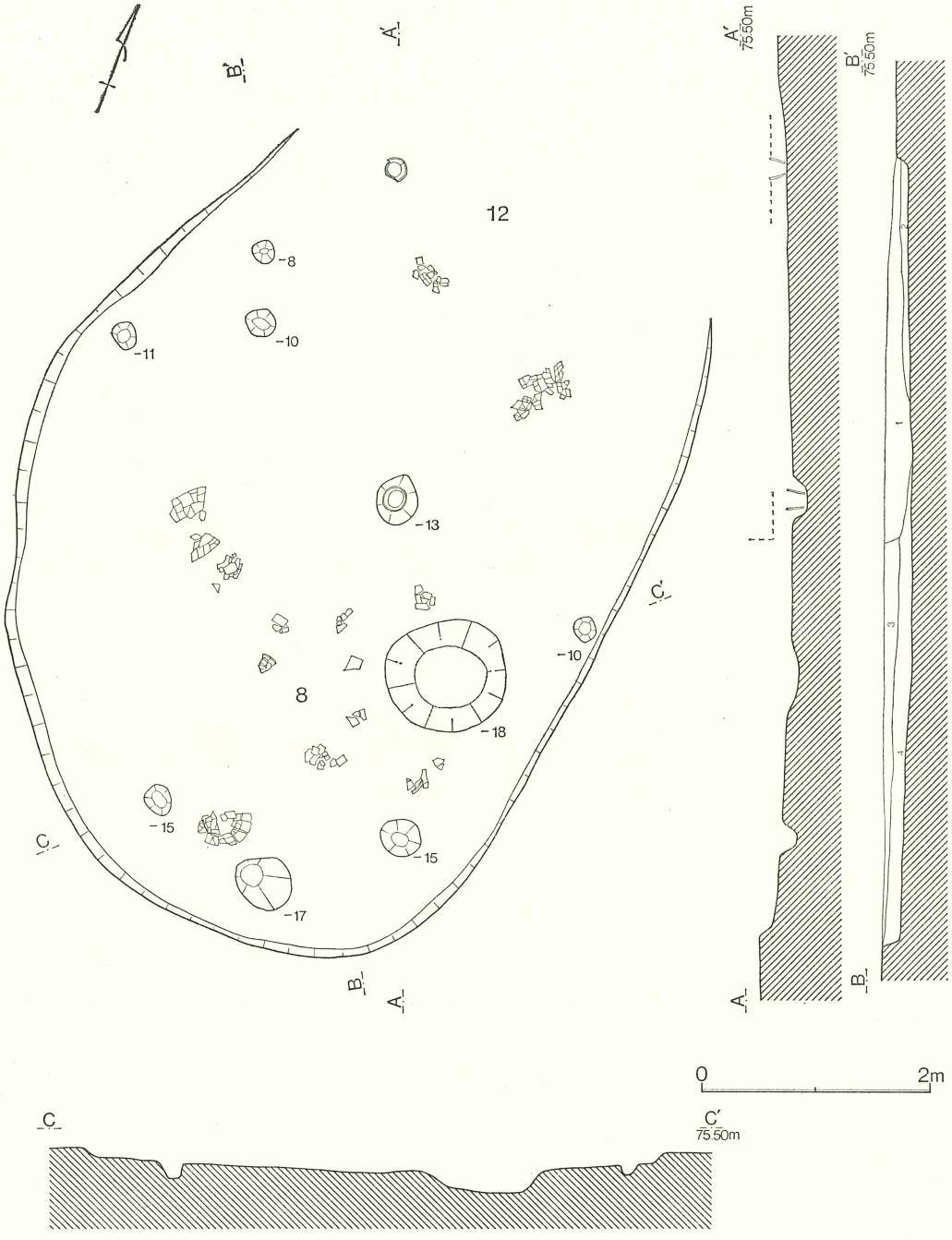
F—9区に位置する。長軸約5.3 *m*、短軸約3.3 *m*で各コーナー部は丸味をもった楕形を呈している。壁高は10～15*cm*前後で床面は中央部に向い窪んでいる。柱穴は9本検出され程方形に結ばれているもので深さは8～15*cm*を測る。中央部から西に寄ったところで楕円形の落込みが検出されている。焼土の検出は無く炉は不明であった。

覆土の堆積は、暗褐色砂質土であり分層の不明瞭な土であった。

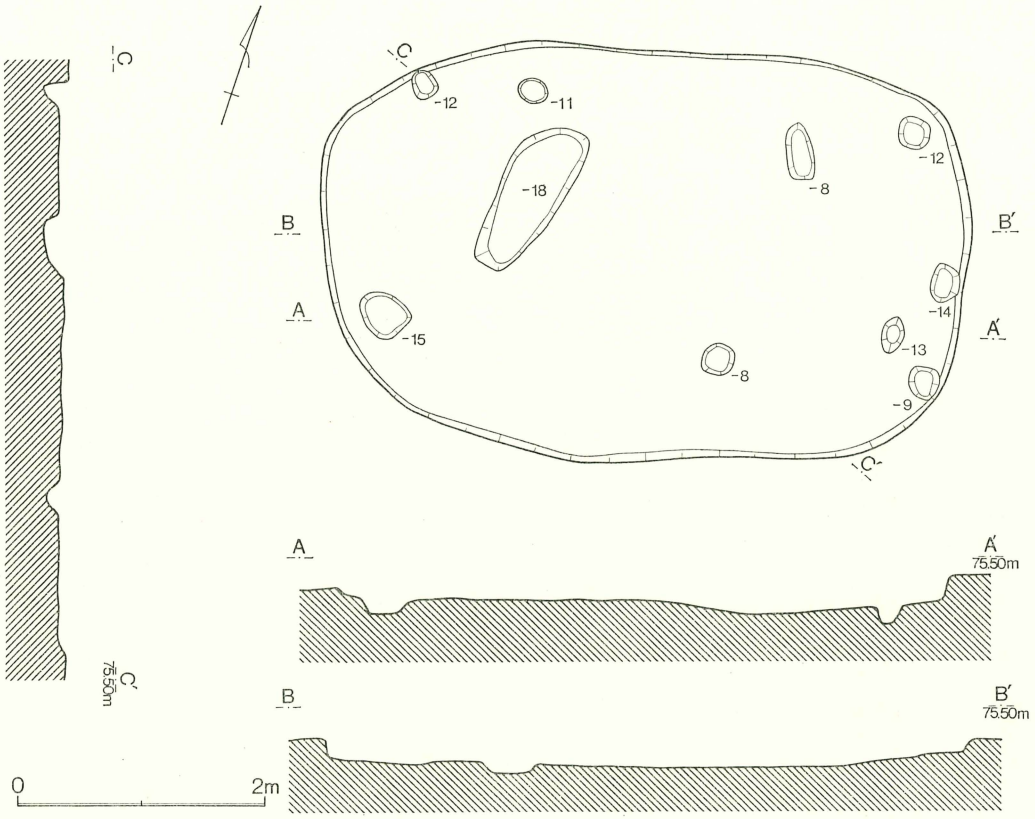
遺物は、諸磯b式土器が出土した。

第10号住居址（第11図）

1—12区で調査区の西端に位置している。プランは長軸約5.1 *m*、短軸約4 *m*の不整方を呈している。面壁の中央部には第26号土壙と重複している。壁高は約15*cm*前後を測る。床面は西辺に向って傾斜して全体に軟弱な状態であった。柱穴は中央部に1本、北、南壁に各2検出され、深さは9～20*cm*を測る。焼土の検出は無く炉は不明である。


A'
B'
12
-8
-10
-11
-13
-10
-18
8
-15
-15
-17
C
C'
A
B
A'
75.50m
B'
75.50m
1
3
4
0
2m
C
C'
75.50m

第3図　第3号住居址



第10図　第９号住居址

覆土の堆積状態は、第１層黄褐色土、第２層褐色土で炭化物を含む。第２層黄褐色砂質土、第４層攪乱、第26号土壙の覆土は、第５層褐色土、第５層明褐色土、第６層黄褐色砂質土、第７層黄褐色土である。

遺物の出土は、諸磯ｂ式土器が出土した。

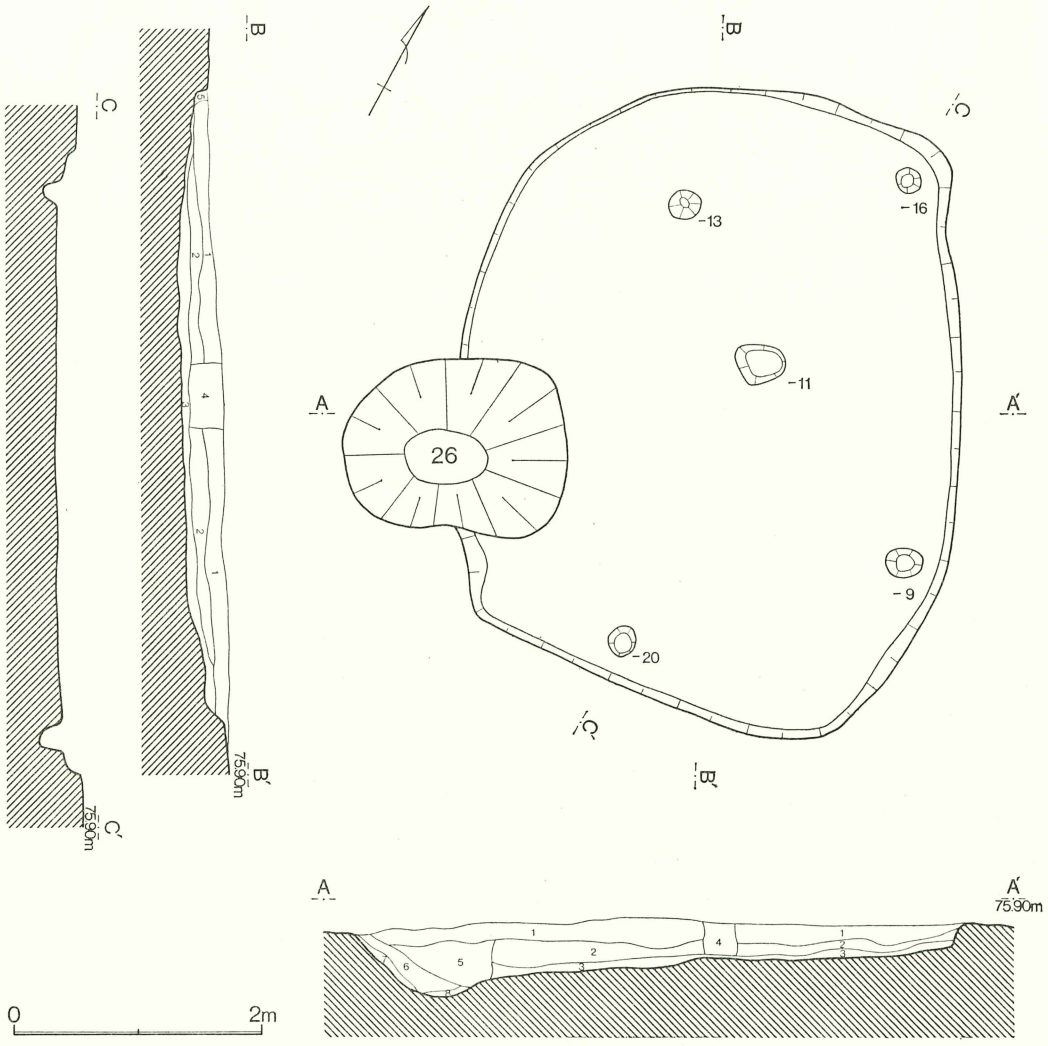
第11号住居址（第12図）

Ｃ、Ｄ―５区に位置する。西壁部には第６、７、８号土壙と重複している。一辺は約５ｍの方形のプランをもち、壁高は約15cm前後を測る。床面は平坦である。柱穴及び炉址は検出されていない。中央部には土壙状の落近みが検出されているが性格は不明である。

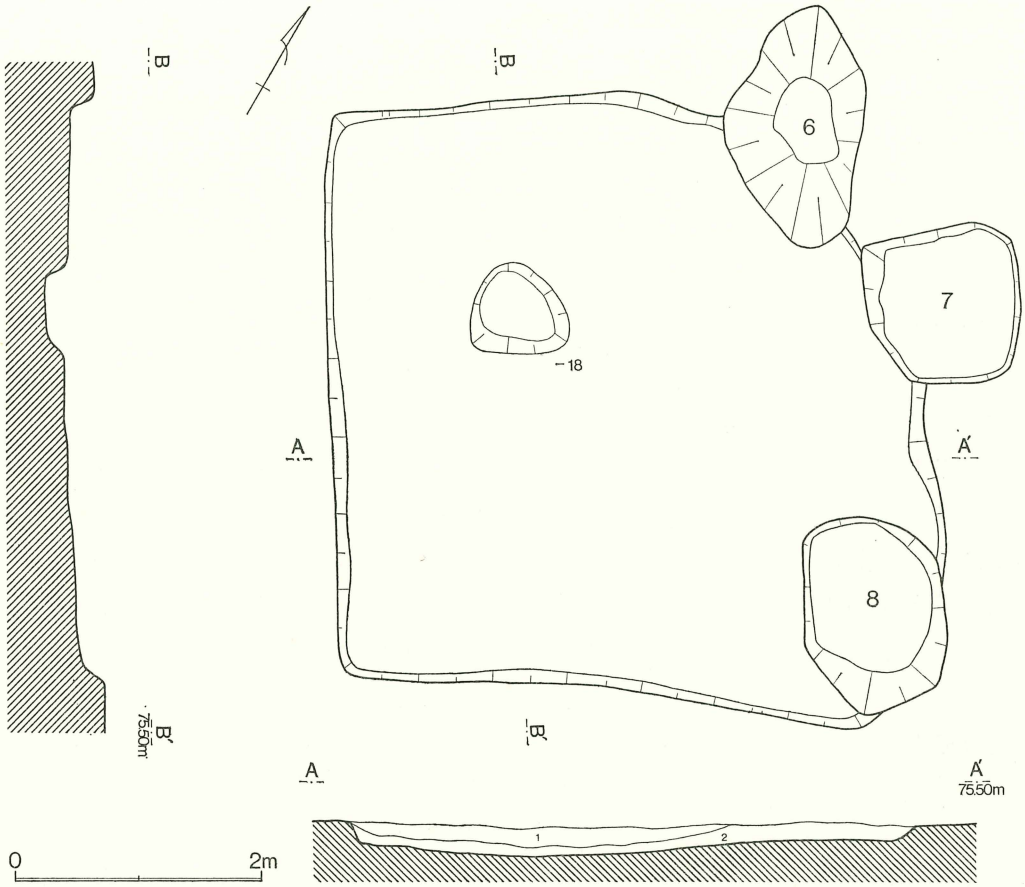
覆土の堆積は、第１層黒褐色砂質土、第２層黄褐色砂質土である。

遺物の出土は諸磯ｂ式土器が検出された。

（曾根原裕之）



第11図　第10号住居址



第12図　第 11 号 住 居 址

2. 土　　壙

第1号土壙（第13図）

C—4区に位置する。長軸約150㎝、短軸約100㎝の楕円形を呈して、深さは約50㎝を測る。出土遺物は、諸磯b式の沈線文土器が出土している。

第2号土壙（第13図）

C—3区に位置する。長軸約160㎝、短軸約80㎝で深さは約25㎝を測り楕円形のプランを呈す。出土遺物は、諸磯b式の爪形文の土器が出土した。

第3号土壙（第13図）

C—4区に位置する。径約70㎝の円形を呈して、深さは約10㎝を測る。出土遺物は、底面より若干浮いた状態で、諸磯b式の浅鉢形土器が出土した。

第4号土壙（第13図）

C、D—4区に位置する。長軸約140㎝、短軸100㎝を測る楕円形を呈している。深さは約10㎝である。出土土器は、諸磯a式が出土した。

第5号土壙（第13図）

D—4区に位置する。長軸約290㎝、短軸約210㎝の不整楕円形を呈し、深さは約10㎝である。出土遺物は、底面に接して押し壊れた状態で諸磯b式の深鉢形土器が出土した。

第6号土壙（第13図）

第11号住居址と重複している。長軸約180㎝、短軸約110㎝の楕円形を呈している。深さは約40㎝で壁は傾斜が緩かである。出土遺物は検出されていない。

第7号土壙（第13図）

第11号住居址に重複している。長軸約160㎝、短軸110㎝の不整円形を呈し、深さは約20㎝を測る。出土土器は、諸磯a式の沈線文、爪形文の土器が出土している。

第8号土壙（第13図）

第11号住居址に重複している。長軸約160㎝、短軸110㎝の不整楕円形を呈す。深さは約20㎝を測る。出土遺物は諸磯c式土器が出土した。

第9号土壙（第13図）

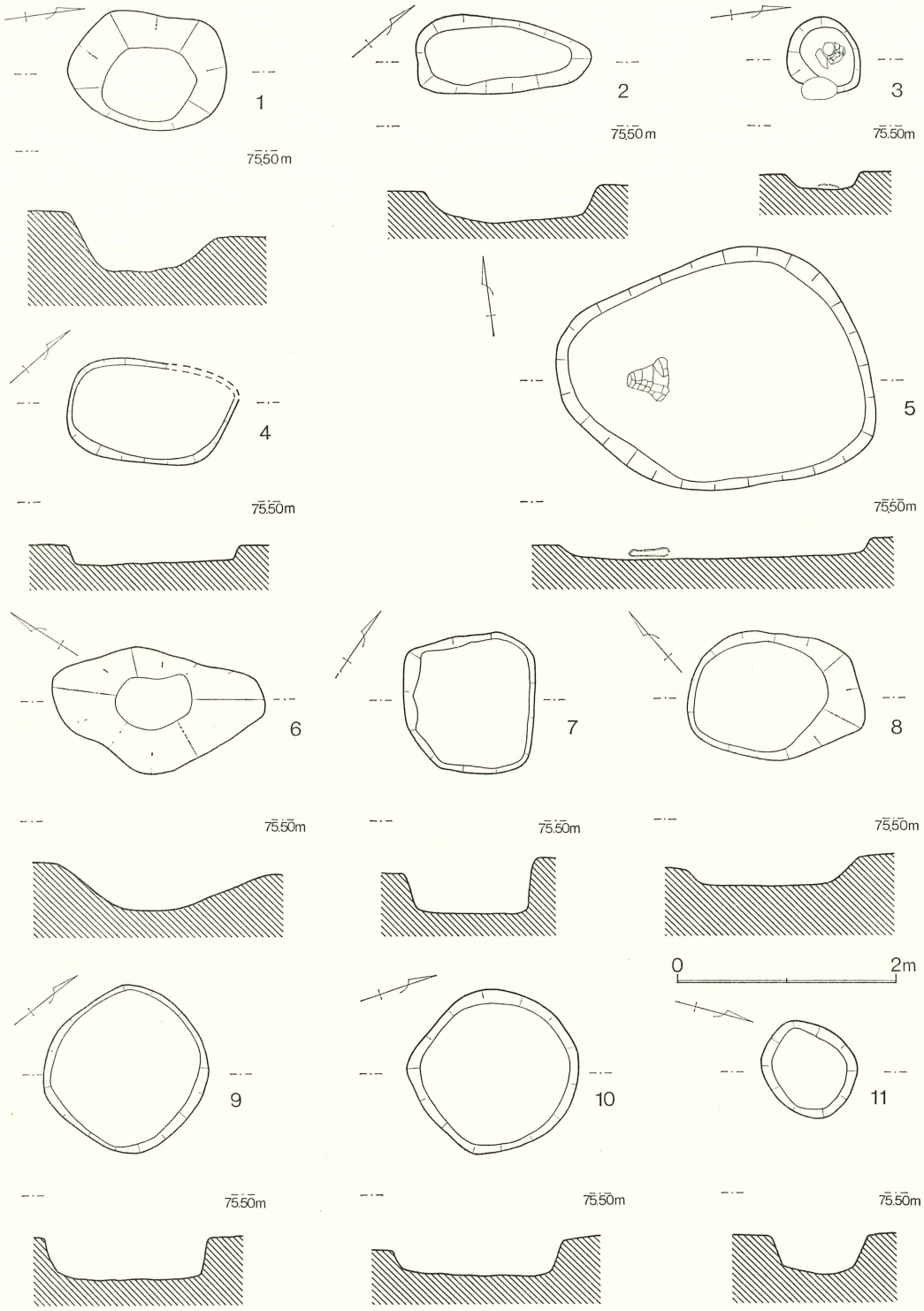
D—5、6区に位置する。径約140㎝の円形を呈している。壁は直線的であり、深さは約30㎝を測る。出土遺物は諸磯c式土器が出土した。

第10号土壙（第13図）

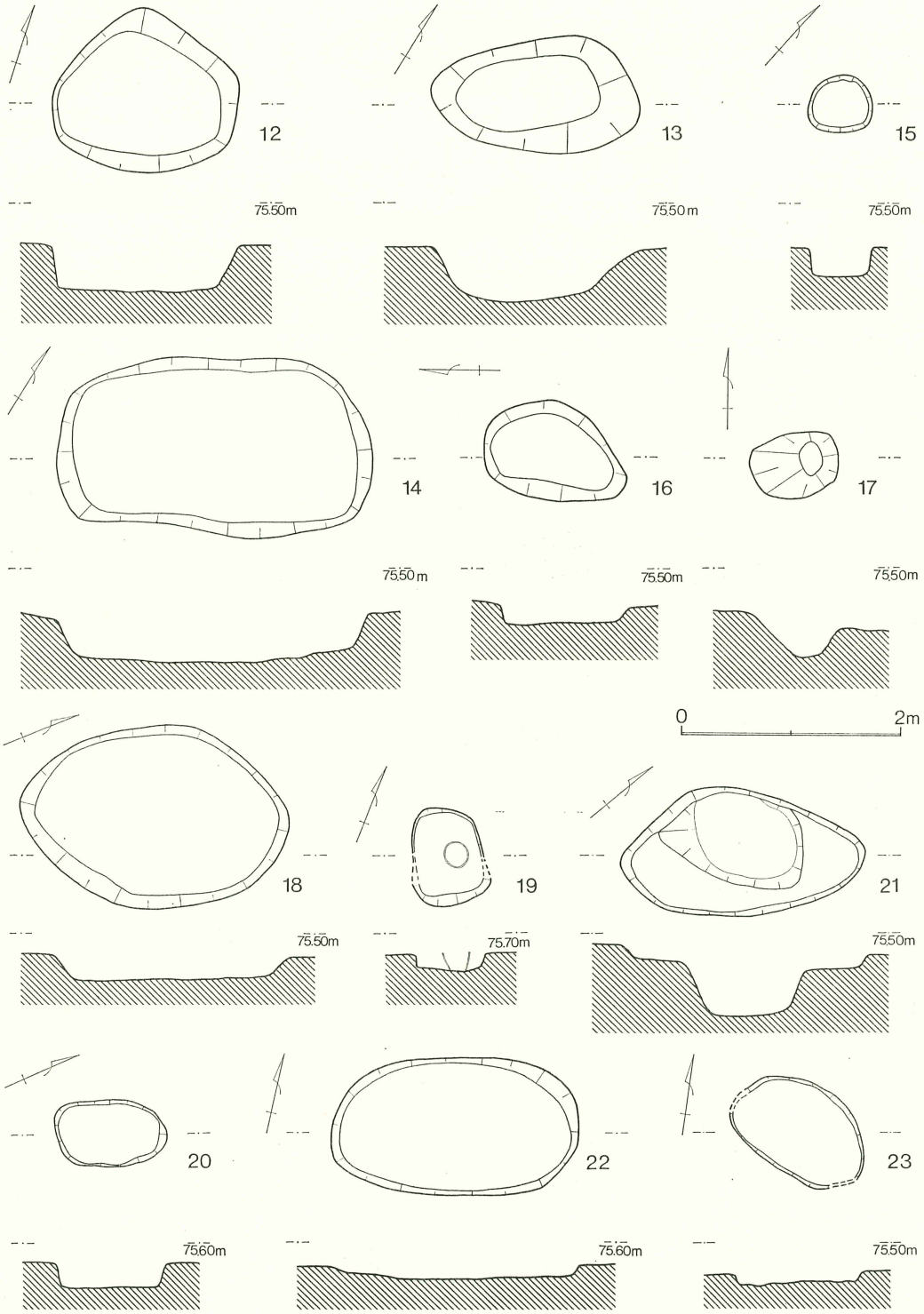
D—4区に位置する。径約140㎝の円形を呈す。深さは約30㎝を測る。出土遺物は諸磯b式の沈線文の深鉢胴下半部が出さした。

第11号土壙（第13図）

D—4区に位置する。径約90㎝の円形を呈し、深さ約30㎝を測る。出土遺物は諸磯b式の浮線文土器が検出されている。



第13図　土　　壙　(1)


12
75.50m
13
75.50m
15
75.50m
14
75.50m
16
75.50m
17
75.50m
0
2m
18
75.50m
19
75.70m
21
75.50m
20
75.60m
22
75.60m
23
75.50m

第14図　土　　壙　(2)

第12号土壙（第14図）

D—4区に位置する。長軸約170㎝、短軸約140㎝の不整形を呈して、深さは約35㎝を測る。出土遺物は加曾利EⅣ式土器が出土した。

第13号土壙（第14図）

D—4区に位置する。長軸約185㎝、短軸約100㎝の楕円形を呈す。深さは約50㎝を測る。壁は傾斜が緩かである。出土遺物は諸磯a式の爪形文を施した土器が出土している。

第14号土壙（第14図）

D—4区に位置する。長軸約280㎝、短軸110㎝の楕円形を呈する。遺物は検出されていない。

第15号土壙（第14図）

C—6区に位置する。径約60㎝の円形で、深さは約20㎝を測る。壁は直線的である。遺物は検出されていない。

第16号土壙（第14図）

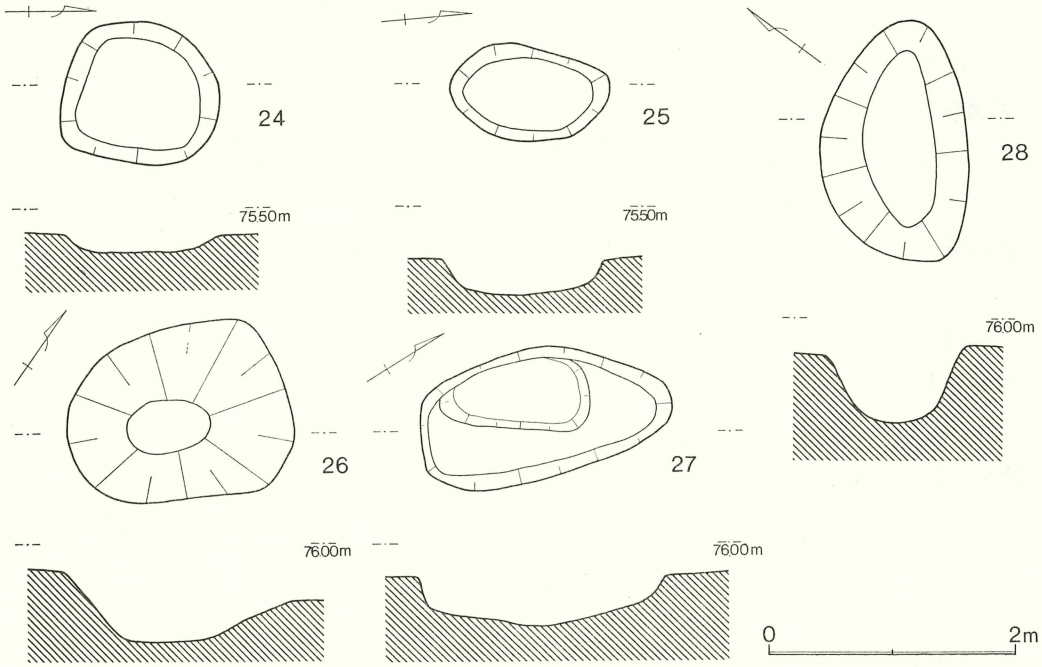
E—6区に位置する。長軸約140㎝、短軸約90㎝の不正楕円形を呈す。深さは約20㎝を測る。出土遺物は諸磯b式土器が検出された。

第17号土壙（第14図）

E—6区第5号住居址の北西コーナー部に重複する。長軸約80㎝、短軸約60㎝の楕円形を呈す。壁の傾斜は緩かで深さは約25㎝を測る。出土遺物は諸磯b式の沈線文土器が出土している。

第18号土壙（第14図）

E—7区に位置する。長軸約240㎝、短軸約170㎝の楕円形を呈す。深さは約25㎝を測る。出土遺



第15図　土　　壙　(3)

物は諸磯ｂ式の沈線文の土器が出土している。

第19号土壙（第14図）

Ｆ—８区に位置する。長軸約90㎝、短軸約60㎝の方形を呈す。深さは約15㎝を測る。底面中央には埋設土器が伴い、胴上、下半部を欠損する諸磯ｂ式土器であった。

第20号土壙（第14図）

Ｆ—７区に位置する。長軸約100㎝、短軸約60㎝の楕円形を呈す。深さは約20㎝を測る。出土遺物は諸磯ａ式の沈線文の土器が検出されている。

第21号土壙（第14図）

Ｆ—８区に位置する。長軸約220㎝、短軸約120㎝の楕円形を呈し、深さは約10㎝を測り、テラスを作り、中央に径90㎝、深さ約45㎝の掘り込みをもつ形態である。出土遺物は検出されていない。

第22号土壙（第14図）

Ｇ—８、９区に位置する。長軸約220㎝、短軸約125㎝の楕円形を呈し、深さは約10㎝を測る。遺物は検出されていない。

第23号土壙（第14図）

Ｆ—９区に位置する。長軸約130㎝、短軸約80㎝の楕円形を呈す。深さは約10㎝を測る。遺物は検出されていない。

第24号土壙（第15図）

Ｇ—９区に位置する。長軸約125㎝、短軸120㎝の方形を呈し、深さは約10㎝を測る。遺物は検出されていない。

第25号土壙（第15図）

Ｇ—10区に位置する。長軸約125㎝、短軸約115㎝の楕円形を呈し、深さは約25㎝を測る。出土遺物は諸磯ｂ式の爪形文土器が検出された。

第26号土壙（第15図）

Ｉ—12区に位置する。第10号住居址の西壁と重複する。長軸約180㎝、短軸約140㎝で方形に近い形状をもち、深さは約50㎝を測る。出土遺物は諸磯ｂ式の沈線文、浮線文土器が検出された。

第27号土壙（第15図）

Ｌ—14区に位置する。長軸約200㎝、短軸約100㎝の楕円形を呈す。深さは約40㎝である。出土遺物は諸磯ａ式の沈線文土器が出土した。

第28号土壙（第15図）

Ｌ—14、15区に位置する。調査区における遺構検出の東端となっている。長軸約190㎝、短軸約120㎝の楕円形で、深さは約65㎝を測る。出土遺物は称名寺式土器が検出されている。

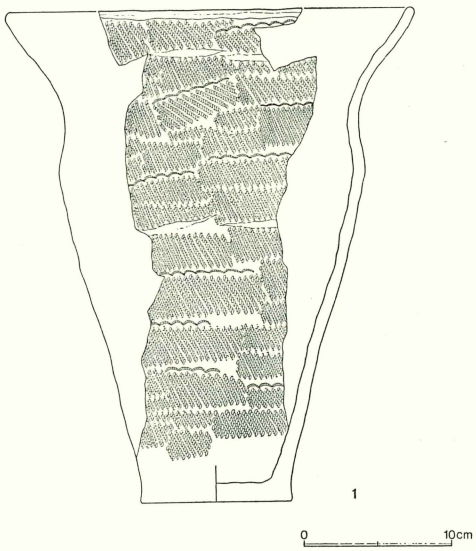
（市川　修）

3. 土　　器

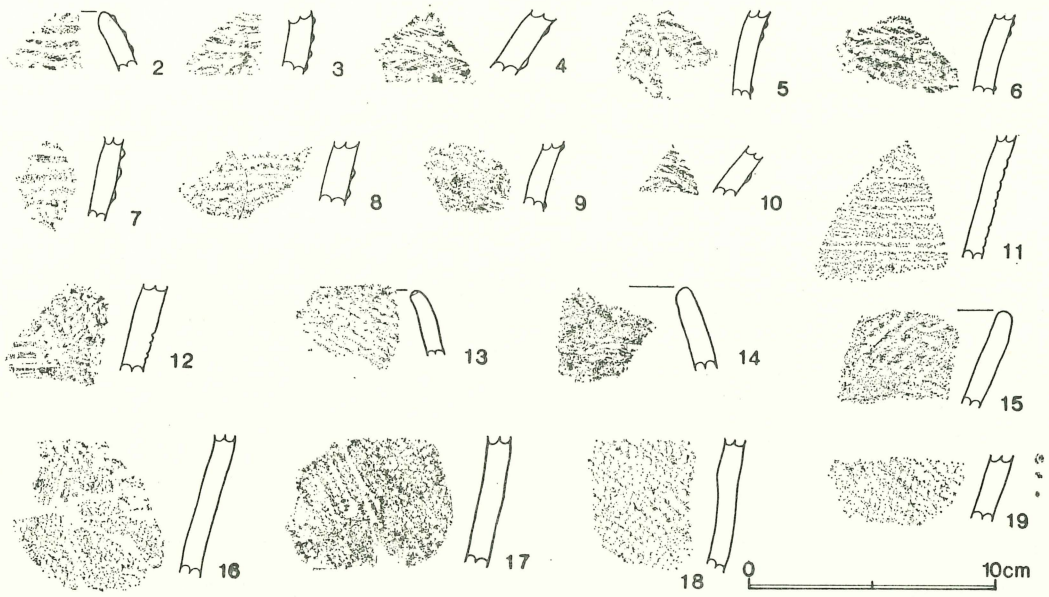
a 住居址出土土器

第１号住居址出土土器（第16・17図）

番号	器　形、文　様　の　特　徴	胎　土、焼　成、色　調	備　　考
1	口径約28cm、器高33cmを測る深鉢。口縁部は直線的に開いて直下の収縮部は膨みを経て胴下半から底部に向う。底部径は10cmである。器面には縄文ＬＲを施文して端部には０段綾絡文が見られる。底部周辺は磨きを加えている。	胎土は緻密である。焼成は良好色調は暗赤褐色。	口縁および胴部¼、底部全周。
2〜4	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁および口縁部破片である。共に地文ＲＬ上に扁平な浮線文を施し浮線上には交互に刻目を加えている。	胎土には片岩、石英、長石を含む。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色。	
5〜10	浮線文をもつ深鉢の胴部破片である。地文はＲＬが施文される。７は３本の浮線が巡る。浮線上には刻目を加えている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は６、７、10が赤褐色、他は暗赤褐色である。	
11・12	深鉢胴部破片である。器面に沈線文を備える。11は、沈線が集合して施されている。地文は共にＲＬである。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は11が黒褐色、12は暗赤褐色。	



第16図　第１号住居址出土土器　(1)



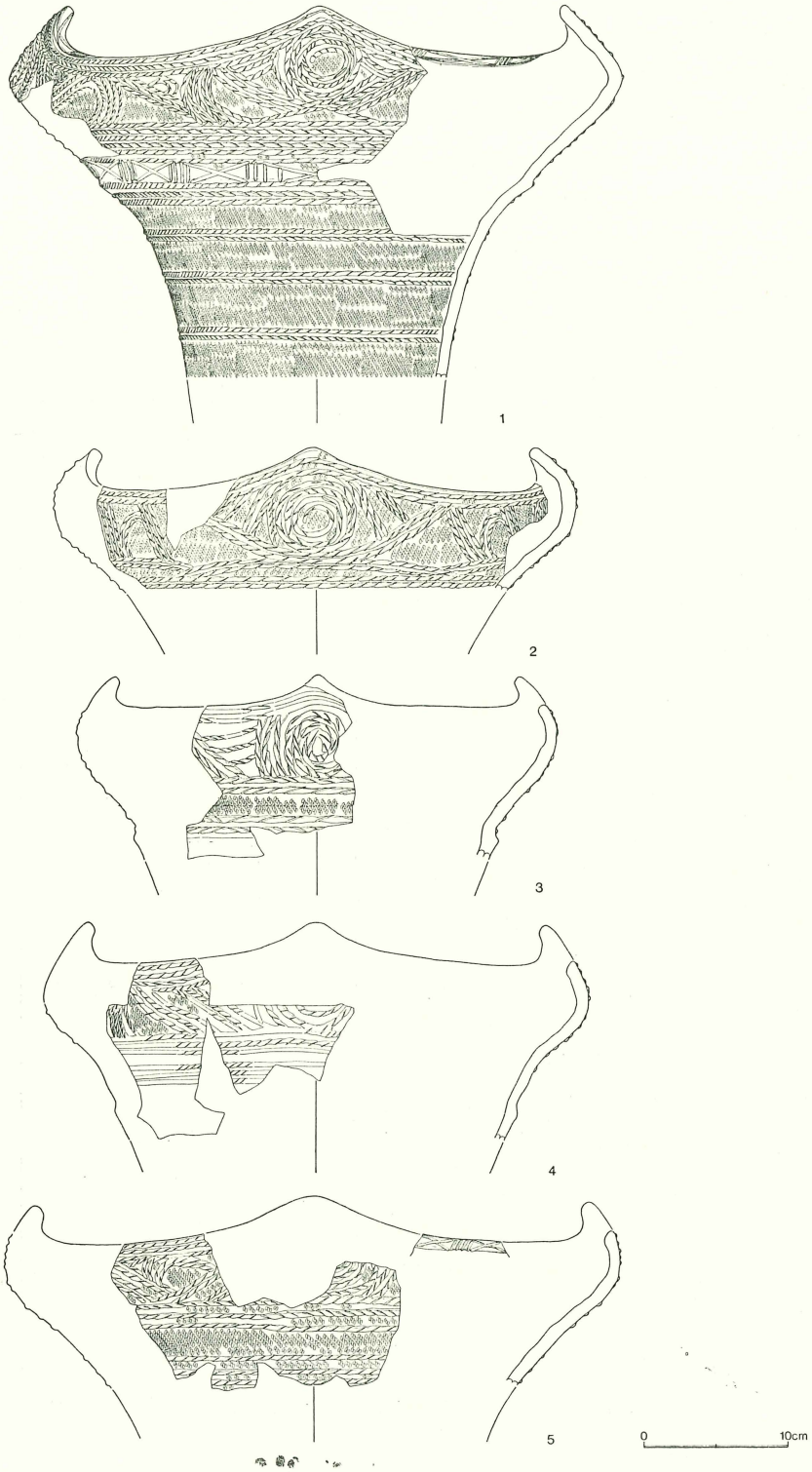
第17図　第１号住居址出土土器　(2)

番号	器　形、文　様　の　特　徴	胎　土、焼　成、色　調	備　　考
13・14	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁部破片である。13は口唇部に刻みを備えている。器面には縄文ＲＬを施すものである。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
15	外反する口縁部破片である。器面には縄文ＬＲを施文している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
16～19	深鉢の胴部破片である。18は弱い収縮を備えた形態を示している。これらは器面に縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は16～18が赤褐色、19は暗赤褐色である。	

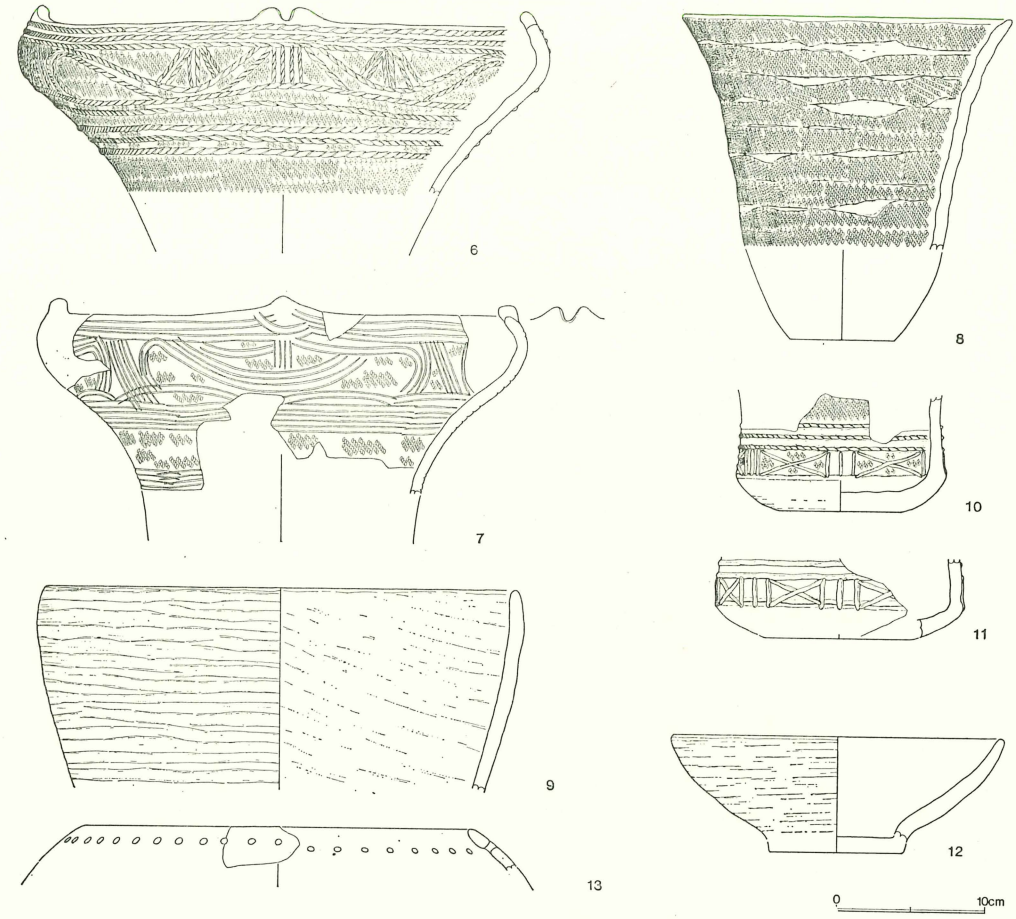
第３号住居址出土土器（第18～22図）

番号	器　形、文　様　の　特　徴	胎　土、焼　成、色　調	備　　考
1	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、山形に尖る４単位の波頂部を備えている。口縁部の内湾は強く直線的である。胴部への移行は緩かな収縮部を作って円筒状の胴部へ向う形態である。器面には縄文ＲＬを地文として、浮線文により構成される。口縁に沿っては３本の浮線が巡り、口縁部下の浮線と共に文様帯を区画して、波頂下には渦巻状に、さらに孤線、	胎土は荒く、片岩が目立つ。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	曲線的に浮線を施し埋め込まれている。収縮部にはX状に貼付される浮線が連続して交点には縦位に4本の浮線が埋め込まれている。胴部には2本1組みの浮線が巡っている。口唇部にも波頂部を起点として連続X状に浮線が巡り、交点には縦位に浮線を埋め込んでいる。浮線上には、交互に方向を異にする鋭い刻目を加えている。口唇および、収縮部の浮線上は無文のままである。		
2	4単位の波頂部をもつキャリパー状口縁の深鉢で口縁部は緩かな内湾を示すものである。口縁および口縁部下には2本の浮線により区画され、波頂下には対孤状に浮線を配して、渦巻状に埋め込んでいる。波底部には曲線的な浮線を施している。浮線上には鋭い刻目を同一方向に施すものである。地文には縄文LRを施文している。	胎土は緻密。石英、長石、チャートを含む。焼成は良好。色調はにぶい橙色で一部黒褐色である。	
3・4	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、胴部との接合部には弱い収縮部を備えている。波頂下には渦巻状に浮線を配し、孤線状の浮線が埋め込まれている。3は、2本1組の浮線が巡る。4は3本1組である。共に浮線上には刻目を加えている。収縮部にはX状に浮線が施されていたものであろう。	胎土は緻密。片岩が目立つ。赤褐色。	炉出土。
5	波頂部は欠損するが、4単位の頂部をもつキャリパー状口縁をもつ深鉢で、口縁部から胴部の移行は直線的な形状を示すものである。口縁および胴部は3本1組みの浮線が巡り、区画内には、波頂部で渦巻状に、その他は曲線、孤状線が埋め込まれている。浮線上には方向を異にする刻目を加えている。口唇部には連続X状に浮線を配して3本の浮線が連結部を縦位に分断している。浮線上は無文である。地文には縄文RLを施している。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗褐色。	
6	平口縁で、4ヶ所に頂部を2つもつ小突起を画したキャリパー状口縁をもち、円筒状の胴部へ直線的に移行する。口縁および口縁部下には3本の浮線により区画されて、突起下には縦位の浮線がそれを起	胎土は荒く、片岩が目立つ。焼成良好。色調は暗赤褐色。	



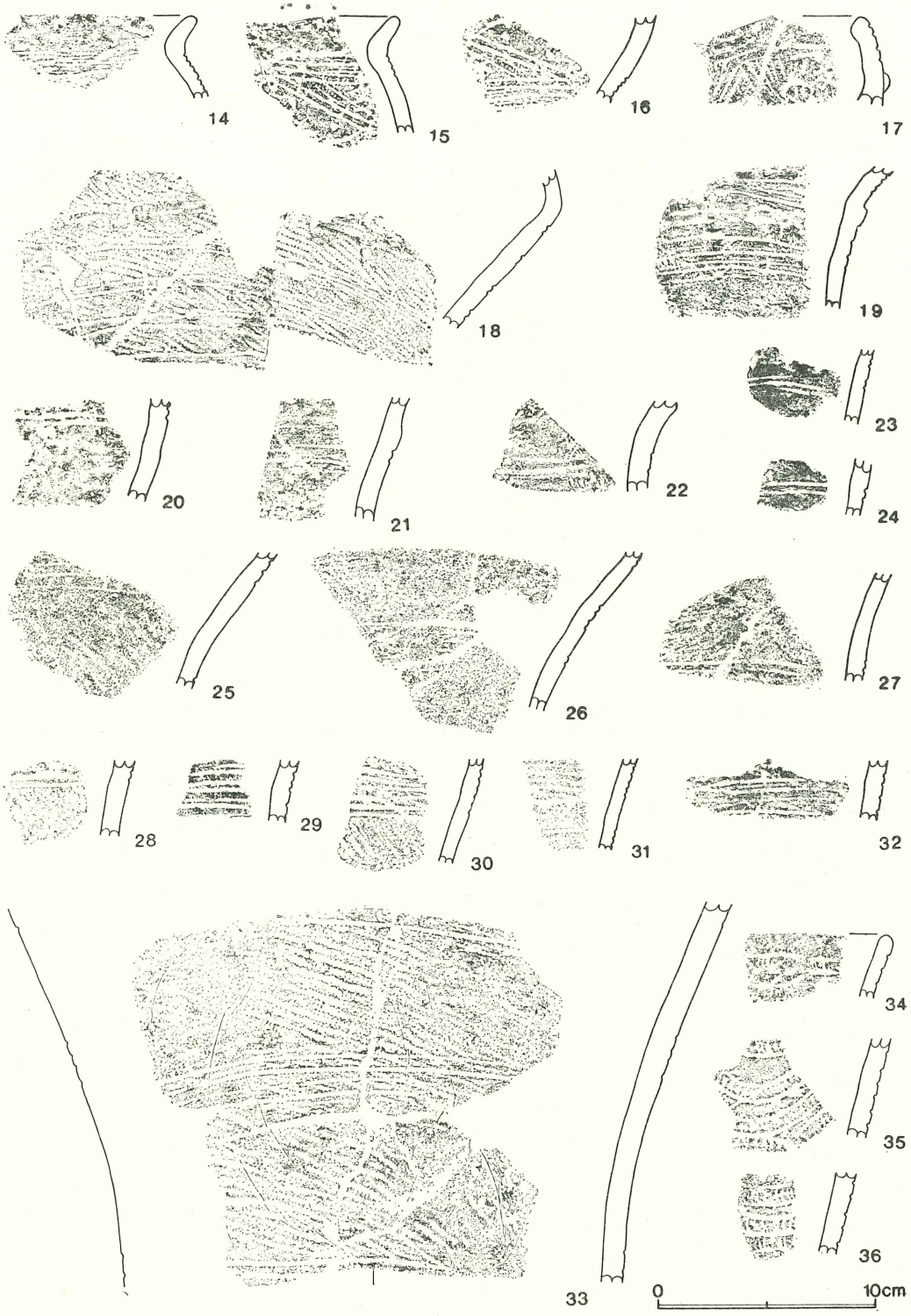
第18図　第３号住居址出土土器　(1)



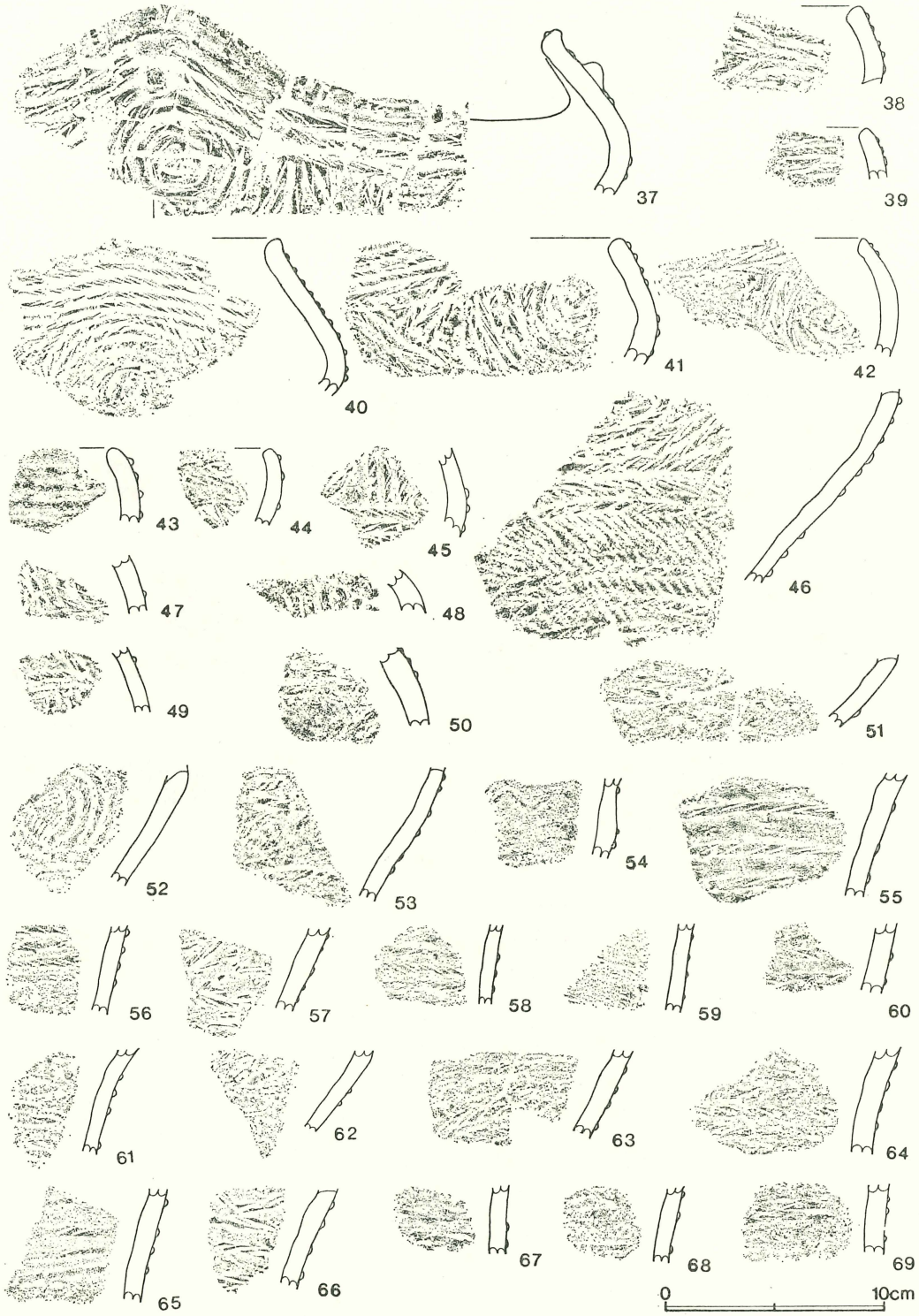
第19図　第３号住居址出土土器　(2)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	点に曲線的なモチーフを描いている。地文には縄文ＲＬが施文されている。		
7	形態は６と同じである。突起は山形の小突起と、６と同一の頂部を２つもつ小突起が対応して配されている。文様は平行沈線により描かれている。口縁および口縁部下には沈線が巡り区画帯をつくり、突起下を起点に直線、孤線、曲線的モチーフを描くものである。地文には縄文ＲＬを施文している。	暗赤褐色。	
8	平口縁で外反の強い深鉢である。口唇部は尖った形状を示す。口径22*cm*。器面には縄文ＲＬを施文している。器面は凹凸が激しい。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成良好。色調は暗赤褐色。	

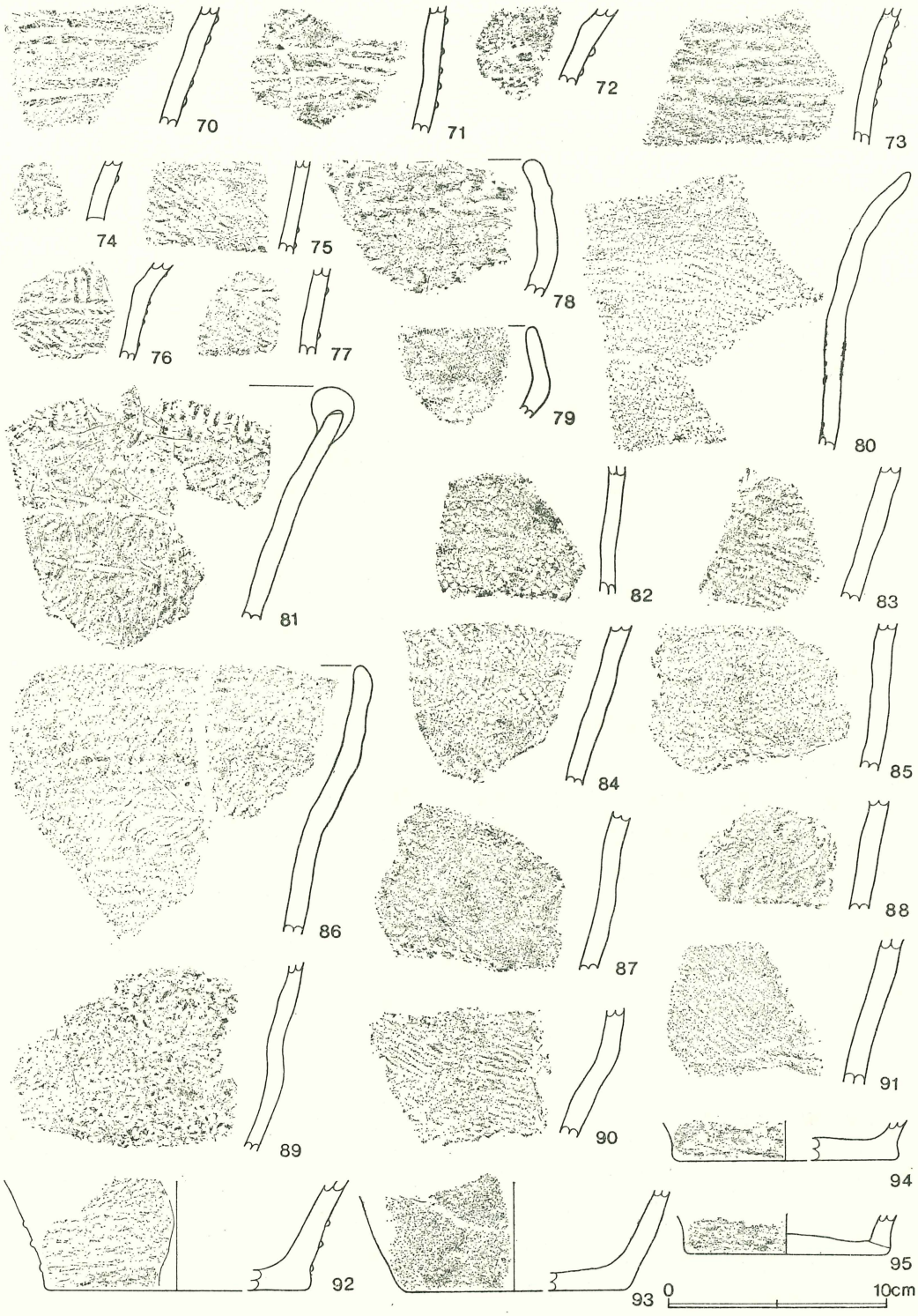
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
9	平口縁で、口縁部は内湾気味の形態を示している。口径約32cmである。器面は無文で、ヘラ状工具により削られた荒い面を作りだしている。内面も同様に荒れている。	胎土は荒い。片岩が目立つ。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
10	キャリパー状口縁の深鉢の底部である。共に胴部から底面の移行部には稜を作りだす形態である。10は地文に縄文ＲＬを施し、11は無文である。浮線は連続Ｘ状に施され、３本組の縦位の浮線が区画している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に赤褐色。	
12	鉢形である。口径約22cmである。器面は荒れている。内面は研磨を加えている。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
13	口縁部が強く内湾する無文列孔土器である。	胎土は緻密である。焼成は良好色調は赤褐色である。	
14〜16	口縁部が球状に膨むキャリパー状口縁をもつ深鉢で口縁は外折している。口縁下と口縁部下には平行沈線が区画して、直線的なモチーフを斜方向に施文している。	胎土は荒く、片岩が目立つ。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
17	キャリパー状口縁をもつ深鉢で波状形態をもつ口縁部の破片である。波頂下にはボタン状の突起を配している。口縁に沿っては平行沈線が巡る。	胎土は緻密。焼成良好。色調は灰褐色である。	
19〜33	胴部破片を一括する。すべて平行沈線文を備えるものである。18は口縁部下の破片、19は収縮部に相当する。他は胴部下半の破片であろう。沈線は、一定の巾をもつ18、26、33の他は、集合されて施文されている。地文には全て縄文ＲＬが施されている。	胎土は、21、26、27、32、33は荒く、片岩が目立つ。焼成良好。色調は26が黒褐色、24、25、31がにぶい橙色。他は、暗赤褐色である。	
34〜36	爪形文を施した深鉢である。34は平口縁の口縁部破片である。爪形文はＣ字状に連続して施文され、35、36は孤状に構成している。	胎土は緻密。焼成は良好。35は暗赤褐色、34、35はにぶい橙色。	
37〜53	キャリパー状口縁をもつ深鉢。浮線文を施すもので口縁部破片を一括する。波頂下の浮線の構成は渦巻状に施されている。37には瘤状の突起が配されている。口縁に沿う浮線は40を徐いて３本が巡るもの	胎土は、37、40、41が荒く片岩が目立つ。他は緻密で、石英、片岩、長石、チャートを含有。焼成は良好。38、42、47、48は色調が	



第20図　第３号住居址出土土器　(3)



第21図　第３号住居址出土土器　(4)



第22図　第３号住居址出土土器　(5)

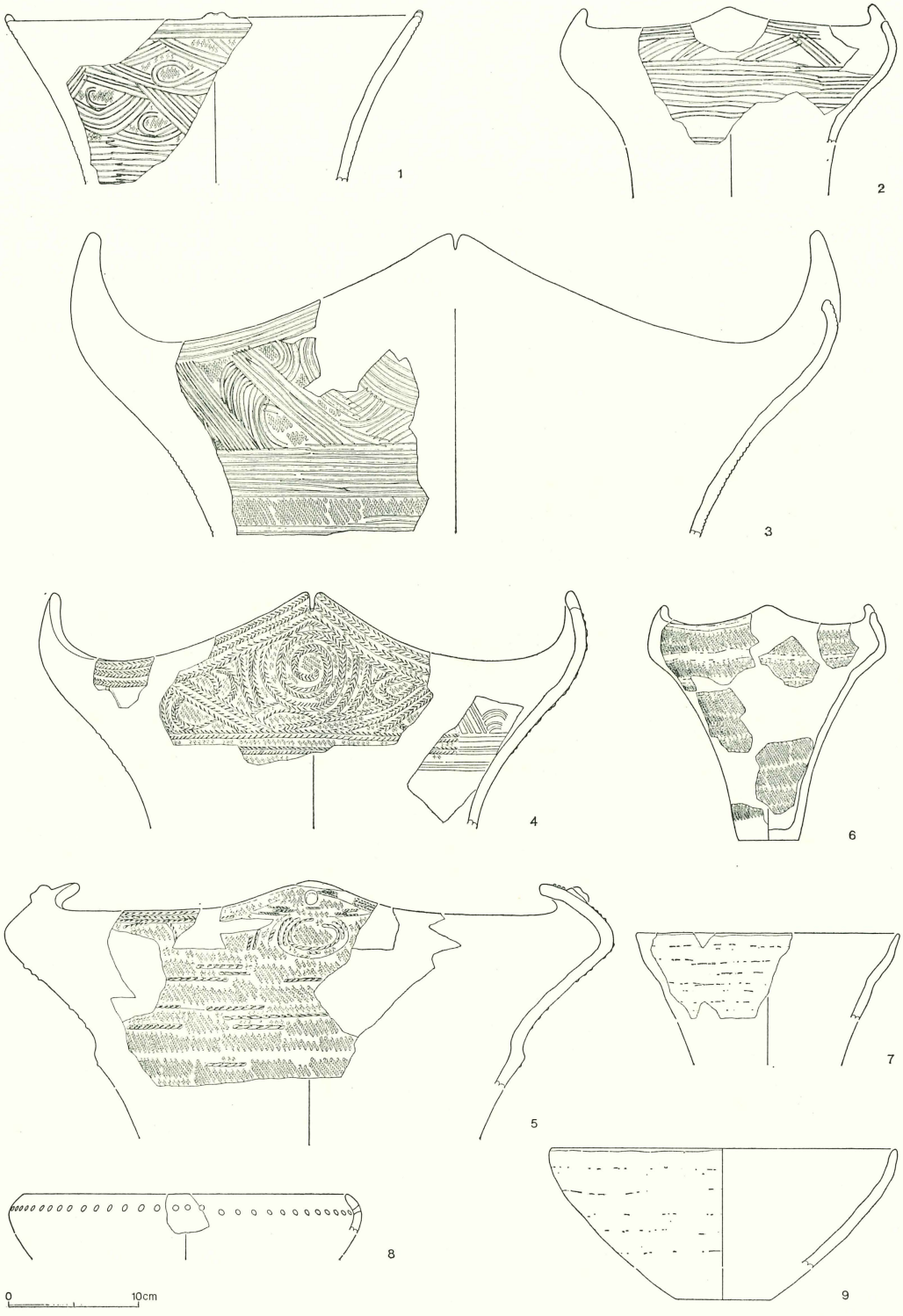
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	である。浮線上には刻目を施し40は同一方向、その他は交互に加えている。37の口唇部にはX状に無文処理の浮線が連続して交点には3本の浮線を配している。地文には縄文RLが施文されている。	黒褐色、43が赤褐色、他は暗赤褐色である。	
54	収縮部の破片である。波状に連続する浮線文で刻目を施さず無文である。	胎土は緻密。焼成良好。色調は黒褐色。	
55〜75・77	胴部破片を一括して浮線文をもつもの。浮線文は2〜3本を1組として施文される。全て浮線上には刻目を加えている。刻目は同一方向のものと交互に加えるものがある。地文には縄文を施している。	胎土は55、63、67〜69は荒く、片岩が目立つ。焼成は共に良好。色調は71、73、76、77がにぶい橙色、他は暗赤褐色である。	
76	収縮部の破片でX状と縦位に浮線文をもっている。胴部には刻目を加えた浮線が巡る。	胎土は緻密。焼成良好。色調は器面が暗赤褐色。浮線はにぶい橙色。	発色効果の異なる粘土を用いている。
78・79	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、無文のものである。78は内湾形態、79は内折する口縁部形態で78は器面に凹凸面を残している。	胎土は荒く片岩、黄色粒子が共に目立つ。焼成良好。色調は暗赤褐色である。	
80〜91	縄文を施文する深鉢を一括する。80は、波状口縁で外反の強い形態、81は口唇部に小突起を備え刻目を加えた外反形態、86は直立気味のものである。87 88は弱く収縮する胴部破片である。縄文の原体は、81、86がLRで、他はRLにより施文されている。	胎土は81、86で片岩が目立って含有。他は緻密。焼成は良好。色調は80〜82、86が黒褐色、91がにぶい橙色、他は暗赤褐色である。	
92〜95	底部破片である。92は浮線が3段巡っている。他は縄文RLが施文されている。93を除いて外に開く形態のものである。	胎土は92、94が荒い。焼成は良好。色調は、93がにぶい橙色、他は暗赤褐色である。	

第4号住居址出土土器（第23〜25図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	平口縁の深鉢で、口縁部は強い外反する形態を備え、4ヶ所に頂部を2つもつ小突起が配されている。口縁及び胴部上半には平行沈線が区画を加え、孤線の連続を施し、空白部に曲線を埋め込んでい	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	

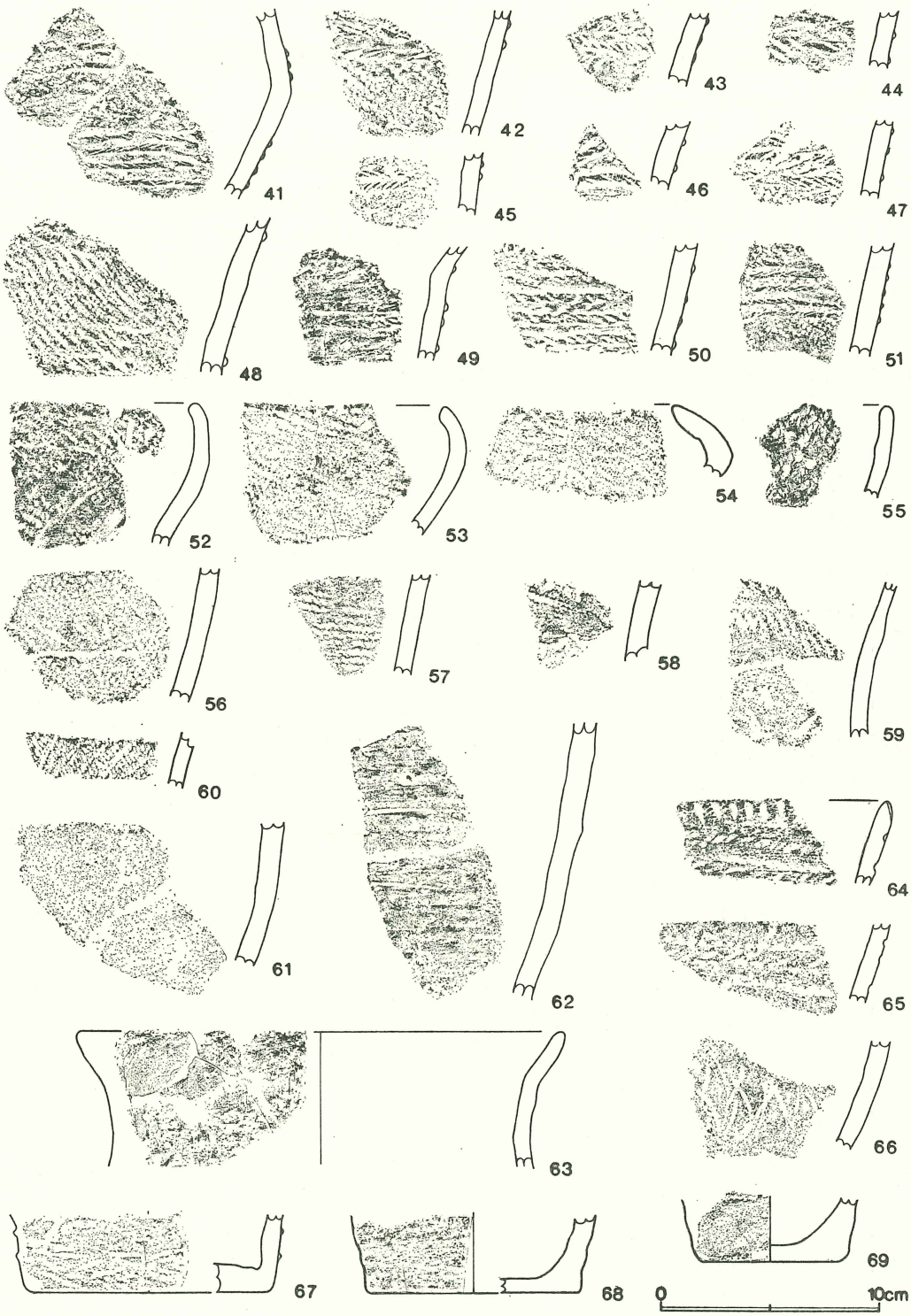
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	る。地文には縄文ＬＲを施文している。		
2	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、口縁部は丸味をもつ形態である。平行沈線の区画内には、直線化した沈線を埋める。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
3	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、４単位の波状口縁で大型の器形をもつ土器である。口縁および胴部上半の平行沈線は文様帯を区画し曲線、孤線直線の組み合せた文様を施文している。地文縄文はＲＬである。	胎土は荒く片岩が目立っている。焼成は良好。色調はにぶい橙色。	
4	キャリパー状口縁もつ深鉢で、波頂部にはスリット状に刻目を加える。口縁部は直立気味の形態である。浮線は波頂では大きな渦巻状に貼付されている。浮線は２本を１組みとして施され、方向を異にする細密な刻目を加えている。地文として縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調はにぶい橙色。	
5	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、口縁部の内湾の強い形態をもち、胴上半に収縮部を備えている。波頂下には瘤状の突起を配している。口縁および胴部の浮線は３本組みである。波頂下の文様構成は渦巻状である。浮線上には刻目を加えている。地文として縄文ＲＬが施文されている。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良。色調はにぶい橙色。	
6	キャリパー状口縁をもつ小型の深鉢である。口縁は内折気味の形状を示す。器面には縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
7	外反の強い平口縁の深鉢で口縁部下に弱い収縮部をもつ。口唇部は尖っている。器面は無文で、調整痕を残している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
8	列孔無文土器で、口縁部は内湾している。列孔は稜部に穿たれている。口径約25㎝を測る。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良。色調は暗赤褐色。	
9	鉢形で口縁部は直立している。口径は約21.5㎝である。器面は調整痕を横方向に残している。内面は研磨を加えている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は赤褐色。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
10	外反する平口縁深鉢である。口縁に沿って平行沈線が施文されている。	胎土は緻密。焼成は色好。色調は暗赤褐色。	
11〜13	キャリパー状口縁をも深鉢の口縁部破片で波状口縁の波底部分に相当しよう。口縁は弱く内湾する形態である。口縁に沿って平行沈線が巡っている。11は曲線的、12、13は直線化する沈線が施文されている。地文には縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色である。	
14	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁部の破片であるが、沈線の構成が異質で口縁部には木ノ葉状の沈線が施文されている。鉢系の土器か？	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
15	波頂部下の破片で、沈線は渦巻状の構成である。地文縄文の原体は不明。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は赤褐色。	
16〜22	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、口縁部下および胴部の破片で沈線文の土器を一括する。16、19は口縁部直下に相当する。沈線は２〜３列構成で巡る。地文の縄文は、16がＬ、17〜21がＬＲ、22はＬである。	胎土は18、19、22が荒く片岩が目立つ。他は緻密。色調は16が赤褐色、他は暗赤褐色。	
23〜28	キャリパー状口縁の深鉢で浮線文の口縁部の破片である。23は平口縁、24〜26は波状口縁の土器と見られる。23は渦巻状の構成で、口唇部には連続Ｘ状に浮線が貼付され、従位に浮線を埋め込んでいる。他は曲線、孤線構成の浮線である。浮線上には刻目を加えている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は26、27がにぶい橙色、他は暗赤褐色である。	
29〜51	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁部下および胴部破片である。34、35は口縁部下である。41は胴部中位が膨む形態を示し、49は収縮部の破片である。浮線は２〜４本組みとなっている。浮線上には刻目を交互に方向を変えて施文している。地文としては30がＬＲ、他はＲＬである。	胎土は39、41、45が荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は39、42が黒褐色。他は、暗赤褐色である。	
52〜54	キャリパー状口縁ともつ深鉢の口縁部破片で縄文をもつ土器である。52、53は内湾の弱い形態で54は内湾の強いものである。器面の縄文はＲＬを施文し	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は共ににぶい橙色。	



第23図　第４号住居址出土土器　(1)

第24図　第４号住居址出土土器　(2)



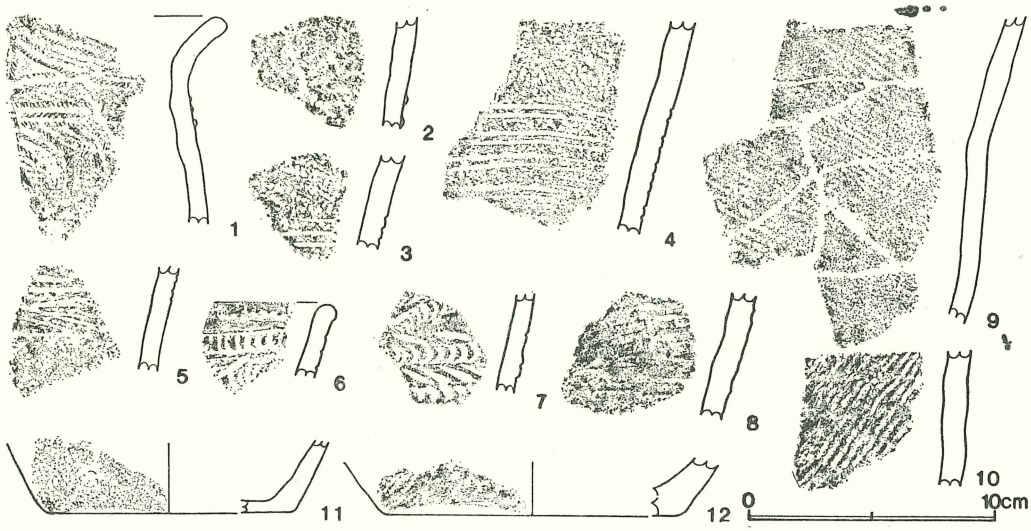
第25図　第４号住居址出土土器　(3)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	ている。		
55	外反する口縁部をもつ深鉢である。器面には縄文無節のＬと施文している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は赤褐色である。	
56〜60	深鉢の胴部破片で縄文施文のものである。縄文原体は56〜59がＲＬ、60がＬＲと施している。	胎土は57が荒く片岩が目立つ。焼成は良く、色調は暗赤褐色である。	
61	深鉢の胴部下半の破片で、底部に向って収縮する。無文である。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色である。	
62	深鉢の胴部破片である。器面にはケズリ痕を横方向に明瞭に残している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
63	平口縁の深鉢で、口縁部下に収縮部をもつ形態である。無文の土器で、口径23cmである。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
64〜66	外反の強い口縁部をもつ深鉢で、同一形態の口縁・口縁部、胴部破片である。64は口縁に沿って縦方向の刻目を加え、65は、変形爪形文が施文されている。66は胴部下半に相当して、貝殻文が連続する。	胎土は緻密。焼成は不良。色調は黒褐色。	浮島式
67〜69	深鉢の底部である。67は浮線が巡り、刻目が加えられている。68、69は縄文ＬＲが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	

第５号住居址出土土器（第26図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	４単位の波頂部をもち、口縁は外反して、口縁部が球状に膨む形態をとる深鉢である。浮線文により構成する。口縁に沿って2.3条の浮線が巡り、口縁下には２本の浮線が区画して口縁部文様帯を画している。文様帯は渦巻状の文様が見られる。浮線上には細かい刻目を加えている。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	同一番形態で沈線文の構成は３号住の14〜15にある。
2	深鉢の胴部破片である。浮線が巡っている。地文には縄文ＬＲが施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
3〜5	深鉢の胴部破片である。沈線文で構成される。地文には縄文ＲＬが施されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は４が赤褐色、他は暗赤褐色。	
6〜7	深鉢の口縁および胴部破片である。器面には爪形文が施文される。６は口縁で１列の爪形文が巡る。７は爪形文間に刻目を加える。	胎土は緻密。焼成良好。色調は共に暗赤褐色。	
8	深鉢の胴部破片である。無文の土器で器面にはケズリ痕を明瞭に残している。	胎土には片岩が目立つ。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
9・10	深鉢の胴部破片で、９は弱い収縮部をもつ形態である。器面には縄文が施され、９はＲＬ、10はＬＲが施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は共に赤褐色。	
11・12	深鉢の底部である。共に開きの強い形態を示している。器面には11が縄文ＲＬ、12はＬＲの原体が施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は共に暗赤褐色。	

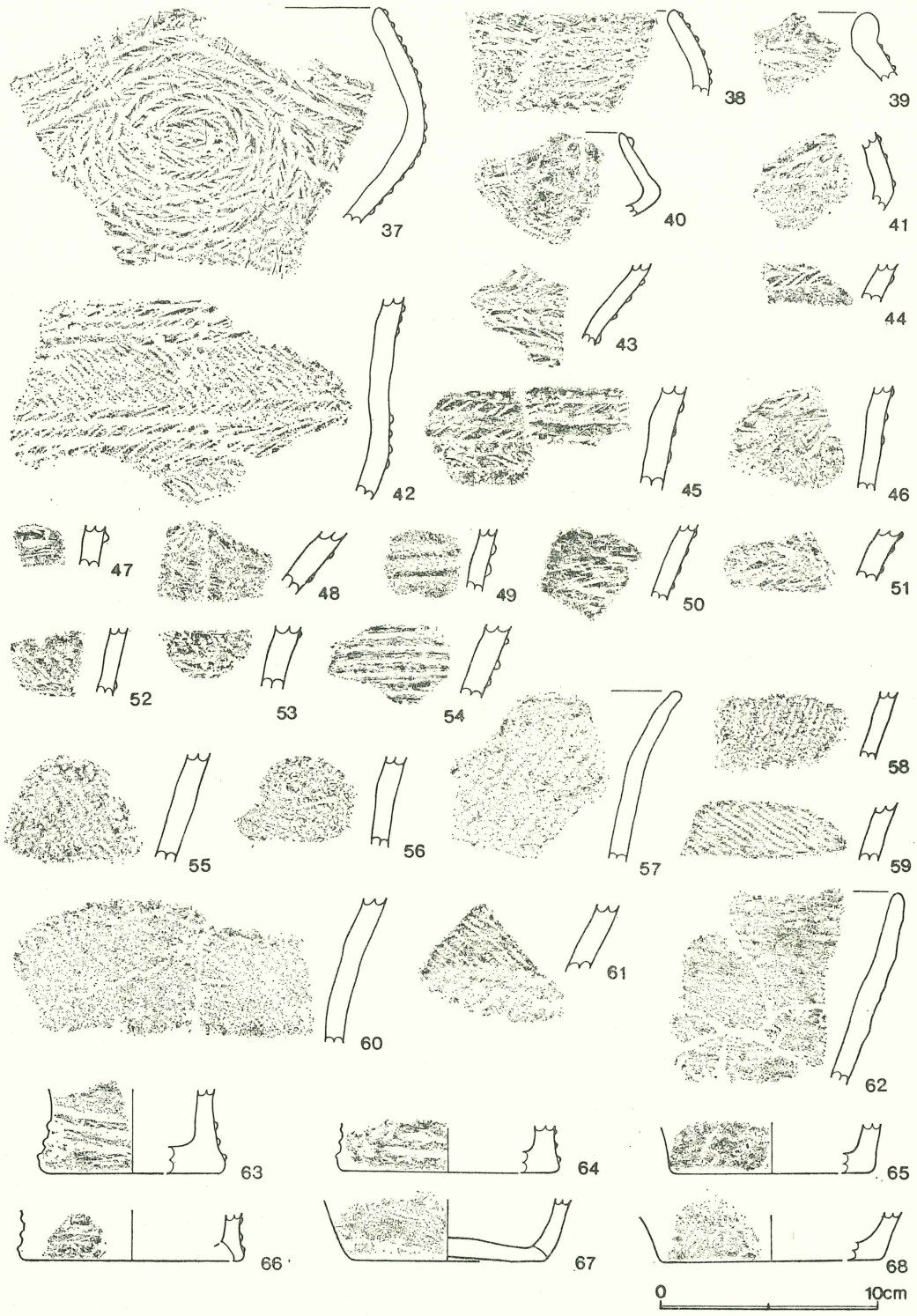


第26図　第５号住居址出土土器

第6号住居址出土土器（第27～28図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1・6	平口縁の深鉢で、1は外反が強い形態、6は直立気味の口縁部である。共に平行沈線が口縁を巡っている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は1がにぶい橙色。6が赤褐色。	
2	深鉢の口縁下の破片で、口縁および胴部の区画内に平行沈線が波状に施文されている。地文として縄文ＲＬが観察される。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
3・4	深鉢の胴部破片である。共に木ノ葉文系の文様が沈線によって描かれている。3の器面には地文として縄文ＲＬが観察される。	胎土は緻密。焼成良好。色調は3が暗赤褐色。4は黒褐色。	
5・7	キャリパー状口縁をもつ深鉢である。4単位の波頂部をもち、5は小突起を、7は口縁部に瘤状の小突起を配している。共に口縁に沿って沈線が巡り、7は孤線が描かれている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は共に暗赤褐色。	
8	深鉢の胴部破片で、口縁部に向って外反している沈線は1、6と対応して口縁部文様を区画するものである。地文として縄文ＬＲが施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
9～20	キャリパー状口縁をもつ深鉢の胴部下半の破片を一括する。平行沈線は2～3段にわたり施文されている。全て地文には縄文が観察される。9～7は縄文の原体はＲＬ、18～20はＬＲが施文されている。	胎土は9、13、14、17、20が荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は8が赤褐色。他は暗赤褐色である。	
21～25	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁部下の破片で外反の強い形態である。平行沈線は集中して施文されている。地文として縄文ＲＬが観察される。	胎土は緻察。焼成は良好。色調は、21、22が赤褐色、23～25は暗褐色。	
26～36	深鉢の口縁および胴部破片で、爪形文を施す土器である。26は口縁で平口縁の形態と思われ、2条の爪形が巡っている。28、31は孤状に構成され、27、30は直線的な施文である。32は直線と曲線、33～38は胴部の区画部分で33は山形に連続する爪形が見られる。爪形はＣ字状に施文されている。	胎土は33が片岩が目立つ他は緻密。焼成良好。色調は33、36が暗赤褐色、他はにぶい橙色。	

第27図　第６号住居址出土土器　(1)



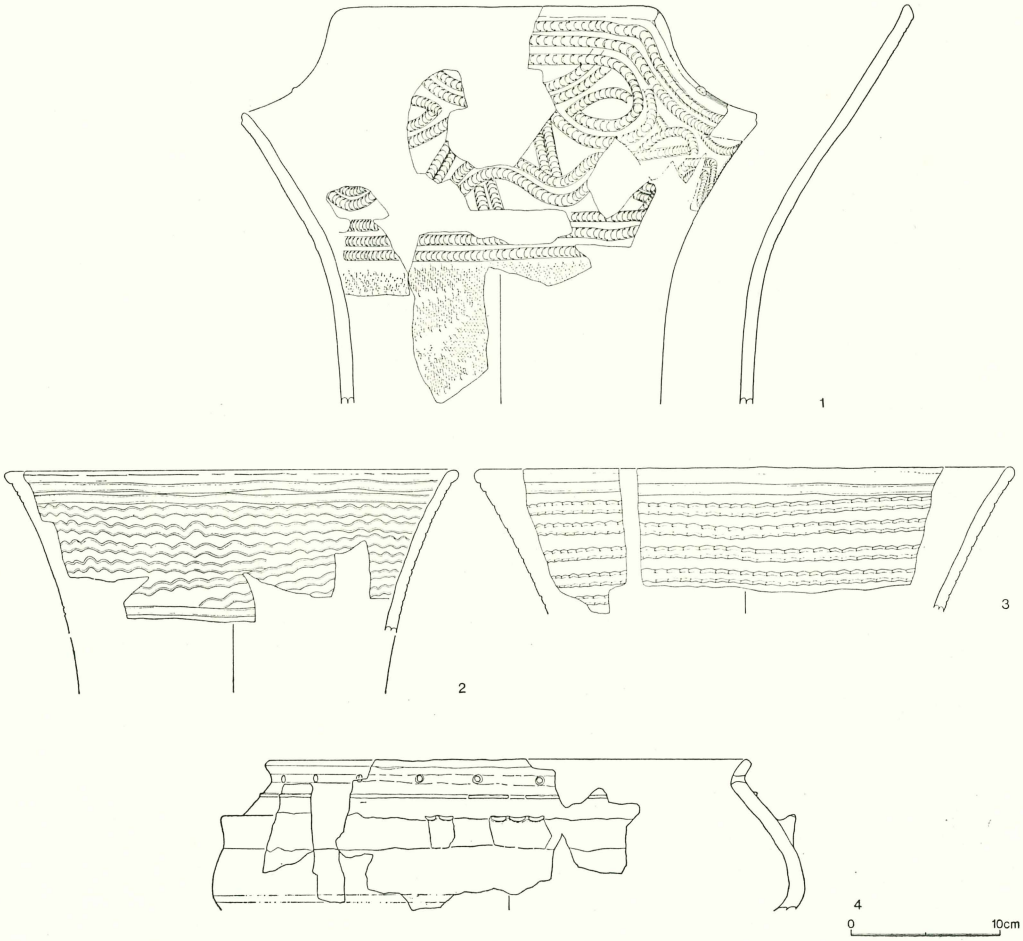
第28図　第６号住居址出土土器　(2)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
37〜40・43	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁部破片である。37、38は内湾する形態、40は内折気味である。39の波頂部は小突起をもつ。37は口縁に沿って4条の浮線が巡り、大きな渦巻状の浮線構成である。全て浮線上には刻目を加えている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は全て暗赤褐色。	
42・44〜54	キャリパー状口縁をもつ深鉢の胴部破片である。浮線文のものを一括する。42は胴部下半に膨みをもっている。浮線は2〜3本を1組みとして巡るものである。浮線上には全て刻目を加え、42は同一方向に、他は交互方向である。	胎土は緻密。焼成良好。色調は42が赤褐色、他は暗赤褐色。	
55〜61	深鉢の口縁および胴部破片で、縄文をもつものを一括する。57は外反の強い口縁部をもつ。縄文の原体には57、58がＬＲ、他はＲＬが施文されている。	胎土は60を除いて緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
62	深鉢の口縁部破片で、器面にはケズリ痕を明瞭に残している。	胎土には片岩を多く含む。焼成良。色調はにぶい橙色。	
63〜68	深鉢の底部を一括する。63よ底部から収縮して胴部に向う形体をもち、他は外反している。63、64、66は浮線が巡り、浮線上には刻目を加えている。63は地文に縄文ＲＬが観察される。65、67、68は縄文を施すもので全てＲＬの縄文である。	胎土は緻密。焼成良好。色調は63〜66が暗赤褐色。他はにぶい橙色。	

第7号住居址出土土器（第29〜32図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	台形状にのびる口縁は対称の2単位構成の波状口縁部で外に強く開く。胴部は円筒状を呈している。波頂部中位には瘤状小突起を配している。小突起間は沈線が口唇部を走る。器面には爪形文により構成される。口縁に沿っては幅広の平行沈線が2段、胴部には3段の沈線が巡り、爪形文を埋め込んで文様帯を区画する。波頂下は入組状の文様が対称的に表現され、波状、孤線、曲線、直線的な文様を構成している。胴部にはＲＬの縄文が施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
2	外反の強い平口縁の深鉢である。口唇部は丸味をもち外側に膨んでいる。口縁に沿っては平行沈線が2段、胴部にも同様の沈線が巡り文様帯を区画し、内部には小波状の沈線が連結する。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
3	2と同様の形態であるが、区画沈線は1段、小波状の沈線は押圧しながら連続して施文するものである。		
4	口縁は短く外反して、胴部は球状に膨む形態を示す。列孔土器鉢形である。口鉢下の収縮部には孔列をもち、直下には浮線が1条巡る。胴部上位には上	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	



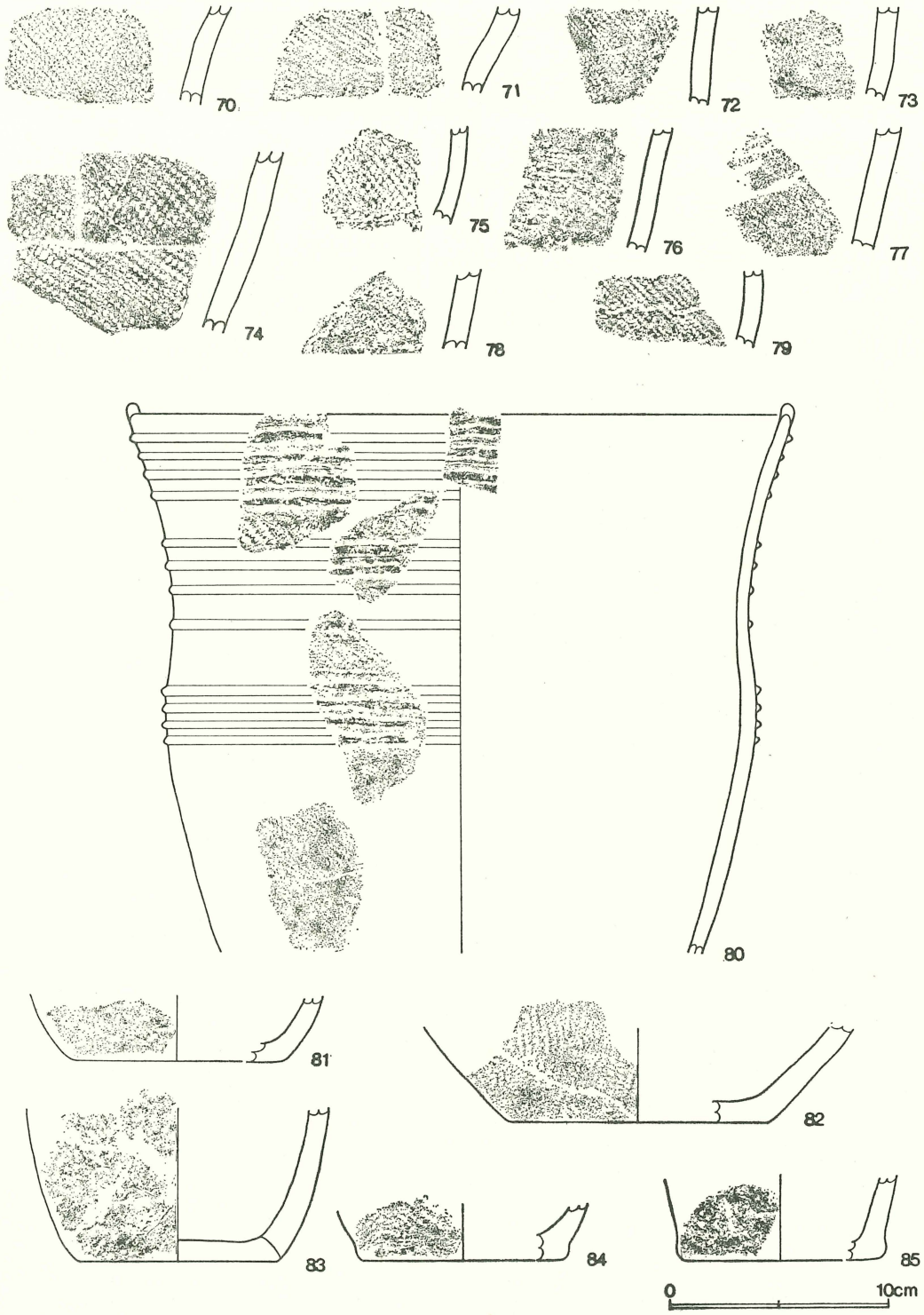
第29図　第7号住居址出土土器　(1)

第30図　第７号住居址出土土器　(2)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	向の隆起帯が走り、頂部には指頭状の押圧を施している。		
5〜22	平口縁の深鉢で口縁部は外反する形態である。2、3と同一構成の文様構成を示し、平行沈線の区画内には5〜7、10、15、19、20の振幅の長い波状構成のもの、鋭い山形を構成する11〜17、コンパス文状に施文される18、21、22などがある。地文の観察できる6、11〜15は縄文ＲＬが施文され、17は調整痕を残す2者があり、その他は器面が荒れて判然としない。	胎土はすべて緻密。焼成良好。色調は5、6、10、15、19、20は黒褐色、22は暗赤褐色、他はにぶい橙色である。	
23	外反する口縁部をもつ深鉢で、口唇部には指頭状の丸い圧痕を加えている。器面には平行沈線が数段施文されている。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
24〜25	平口縁の深鉢の胴部破片で、木ノ葉文条の沈線構成の土器である。地文の縄文は無い。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	
26〜29	平口縁の深鉢の胴部区画の沈線をもつ破片で、平行沈線は2段構成である。地文には縄文ＲＬが施されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は29がにぶい橙色。他は暗赤褐色。	
30〜34	1に対応する波状口縁をもつ深鉢である。30、31は口縁に沿う爪形文の間には斜方向の刻目を加えている。32〜34は爪形文が2段構成で巡り、曲線および直線的な構成を示している。33は、空白部に円形竹管の押圧を施している。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
37〜39	平口縁の深鉢で、口縁部は外反する形態を示す口縁部の破片である。器面には爪形文を施文している。口縁に沿う爪形文は35は4段、その他は3段観察される。36の口唇部には粘土紐が加飾を加えている。爪形文はＣ字状に連続して施文され、爪形間に斜位の刻目を加える36を除いては、一定の間隔をもっている。39は口縁に沿う爪形文は1段構成で、山形状に連続している。35は、曲線的な文様である。	胎土は緻密。焼成良好。色調は35がにぶい橙色。36〜37が暗赤褐色、39は赤褐色。	

第31図　第７号住居址出土土器　(3)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
40〜51	深鉢の胴部区画帯の破片で、爪形文を施した土器を一括する。40〜45は、爪形文の間隙に刻目を加えるもので40、41は右上り、42、45は左上りの施文である。46は刻目とは異なって半截竹管をD字状に押圧している。区画内のモチーフは、42が渦巻状、47は従位方向となっている。区画爪形文は全てC字状の施文である。	胎土は緻密。焼成良好。色調は41、47が黒褐色、他は暗赤褐色。	
52〜69	深鉢の口縁部文様帯の破片で爪形文の構成をもつ土器を一括する。爪形文は、間隔を密にして施す52〜67と間隔を開けて施文する68、69がある。爪形文の施文方向は基本的にはC字状である。爪形文の間には52のようにD字状圧痕を加えるものがある。文様の構成は各種あり、渦巻状の52〜55、59、61、62と孤状を描く57、58、空白部を埋める直線的な文様をもつ57、63〜66が見られる。	胎土は緻密。焼成良好。色調は53、54、58、61が黒褐色、60、62〜67が赤褐色、他はにぶい橙色。	
70〜79	深鉢の胴部破片で、器面には縄文が施文されているものを一括する。縄文の原体は全てＲＬである。79は綾絡文をもつ。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は、70、72〜75が暗赤褐色。78、79が赤褐色、他はにぶい橙色。	
80	平口縁には４単位の小突起を配し、口縁部は外反する形態で、胴上半に収縮部をもち、膨みながら底部に向う深鉢で、４本組みの浮線が器面る巡る。浮線は鋭い山形状の隆起であり、浮線上にはＲＬの縄文を施している。地文としてＲＬの縄文を施文している。器肉の薄い土器である。	胎土緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	北白川系土器。
81〜85	深鉢の底部である。81、83は円筒状の胴部へ移行する形態、82は膨みの強い胴部形態のものである。器面には、全て縄文ＲＬが施文される。	胎土緻密。焼成良好。81、82はにぶい橙色、他は暗赤褐色。	

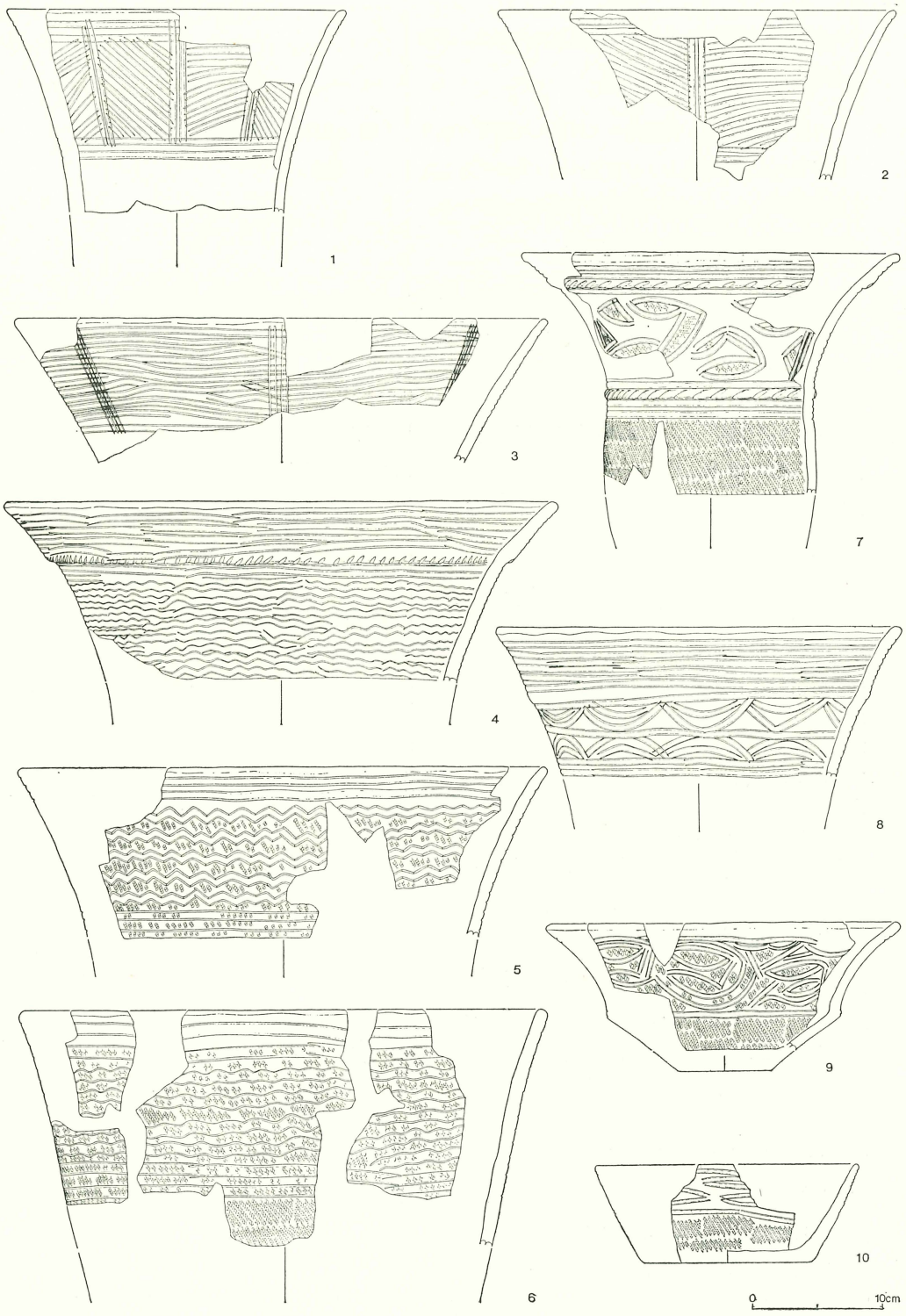


第32図　第７号住居址出土土器　(4)

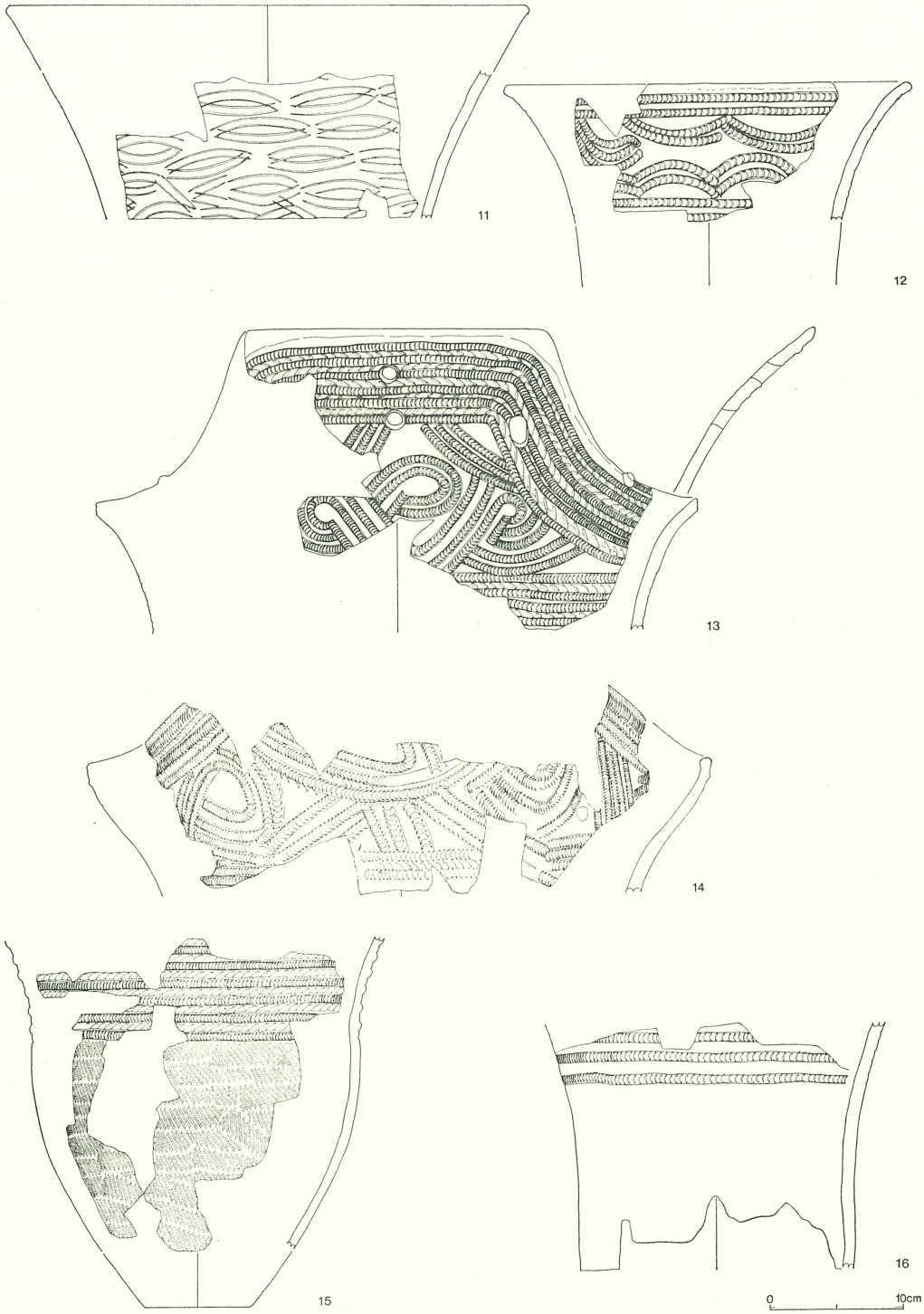
第８号住居址出土土器（第33～39図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1・2	平口縁の深鉢で、口縁部は外反する。口縁および胴部に平行沈線が２条巡って、文様帯を区画し縦位に同様の沈線が分割する。区画内には沈線が斜方向に施文され助骨文系の文様で埋める。１の胴部下半は器面が荒れて縄文の有無は不明。	胎土は緻密。焼成良好。色調は共に黒褐色である。	
3	１、２の系統と引く深鉢で、口縁の外反は強い形態である。区画沈線は上・下とも１条で、内部は変則的な横位沈線が巡る。縦位の分割沈線は最終工程の施文で、１、２とは手法上の逆転が見られる。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
4	外反の強い口縁をもつ深鉢である。口縁部と胴部には段をもち移行する。口縁部には数条の平行沈線が巡る。下位には波波に連続する沈線が埋める。段部には刻目を斜方向に加えている。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
5	外反する口縁をもつ深鉢で、口縁および胴部上半の２条の平行沈線の区画内には山形に連続する沈線と施文している。地文として縄文ＲＬが観察される。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
6	外反の弱い深鉢である。区画内には波状の平行沈線が連続する。地文として縄文ＲＬが施されている。	胎土は荒く、片岩、石英、長石を含有。焼成は良。色調は黒褐色。	
7	平口縁の深鉢で、口縁部の外反が強く、口縁直下には段をもち体部に移行する。胴部は同筒状を呈す形態である。口縁部には平行沈線が２条巡り、段部には斜位の刻目が連続する。体部には木ノ葉文系の入り組み文が連続する。胴部との境には、隆起帯を設け口縁部同様の刻目を加えている。更に２条の平行沈線が巡る。胴部には縄文ＲＬが施文されている。木ノ葉文部分には充填される縄文が観察される。	胎土は、粒子が荒く片岩が目立つ。焼成良好。色調は赤褐色。	
8	外反の強い平口縁の深鉢で、有段の口縁部をもつ口縁部には平行沈線が数条巡り、胴部上半の沈線と	胎土に密密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	共に区画帯を設け、分割する中央沈線内に上、下向の孤線文が連続する。		
9	外反する口縁は、稜部をへて収縮して底部へ向う鉢形である。口縁下および稜部には1条の平行沈線が区画を行い、木ノ葉文系の入り組みが連続する。地文に縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
10	鉢形である。平行沈線は文様帯を区画して、木ノ葉文が連続的に埋め込まれている。底部周辺には縄文ＲＬが施文される。	胎土は緻密。焼成良好。色調は黒褐色。	
11	外反する口縁部をもつ深鉢である。区画沈線部は欠損するが、数段にわたり木ノ葉文が平行沈線により描かれている。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
12	外反する口縁部をもつ深鉢である。器面には爪形文が文様を構成する。口縁および胴上半には平行沈線が2条横位に区画し、その間に逆く字状の爪形文を埋め込み、区画内には上、下2条の爪形文が連続して、一部孤状の文様が見られる。	胎土は緻密。焼成良好。色調は黒褐色。	
13	台形状の2単位の波状口縁をもつ深鉢である。口有は外に大きく外反する口縁部である。波底間中位には瘤状の小突起を配して分割し、その間を爪形文が口唇部を埋める。口縁には6条の爪形文と斜方向の刻目が区画を加え、同様に胴部上半とともに文様帯を形成する。内部には孤線、曲線的な爪形文が描かれている。正面中央及び横には円孔を穿っている爪形文間は隆起帯である。爪形文はＣ字状に間隔を密に施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	
14	キャリパー状に内湾する口縁部をもつ2単位の波状口縁をもつ深鉢である。口唇の内、外に刻目を加え、口縁に沿ってはＣ字状爪形と刻目の組み合せで区画を行い、孤線、曲線、直線的な爪形文が埋める爪形文は幅広の半蔵竹管を行いている。波頂部下位の爪形文は、平行沈線の割り付けが見られない。更	胎土は荒く、片岩、石英、長石を含む。焼成良好。色調は暗赤褐色。	



第33図　第８号住居址出土土器　(1)

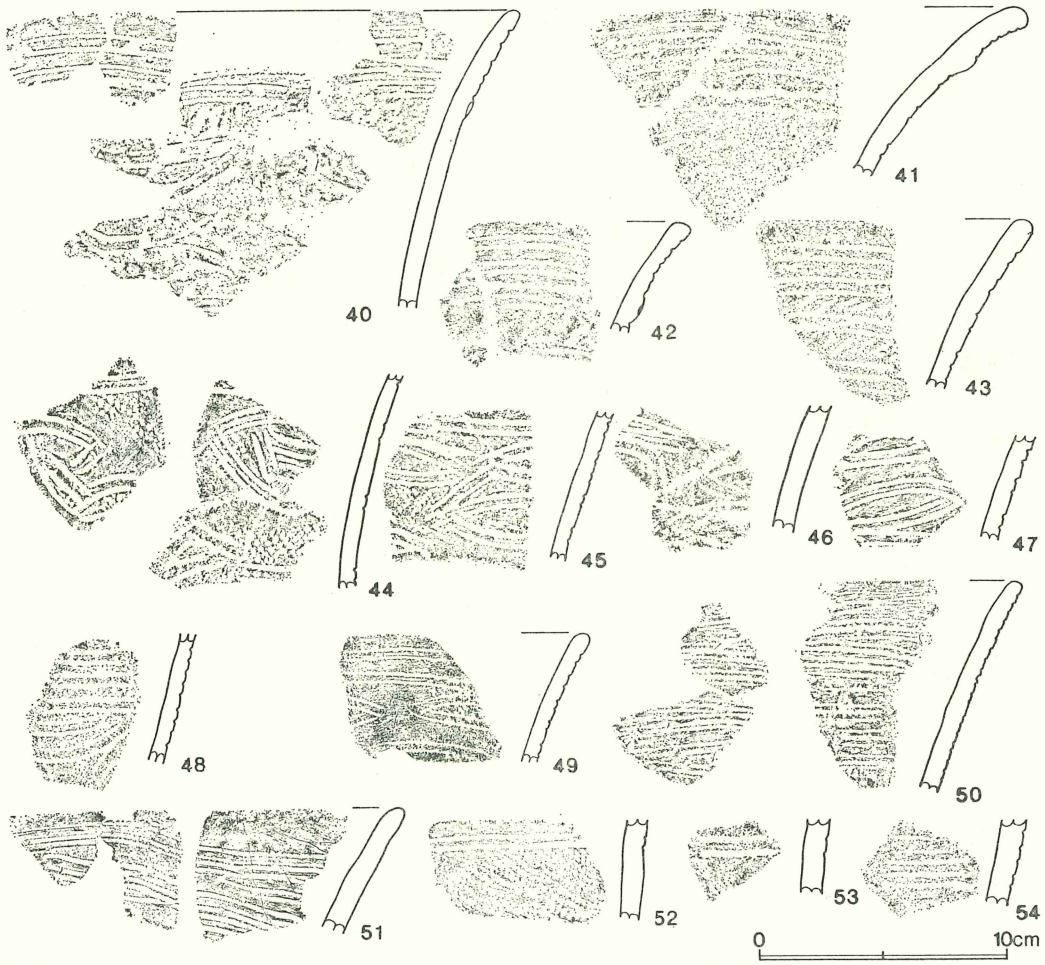


第34図　第８号住居址出土土器　(2)

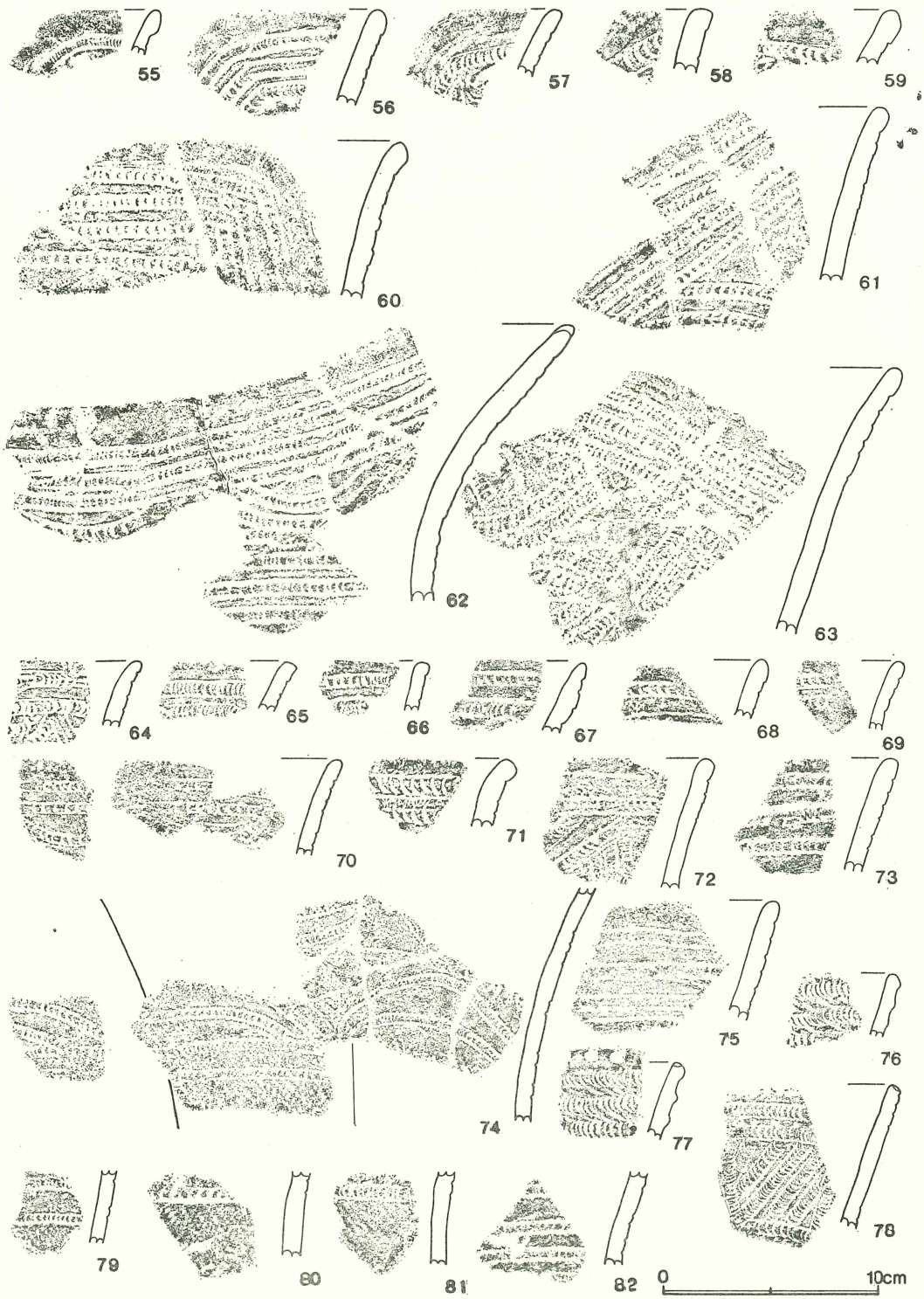
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	に胴部下位にも同種文様が構成されるのであろう。		
15	深鉢の胴部下位で、13と同様の爪形文と刻目が巡る。胴部下半は膨みをもっている。縄文の原体はRLである。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	
16	深鉢胴部で3条のC字状の爪形文が巡る。下半の縄文は器面が荒れ不明である。	胎土には片岩が目立つ。色調はにぶい橙色。	埋甕。

第35図　第8号住居址出土土器　(3)

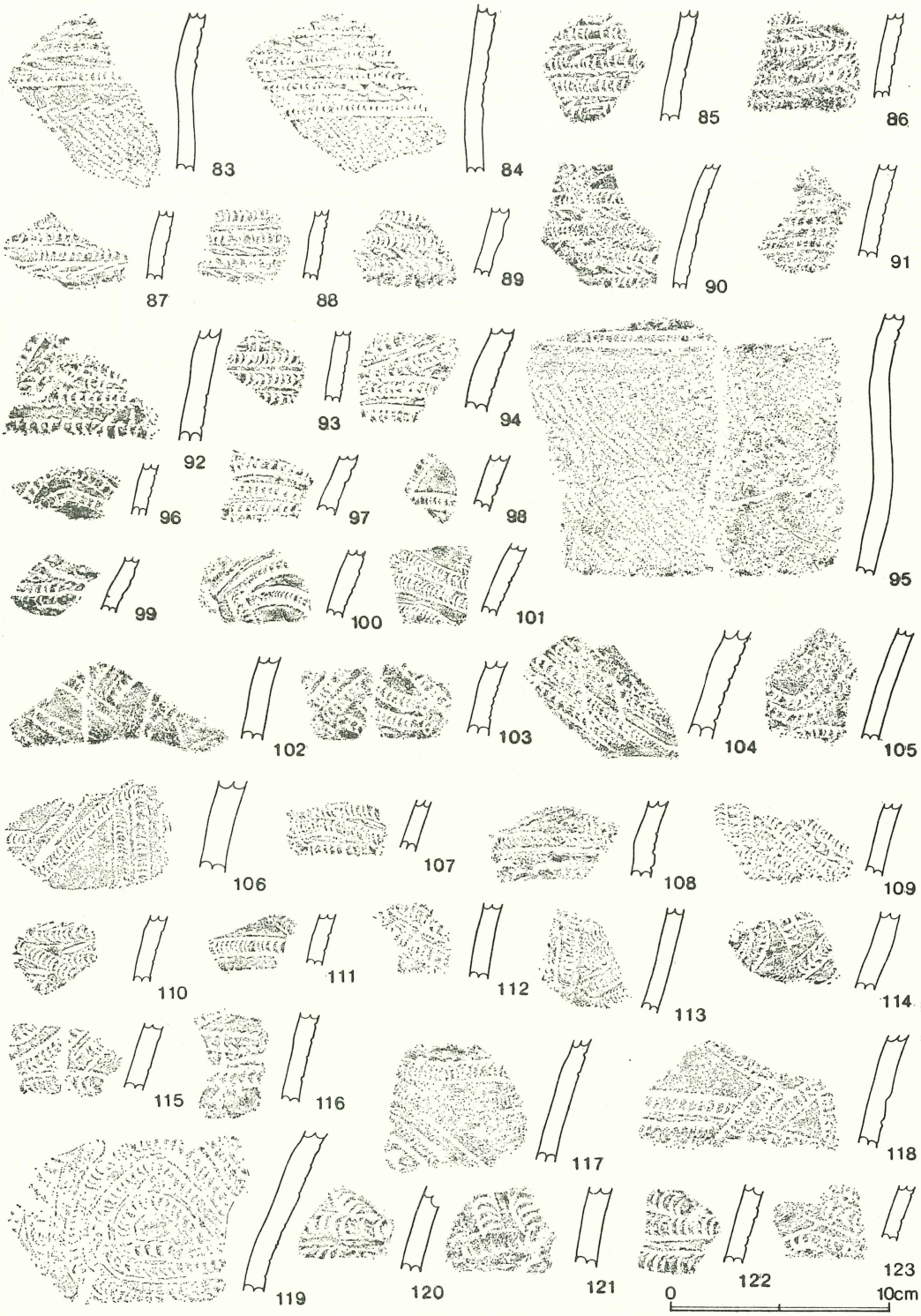
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
17 〜 20	平口縁の深鉢である。口縁部破片を一括する。口縁に沿って平行沈線が２条巡っている。	胎土は緻密。焼成は良。色調は黒褐色。	
21 〜 35	平口縁の深鉢で外反の強い口縁部をもつもので平行沈線が、波状に施文されるものを一括する。22、21、34、35は、口縁および胴上半に平行沈線により２条の区画を加えて、その間に文様が施されている波状の沈線は、鋭く山形に施文される21〜25、波状を描く26〜35に分けられる。沈線間には地文縄文をもつ23〜30が有り原体はＲＬである。	胎土は緻密。焼成は良。色調は21、22、35が黒褐色、他はにぶい橙色である。	



第36図　第８号住居址出土土器　(4)

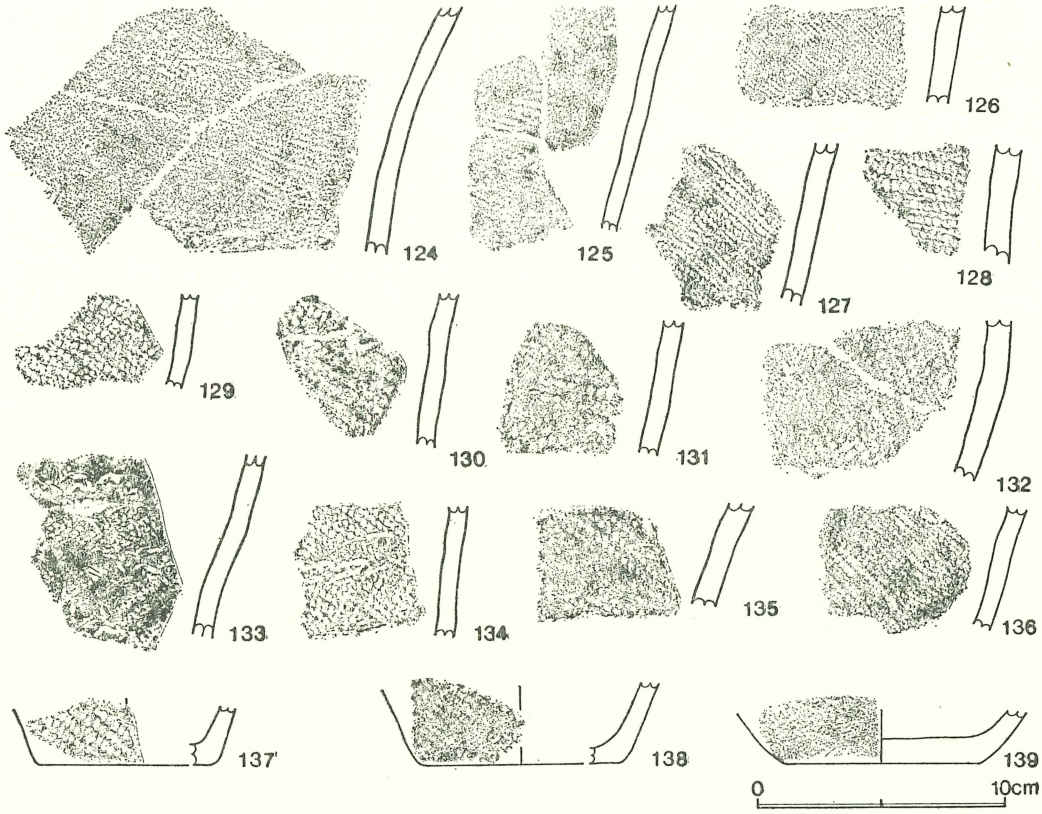


第37図　第８号住居址出土土器　(5)



第38図　第８号住居址出土土器　(6)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
36〜38	外反する口縁をもつ深鉢。口縁下には平行沈線が巡り区画している。区画内には振幅の長い波状の沈線が施されている。37、38は沈線間に地文縄文ＲＬが観察される。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色。	
39	平口縁深鉢の胴部上半の破片で、数段の沈線が巡り、胴部区画の沈線には爪形文が埋められている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	
40〜42	口縁部下には有段を備えた平口縁深鉢である。口縁部には平行沈線が３条巡り、移行部には斜方向の刻目が連続する。40、41には木ノ葉文系の入り組みが描かれる。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
43	外反する口縁をもつ深鉢の口縁部破片で、平行沈線間に斜方向の刻目を施文している。	胎土は緻密。焼成良好。色調は黒褐色。	
44〜47	深鉢の体部破片で、沈線区画内に木ノ葉文系の入り組み文を平行沈線により施文するものである。44〜46は地文として縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は44、46、47がにぶい橙色、45が黒褐色である。	
48	胴部破片で、横位区画沈線が巡り、孤線文系の文様が沈線により施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色である。	
49	平口縁深鉢の口縁部破片で、２条の平行沈線が区画を行い、幅の狭い文様帯には木ノ葉文が施文される。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	
50・51	平口縁深鉢の口縁部破片で、平行沈線が口縁部文様を埋める構成を示し、50は、密に巡り、51は変則的に施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
52〜54	深鉢の胴部破片で、共に胴部止半の沈線区画のもので、すべて縄文ＲＬが他文として施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色。	
55〜63	台形状の波頂部をもつ２単位構成の波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片である。口縁に沿って数条の爪形文が巡り、60、61は４条、62、63は３条の構成である。62、63は波底部破片で、波頂部の中間位には瘤状の小突起を配している。区画内には、孤状、曲	胎土は60が荒く片岩が目立つ。他は緻密である。焼成は良好。色調は56、62が灰褐色、他は暗赤褐色である。	



第39図　第８号住居址出土土器　(7)

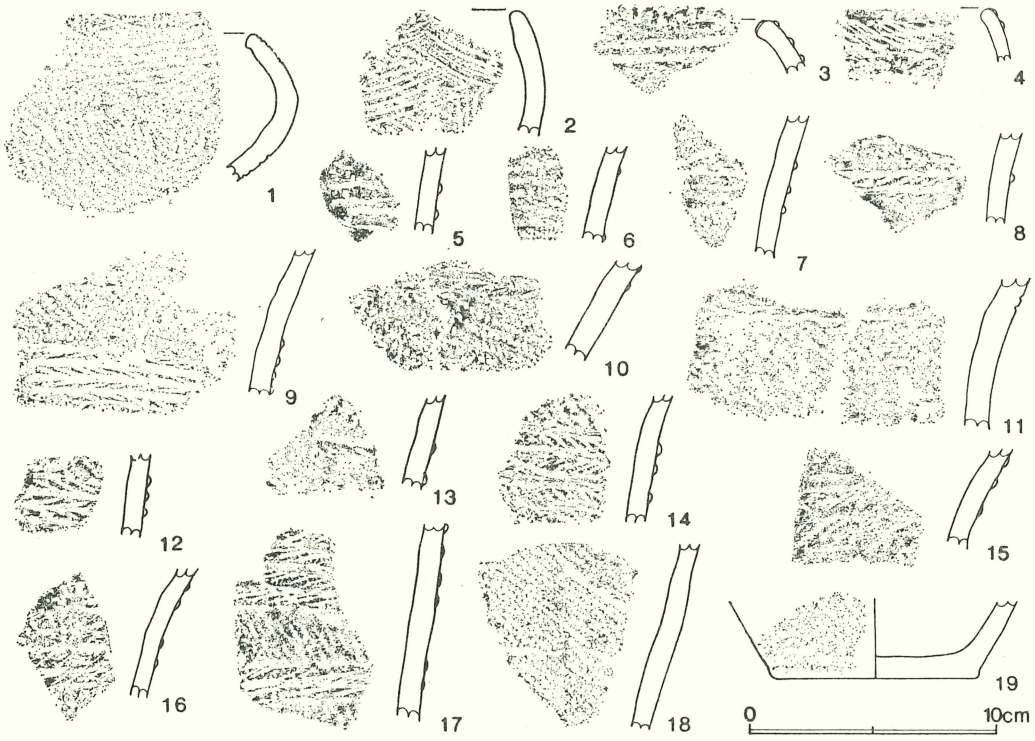
番号	器　形、文　様　の　特　徴	胎　土、焼　成、色　調	備　　考
	線的な爪形文が埋められている。爪形文は全てC字状方向に施文される。63には区画帯直下に円孔を備えている。		
64〜75	外反する口縁をもつ平口縁深鉢である。器面には爪形文による文様を構成する。口縁に沿う爪形文は２、３条で胴部上半にも同様の沈線が巡り文様帯を区画する。区画内には64、72、74のように孤線系の文様が連続して、74こ、上、下向いた孤線が連続している。爪形文は64が逆C字、他はC字状に施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は73、75がにぶし橙色、他は暗赤褐色である。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
76〜78	平口縁の深鉢で口縁部破片である。口唇部に圧痕状の窪みをもつものである。C字状に連続する爪形文の間には斜方向の刻目を施している。	胎土は緻密。焼成は良。色調は暗赤褐色。	
79〜95	深鉢の胴部破片である。胴部上半の爪形文による横位区画帯を一括する。83〜91は爪形文間に刻目を加えるものである。86〜88は逆C字状に爪形が施文されている。92〜95は爪形文による区画である。93も逆C字状の爪形文をもつ。83、84、95は、胴部下半の縄文が見られ、原体はＲＬであり、83、95は綾絡文をもっている。	胎土は緻密で、91は片岩が目立つ。焼成は良く、色調は83、84、89、93が暗赤褐色、他は赤褐色である。	
96〜123	爪形文をもつ深鉢で、文様帯内部の破片を一括する。爪形文は孤線を描く96〜105、 直線的に展開する106〜113、 曲線を描く119と組み合せた文様を描くものがある。爪形文は基本的にはC字状の施文である。120〜123た爪形文の連続が間隔の有る土器である。	胎土は119の片岩が目立つ他は緻密である。焼成は良好。色調は102、116、110、123のにぶい橙色を除いては暗赤褐色である。	
124〜136	深鉢の胴部破片で器面に縄文を施文するものを一括する。原体は全てＲＬである。	胎土は緻密である。焼成は良好。色調は124が黒褐色、他は暗赤褐色である。	
137〜139	底部である。 137は底部が小さい。138、139は胴部への開きが強い。器面には縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は、137、138が暗赤褐色、 139はにぶい橙色である。	

第９号住居址出土器（第40図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1・2	キャリパー状口縁をもつ深鉢である。共に沈線文の構成である。１は口唇部にX状の沈線が連結して縦位沈線が埋める。口縁に沿っては区直沈線口縁部には渦巻状に沈線が構成する。２は頂部を２つもつ波状口縁の頂部破片で波頂下には上向の孤線をもっている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色である。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
3・4	キャリパー状口縁をもつ深鉢である。浮線文構成をとる口縁部破片で、3は、浮線を口唇部に貼付している。口縁に沿っては浮線が巡り、頂部には刻目を加えている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共にぶい橙色。	
5〜17	キャリパー状口縁をもつ深鉢である。浮線文をもつ胴部破片を一括する。2〜4条の浮線が巡る。浮線上には刻目を加え、16、17は同一方向、他は交互に施している。地文として縄文が見られ、全て原体はＲＬで施文されている。	胎土は、9、11、17に片岩の含有が目立つ。焼成は良好。色調は10、11、17が赤褐色、他は暗赤褐色。	
18	深鉢の胴部破片である。器面には縄文ＬＲが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
19	深鉢の底部で、胴部の開きが強い形態を示す。縄文ＲＬが施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	

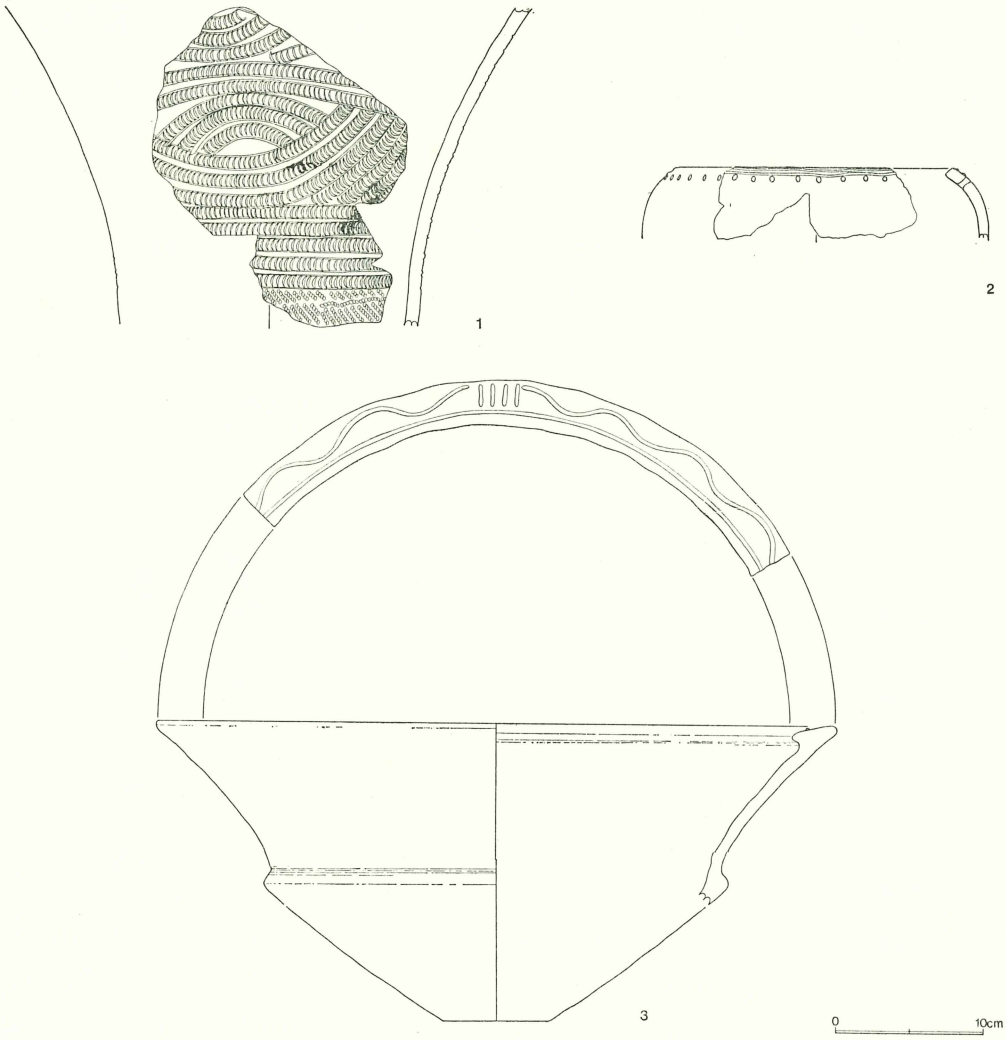


第40図　第９号住居址出土土器

第10号住居址出土土器（第41～45図）

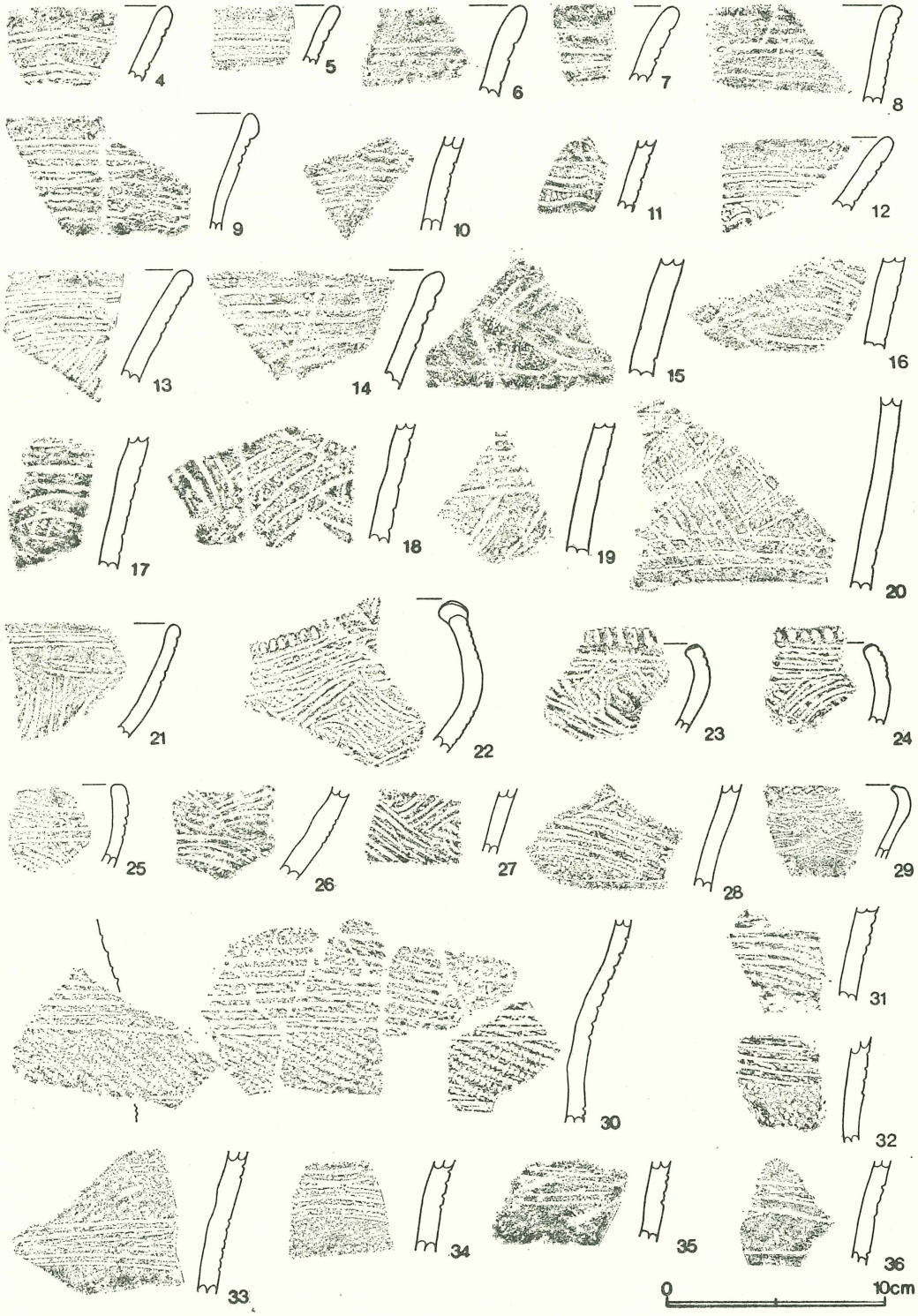
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	外反の強い口縁をもつ深鉢である。器面には爪形文が施されている。胴部には５条の爪形文が巡り、文様帯を区画している。内部には孤状に文様が構成する。爪形はＣ字状に施され、間隔を開けた施文である。胴部下半には縄文ＲＬが施文されている。	粒子は荒く、片岩、長石、石英が目立つ。色調は暗赤褐色。	
2	口縁部は内湾する。列孔鉢形土器で、口縁に沿って２条の浮線が巡り、直下に列孔をもっている。	緻密な胎土をもち、黄色の鉱物を含。有焼成良好。にぶい橙色。	
3	頸部が「く」字状に収縮して、口縁部は強く外反し口縁が内折する鉢形である。内折する口縁には浮線文が波状、直線に貼付され、４本の浮線が縦に区画している。	緻密は胎土である。焼成良好。色調は灰褐色である。	
4～8	口縁部の外反が強い平口縁の深鉢である。口縁に沿って平行沈線が２条施文され区画する口縁部破片である。	共に胎土は緻密。焼成良好。４は茶褐色、５～８はにぶい橙色。	
9	区画内の沈線は波長の長い波状を描いている。	荒い胎子をも、長石、石英が目立つ。焼成良好。色調は黒褐色。	
10～13	外反の強い口縁部形態をもつ深鉢で、口縁下の区画沈線は２条、区画内には、波状の平行沈線を施文している。12、13には縄文ＲＬが地文となって施されている。	緻密な胎土である。焼成は共に良好。色調は、10～12は、はぶい橙色。13は、暗赤褐色。	
14～17	外反する平口縁の深鉢で、口縁および胴部破片である。口縁および胴部上半には平行沈線が２条施文され文様帯を区画する。内部には木ノ葉文が描かれるものである。16・17には地文に縄文ＬＲが施文されこいる。	胎土は、14～16は緻密。17は片岩、長石が目立つ。焼成は良好。色調は、14～16がにぶい橙色。17は、黒褐色。	
19～20	平口縁深鉢、区画内には平行沈線が孤線を描くものである。19には地文として縄文ＬＲが施文されている。	胎土は緻密で、黄色粒子が目立つ。焼成は良好。色調は19がにぶい橙色20が黒褐色である。	
21	平口縁深鉢、胴部上半には平行沈線が２条巡る。区画内には平行沈線が格子目状に施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は赤褐色である。	

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
22	鉢形、口縁に沿て1条の平行沈線が区画して区画内に三角形、木ノ葉状の入り組み文が埋めるものであろう。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は赤褐色。	
23〜28	キャリパー状口縁をもつ深鉢で、口縁部破片を一括する。4単位の波頂部をもち、22にはスリットをもつ小突起を配す。22〜24は口唇部に刻目を加えている。口縁に沿っては平行沈線が3条巡る。口縁部	共に胎土は緻密。焼成は良好。色調が22・25〜29が暗赤褐色。他は、にぶい橙色である。	



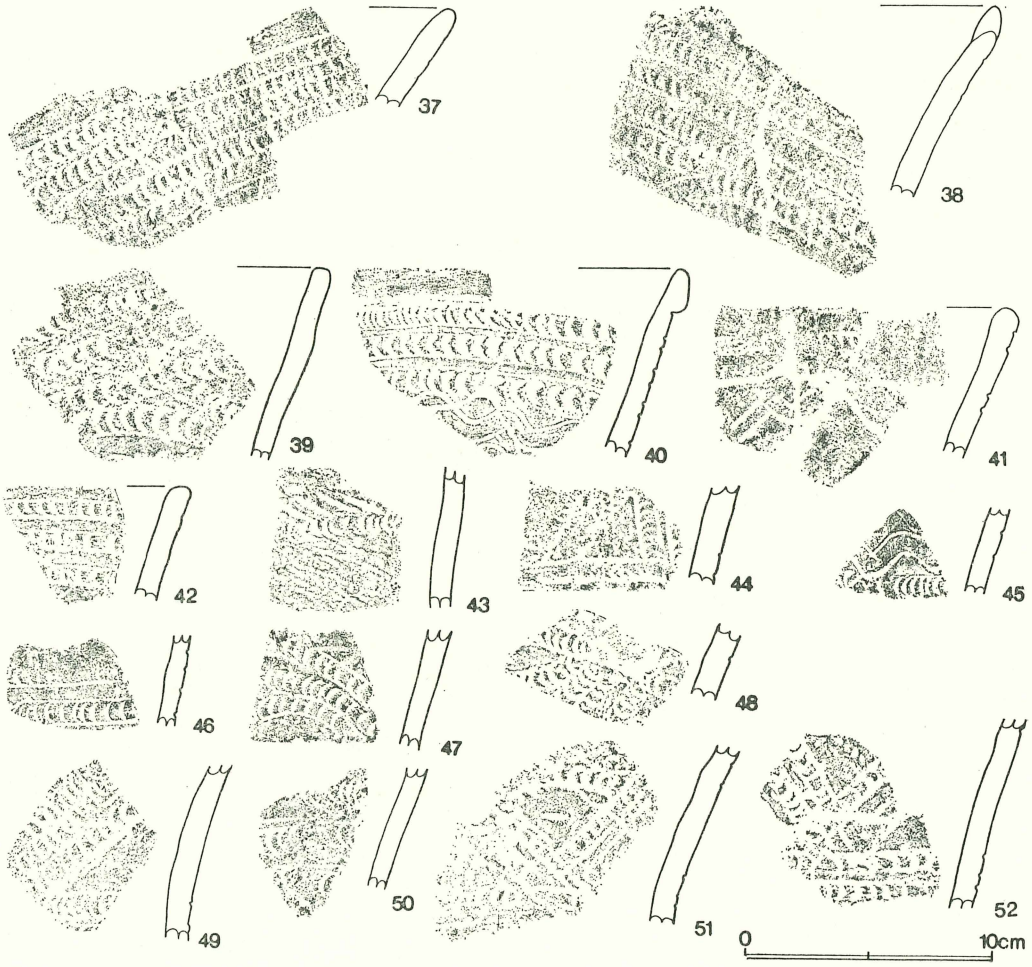
第41図　第10号住居址出土土器　(1)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
	文様帯は曲線的な文様が沈線により構成する。全て縄文ＲＬが地文として施文されている。		
29	キャリパー状口縁をもつ小型の深鉢である。口唇部には刻目をもつ。文様帯には平行沈線が施文されている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は灰褐色である。	
30	キャリパー状口縁をもつ深鉢の胴部破片を一括する。平行沈線が数条巡り、胴部を数段区画するものである。地文の縄文は30～32がＲＬ、33～36でＬＲの原体により施文されている。	30、31、33、34の胎土は荒く、片岩が目立つ。焼成は良好。色調は30が赤褐色、31～34が暗赤褐色、35、36は灰褐色と呈す。	
40・41・45	平口縁の深鉢で口縁部は外反する。口縁下には、爪形文が文様帯を区画する。区画内には平行沈線が波状に施文されている。爪形文はＣ字状施文である。45は胴部上半の区画帯の破片である。	胎土は共に緻密。焼成は良好。色調は、40が赤褐色、41、45が赤褐色。	
37～39	波状口縁をもつ深鉢で、波底部付近の破片である。波頂底面の中位には38のように小突起を配している。口縁に沿う爪形文は37、38で４条くように爪形文がＣ字状に施文される。爪形文の連続は間隔を開けている。	胎土は共に荒く、片岩、石器、長石が目立つ。焼成は良好。37、38の色調は、暗赤褐色、39は、灰褐色である。	37、38は同一個体。
42	平口縁の深鉢である。口縁に沿って爪形文が３条巡る。爪形はＣ字状に施文され、間隔を開けて施されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は灰褐色である。	
43・44 46～52	胴部の破片で爪形文を施文するものを一括する。43は胴部上半の区画帯で、爪形文の間には刻目を加え、胴部には縄文ＲＬを施文する。他は孤線、直線の組み合せによる文様を構成している。51、52は三角状の構成をとる。49～52は爪形文が幅広である。	胎土は51、52が荒く、片岩が目立つ。焼成は良好。色調が、43、47、50で、にぶい橙色、51、52は黒褐色、他は、暗赤褐色である。	
54～56	４単位の波頂部をもち、キャリパー状口縁に近い口縁部破片で、口唇部には刻目を施す。器面には浮線文が口縁に構成する。浮線上には原体ＲＬの縄文が見られる。	胎土は緻密。共に白色不透明で軟質の鉱物を含む。焼成は良好。色調は、54が赤褐色、55がにぶい橙色、56が暗赤褐色である。	

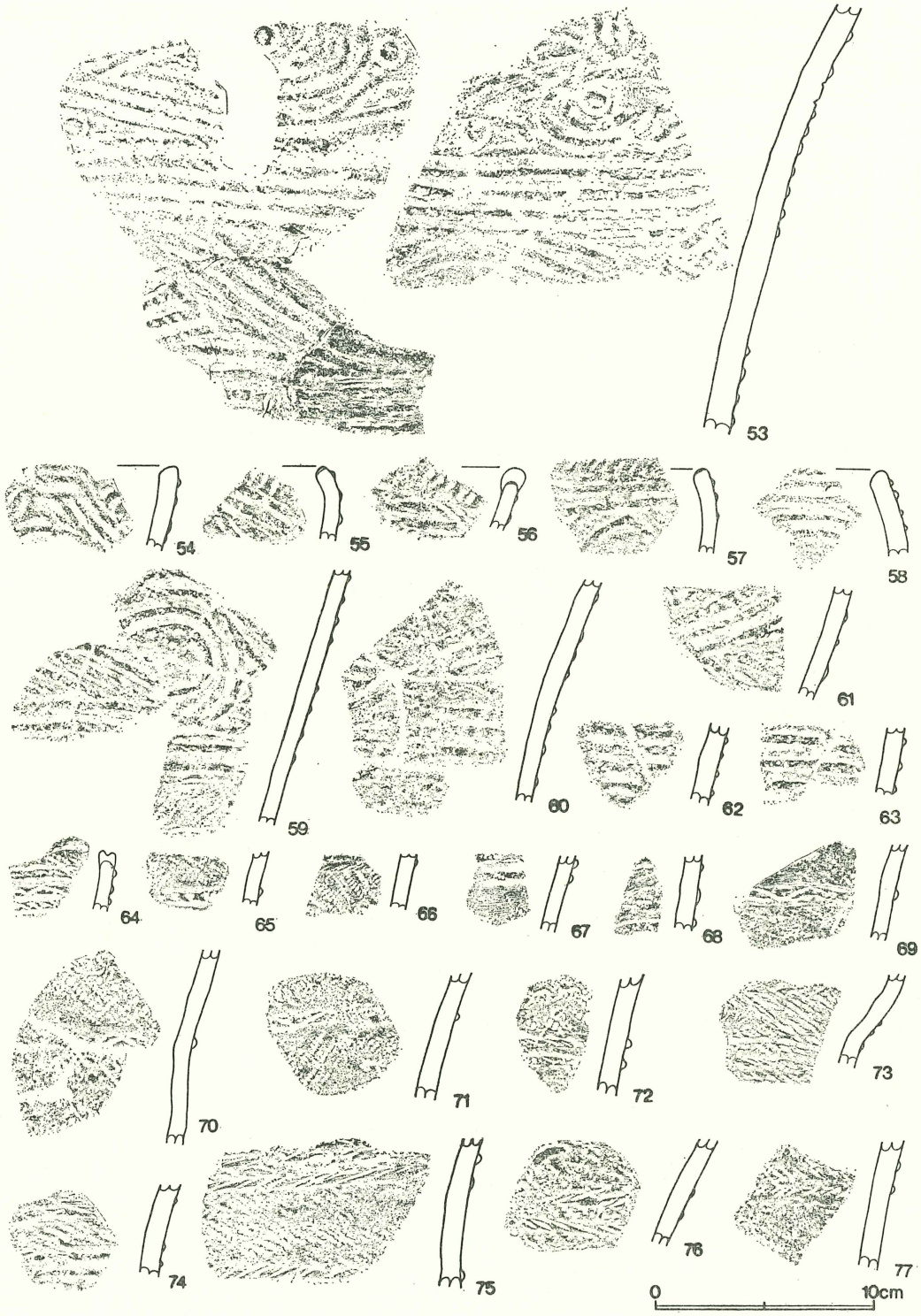


第42図　第42号住居址出土土器　(2)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
57・58	キャリパー状口縁をもつ深鉢である。口唇部には57が刻目を加える。口縁に沿っては3条の浮線が巡る。文様帯は孤線状の構成をとる。浮線上には縄文ＲＬが施文される。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色である。	
53・59〜63	54〜56に対感する口縁部および胴部破片である。浮線文による文様で構成する。数条の浮線は胴部を画し、曲線的な文様が埋めている。53は大型の器形をもつ。浮線上および地文には縄文ＲＬが施されている。	胎土は53が緻密。他は粒子が荒い。59〜63は、石英、長石が目立つ。焼成は良好。	

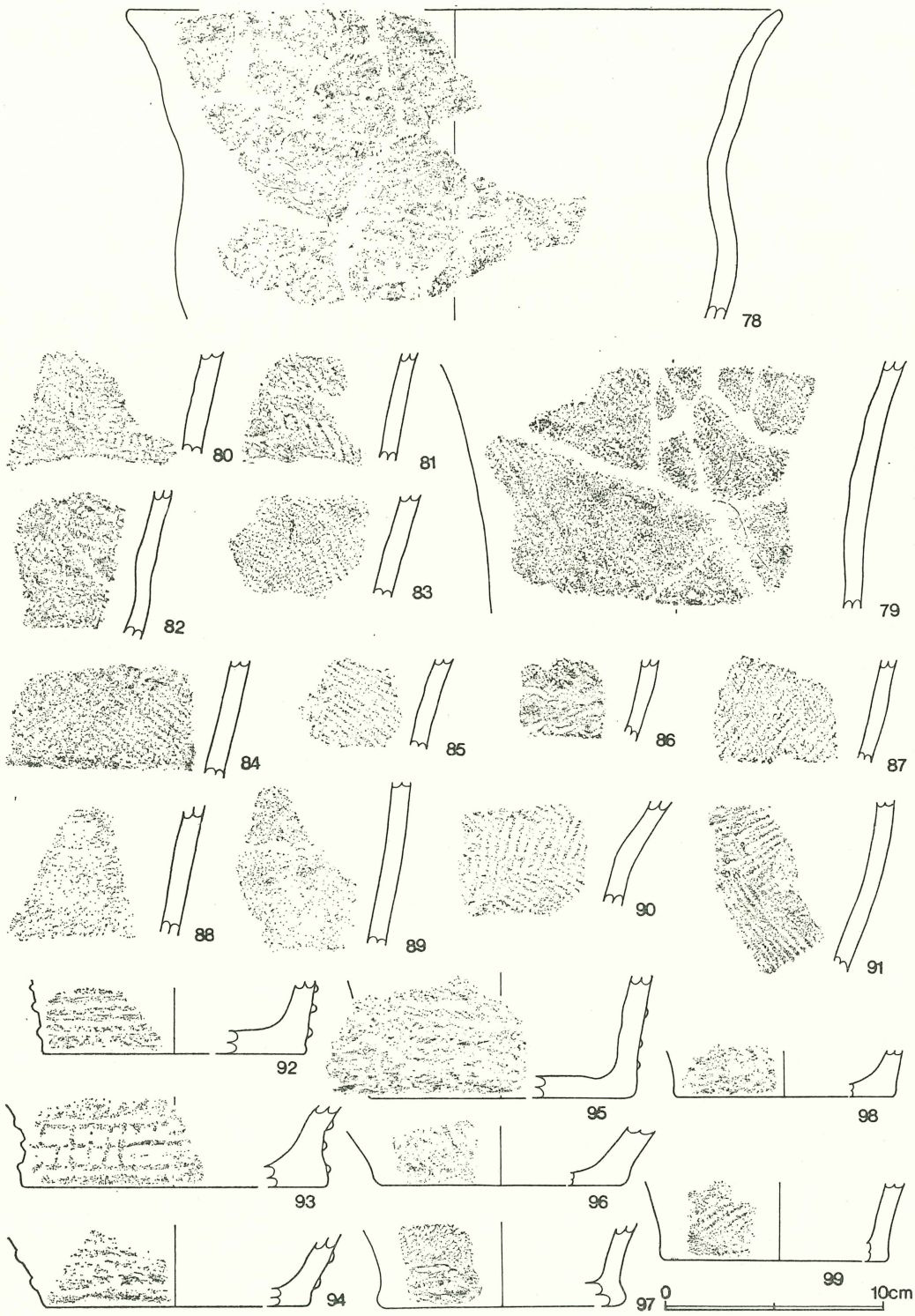


第43図　第10号住居址出土土器　(3)



第44図　第10号住居址出土土器　(4)

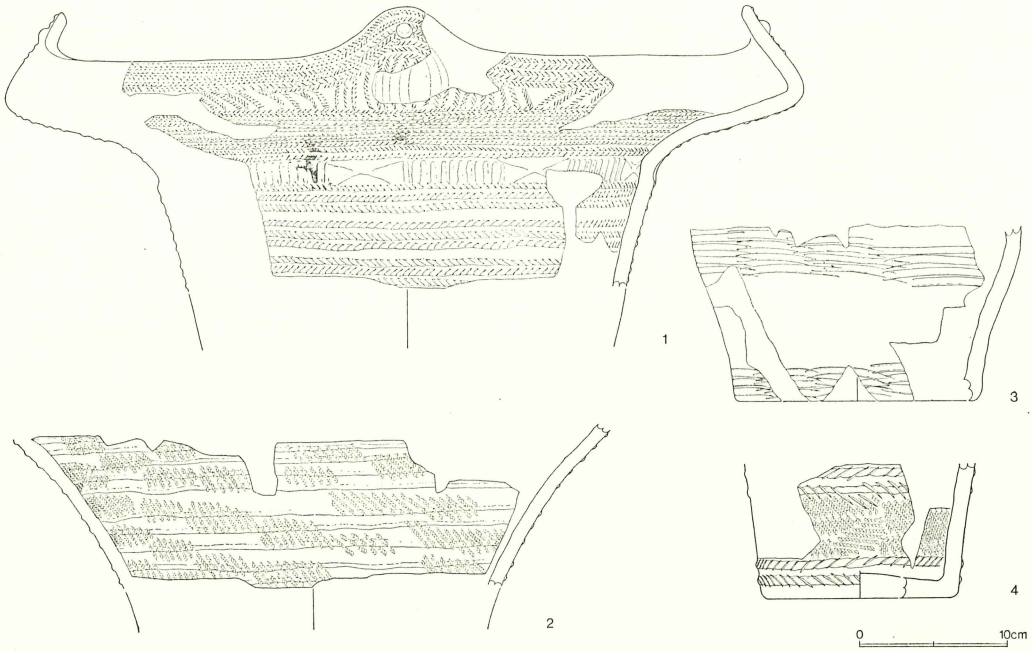
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
64〜67	深鉢の口縁部および胴部破片を一括する。浮線文をもち、器肉の薄い土器である。64は平口縁と思われ、4単位の小突起を配す形態と思われ、突起上に横位の刻を施し、巡る浮線上には八の字状に刻目を施す。65は浮線上に圧痕状の凹みをも、66は斜位の刻目、67は縄文をもつ。65、66は0段多条のＬＲの原体を用いている。67は無文である。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は、64が暗赤褐色、65が黒褐色、66、67はにぶい橙色である。	北白川系土器。
68〜77	胴部破片を一括し、浮線文をもつもの。67〜71は浮線が1条のもので、浮線上には刻目をもつ。69、70は縄文ＲＬ、71はＬＲを地文としている。72〜77は浮線が2〜3条のもので、刻目を加えている。77は無節Ｌ、他はＲＬの原体と地文として施文する。	胎土は荒く、片岩が目立つ。焼成は良好。色調は、68〜70、73、75、77が暗赤褐色、他はにぶい橙色である。	
77	平口縁の深鉢で収縮部をもつ形態である。器面は無文である。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は暗赤褐色である。	
79〜91	深鉢の胴部破片であり、縄文を施すもの。79〜86は原体ＲＬを施し、86には綾絡文をもつ。87〜89はＬＲの原体を施文する。90、91は、ＬＲ、ＲＬの2種の原体を用い羽状に施文する。	胎土は粒子が荒く片岩が目立つ。焼成は良好である。色調は83が灰褐色、89、90が黒褐色、他は暗赤褐色である。	
92〜99	底部を一括する。92〜95は浮線文をもつもので2〜3条が巡る。93は無文、他は、浮線上に刻目をもつ。93は階段状に貼付けている。地文に縄文をもち92はＲＬ、他はＬＲの原体を用いている。96、99は縄文無文の土器で、96〜98はＲＬ、99はＬＲの原体を用いている。	胎土は92を除いて荒く、片石、石英、長石、チャートを含む。焼成は良好。色調は94がにぶい橙色他は暗赤褐色である。	



第45図　第10号住居址出土土器　(5)

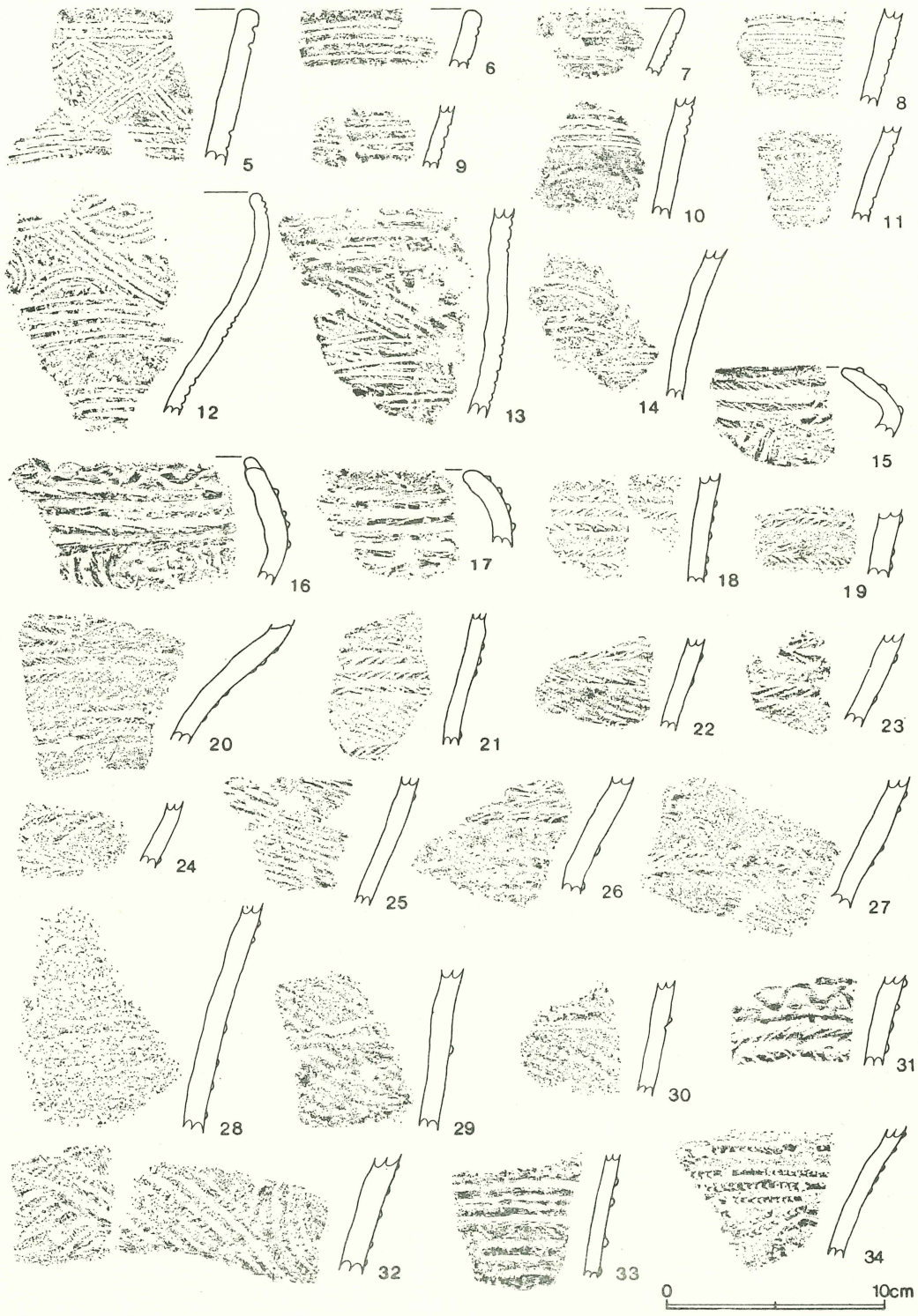
第11号住居址出土土器（第46～48図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	4単位の波頂部をもつキャリパー状縄文の深鉢で頸部から口縁部の開きが大きい形態を示し弱い収縮部をへて、筒状の胴部え移行する。 口縁に沿っては浮線が巡り、波頂下には瘤状の突起を配し、文様帯には対向する孤状と曲線的に浮線を配す。頸部までは並列する浮線が数段続く。収縮部には無文の浮線がX状、縦位に貼付される。胴部には数段巡っている。浮線上には刻目を交互方向に施す。	胎土は緻密。長石、石英を含有。焼成は良好。色調はにぶい橙良。	
2	キャリパー状口縁をもつ深鉢の頸部で、外反の強い形態がある。浮線は数段にわたり配される。器面の縄文は地文ではなく最終工程で施文されたＲＬの原体である。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗褐色。	
3	底部で、平行沈線が巡る。	胎土は緻密。焼成良好。赤褐色。	
4	底部で、浮線文をもつ。地文にはＲＬの原体を用いている。	胎土は緻密。焼成良好。暗赤褐色。	
5	平口縁の深鉢。口縁には平行沈線が１条、胴部上半には２条の沈線が文様帯を区画、内部には対向する山形の文様が連続する。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
6・7	平口縁深鉢の口縁部破片である。口縁部の外反が強い。口縁に沿っては平行沈線が巡っている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は６が黒褐色、７は暗赤褐色。	
8～11・13	深鉢の胴部破片である。平行沈線を施すもので、８は数条、11は区画帯を設けている。11は地文にＲＬの縄文を施文している。13は、胴部下半の破片で平行沈線の区画内に斜方向の平行沈線を埋めている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
12	キャリパー状口縁をもつ深鉢。口縁部には、平行沈線が巡り区画を行い、孤線状に沈線が施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	



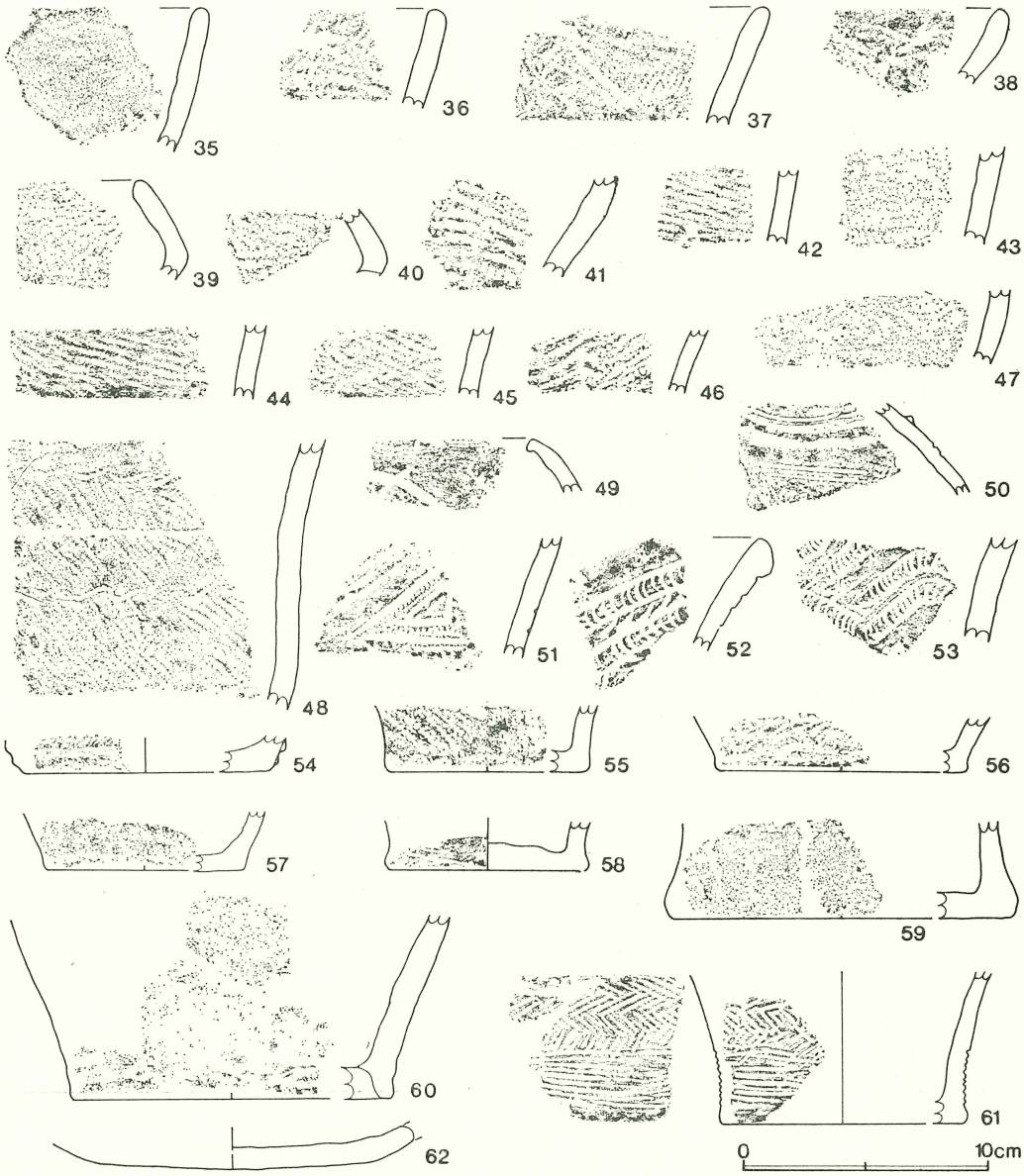
第46図　第11号住居址出土土器　(1)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
14	平口縁深鉢の胴部破片が、平行沈線が作る文様帯内には木ノ葉文が数段施されている。	胎土には片岩が目立って含有。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
15	キャリパー状口縁をもつ深鉢。口縁に沿って3条の浮線が巡る。浮線上には、同一方向の刻目を加える。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
16・17	キャリパー状口縁をもつ深鉢の口縁部破片。16は平口縁で小突起をもつ。共に浮線上は無文である。16の口唇部には波状の浮線が施されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は16が暗赤褐色、17が赤褐色。	
18〜31	胴部破片で浮線文をもつもの。20、24は口縁部文様帯で、曲線的に展開する。他は、浮線が数条巡っている。浮線上には刻目をもつ。地文として縄文を施文し、18〜20とＬＲ、他はＲＬの原体を用いている。31は収縮部で無文の浮線を波状に連続する。	胎土は緻密。焼成は良好。色調18、19、20がにぶい橙色、他は暗赤褐色。	



第47図　第11号住居址出土土器　(2)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
32・33	浮線をもつ土器で、浮線上に縄文を施するも、32は胴部文様帯をもつもので曲線的、33と数条の浮線が巡る。縄文の原体はＲＬである。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色。	

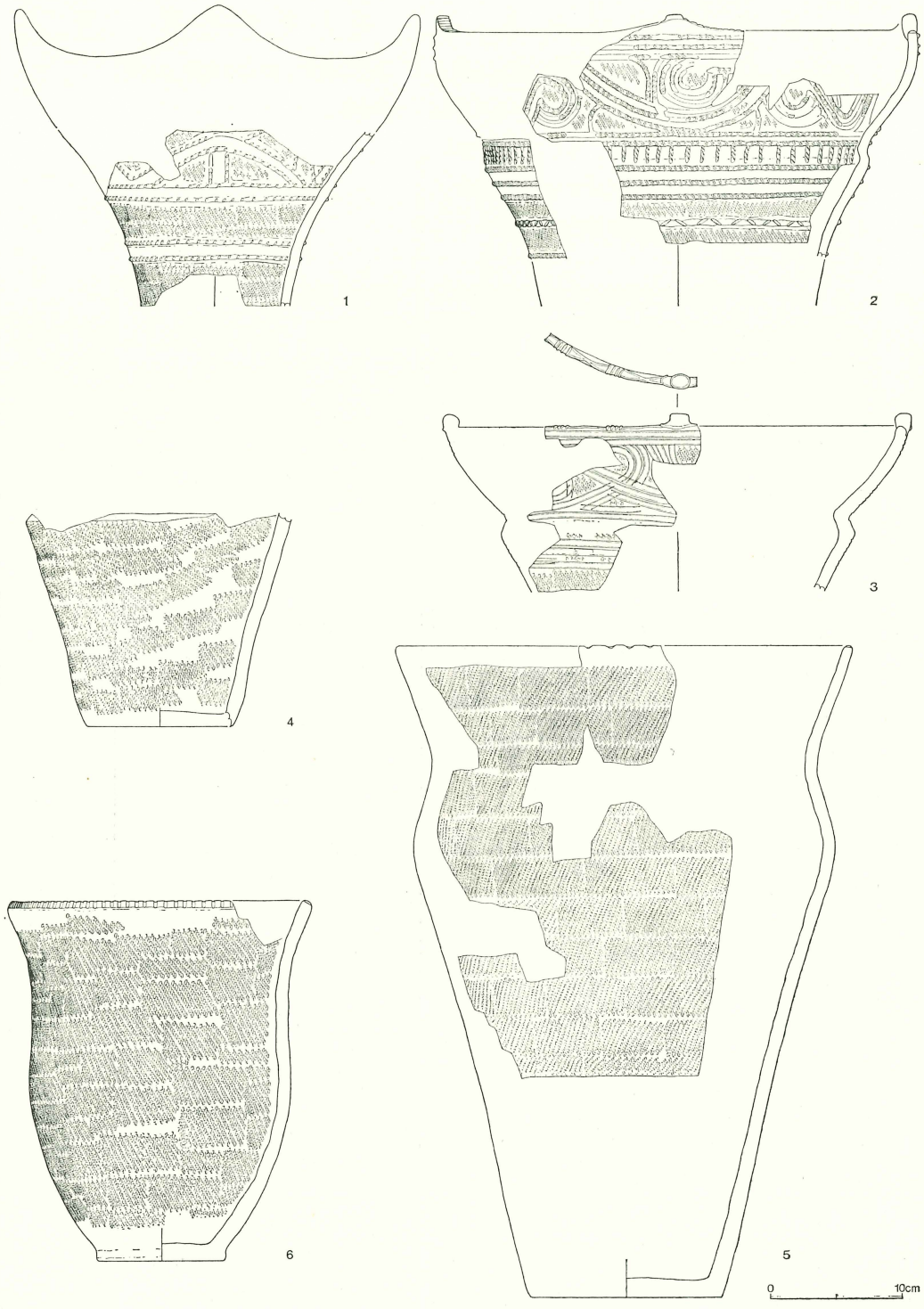


第48図　第11号住居址出土土器　(3)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
34	深鉢の胴部破片で浮線文をもつが、浮線上には半裁竹管を用いて刺突を加えている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
35〜38	外反する口縁部をもつ平口縁の深鉢。器面には縄文を施文する。37はＬＲ、他はＲＬの原体を用いている。	胎土は37、38に片岩が目立って含有。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色。	
39〜41	キャリパー状の口縁をもつ深鉢。39、40は内折気味の口縁部である。器面には縄文が施文され、39はＬＲ、40、41はＲＬの原体である。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色。	
42〜48	胴部破片で縄文が施される土器。44、48がＲＬの縄文原体を用い、48は平部の綾絡文が見られる。他はＬＲが施されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
49	内湾する口縁部をもつ鉢形。太い平行沈線が曲線を描いている。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	
50	内湾の強い口縁部をもつ鉢形。浮線文が１条貼付され、上、下には平行沈線が文様を描いている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調はにぶい橙色。	
51〜53	深鉢の口縁部および胴部破片が爪形文をもつもの。51は三角形、52は口縁に沿って、53は曲線的に爪形文を施している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に赤褐色。	
54	底部である。２条の浮線が巡っている。浮線上には刻目を施文している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
55〜60	底部で縄文をもつもの。55は縄文原体ＲＬ、他はＬＲで施している。59は胴部へ収縮して移行する形態である。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色。	
61	底部、平行沈線により区画され、内部には綾杉状沈線が埋める。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
62	底部で、粘土接合面での彩落、鉢形の底部かもしれない。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	

第12号住居址出土土器（第49～50図）

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	キャリパー状口縁をもつ4単位波状の深鉢の胴上半部で、浮線文をもつ土器、胴上半には2条の浮線が区画し、内部には孤線を描き、2条の縦線が縦に貼付される。浮線上に圧痕状の刻目を施す。地文として縄文ＬＲを施す。浮線間は磨消しを加える。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
2	キャリパー状口縁をもつ深鉢。4単位の突起をもつ。口唇部には刻目を縦位に施す。口縁部文様帯には、曲線的な文様を構成する。収縮部には縦位に浮線が連続する。下半部には太い浮線が巡り浮線上には八字状の刻目を加え、縦位浮線には細い刻目を施す。他は浮線上には縄文ＲＬを施文する。地文には縄文ＬＲ、ＲＬの2種の原体を用いて縄文を施している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	
3	キャリパー状口縁をもつ深鉢。4単位に小突起を配す。口唇部には無文の浮線をＸ状に貼付し、縦3本の浮線が結ぶ。口縁部および胴部には平行沈線が数条区画し、文様帯を作り、内部には曲線的な文様を描いている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は灰褐色。一部黒斑をもつ。	
4	深鉢の胴下半の土器で、器面には縄文ＲＬが施文されている。	胎土は荒く、片岩が目立つ。焼成良。色調は赤褐色。	埋甕。
5	口縁部下に収縮部をもつ深鉢。口唇部には棒状工具により縦位の押圧痕をもつ。器面には0段多条の縄文である。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は黒褐色。	
6	外反する口縁部と膨みを胴部にもつ平口縁深鉢口唇部は外に開いて、刻目が連続する。器面には縄文ＲＬの原体を用いて施文する。	胎土は緻密。焼成は良好。色調はにぶい橙色。	
7	キャリパー状口縁をもつ深鉢。4単位の小突起を配す。平行沈線が2条口縁を巡る。口縁部には孤線の構成を沈線が描く。地文には縄文ＲＬ。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成良好。色調は暗赤褐色。	



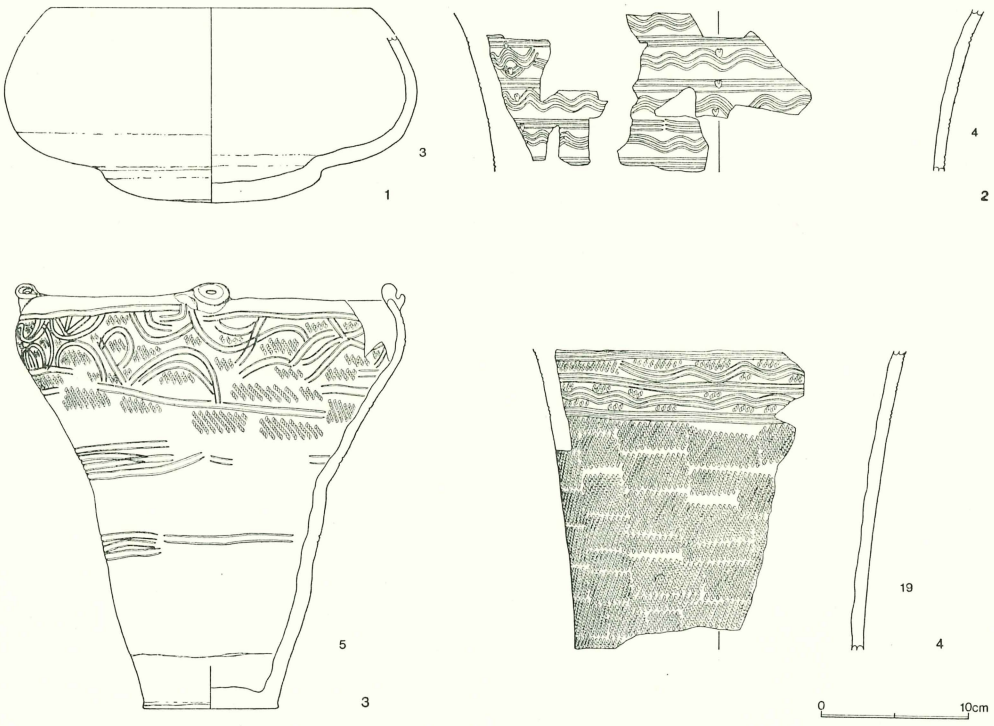
第49図　第12号住居址出土土器　(1)

第50図　第12号住居址出土土器　(2)

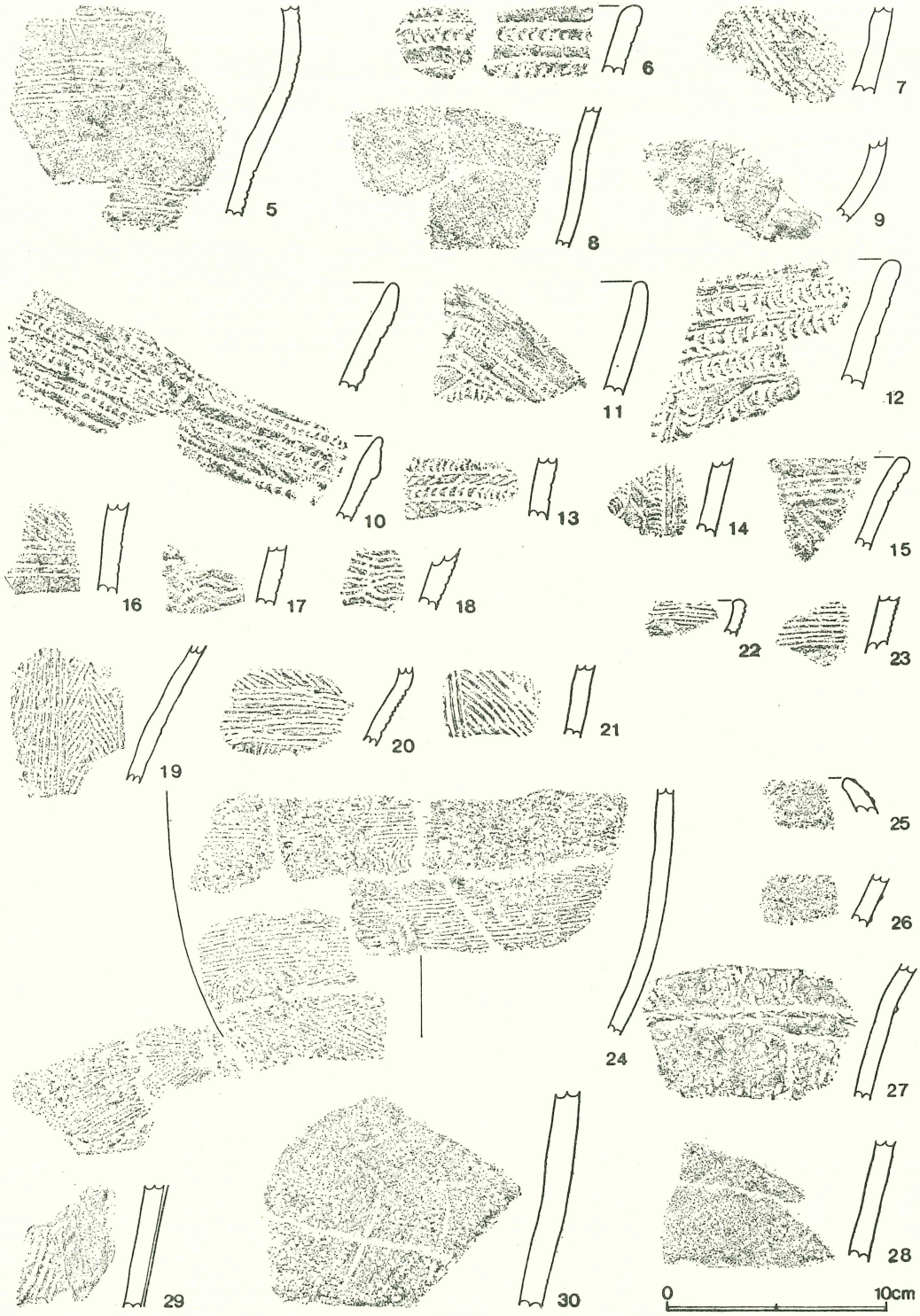
番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
8・9	胴部破片、平行沈線が胴部を巡る。地文として縄文ＲＬを施している。	胎土は荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は共に暗赤褐色である。	
10～14	深鉢の胴部破片。爪形文をもつ。10～12、13は胴部の区画帯、10、11、14は爪形文の間に刻目を加えている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は14がにぶい橙色。他は暗赤褐色である。	
15～19・24	キャリパー状口縁をもつ深鉢。口縁部直下および胴部破片。15～18は曲線的な浮線をもつ。他は胴部を数条の浮線が巡る。浮線上と地文には、全て縄文ＲＬの原体を用いて施文している。		
20～23	深鉢の胴部破片である。浮線文をもち、浮線上に刻目を施す土器である。21、22は横走する浮線である。23は、４条の浮線が巾広く胴部を分けて内部に１条の浮線が巡り、内部には短い浮線が孤状に連結して楕円状の構成を示す。空白部には円形竹管の刺突を施している。地文には縄文ＲＬを施している。	胎土は23が荒く片岩が目立つ。焼成は良好。色調は20、23が黒褐良で、23は一部赤褐良を呈す。他は暗赤褐良。	
25～27	深鉢の口縁部および胴部破片。器形に縄文を施し原体はＲＬである。	胎土は緻密。焼成良好。良調は暗赤褐良。	

b　土壙出土土器（第51～53図）

番号	器　形、文　様　の　特　徴	胎　土、焼　成、色　調	備　　考
1	口縁を欠損するが、体部は球状に膨み、底部は丸底となる鉢形土器。器面には研磨を加えている。内面はヘラ状工具の整形痕を残す。	胎土は緻密。焼成良好。良調はにぶい橙良。	第３号土壙。
2	深鉢の胴部。平行沈線が数段にわたり胴部を区画し、内部には波状に沈線が巡る。縦位に竹管工具の刺突が縦区画を行なっている。	胎土は緻密。焼成良好。良調は赤褐良。	第４号土壙。諸磯ａ式。
3	キャリパー状口縁をもつ深鉢。内湾する口縁は弱い収縮部をへて底部に向う。口縁には４単位の突起をもつ。１条の平行沈線が口縁部を区画、内部には孤線および曲線を沈線が描く。胴部下半には沈線が巡る。地文として縄文ＲＬが施されている。	胎土には片岩が目立って含有。他に石器、長石を含む。焼成は良好。色調はにぶい橙良。	第５号土壙出土。

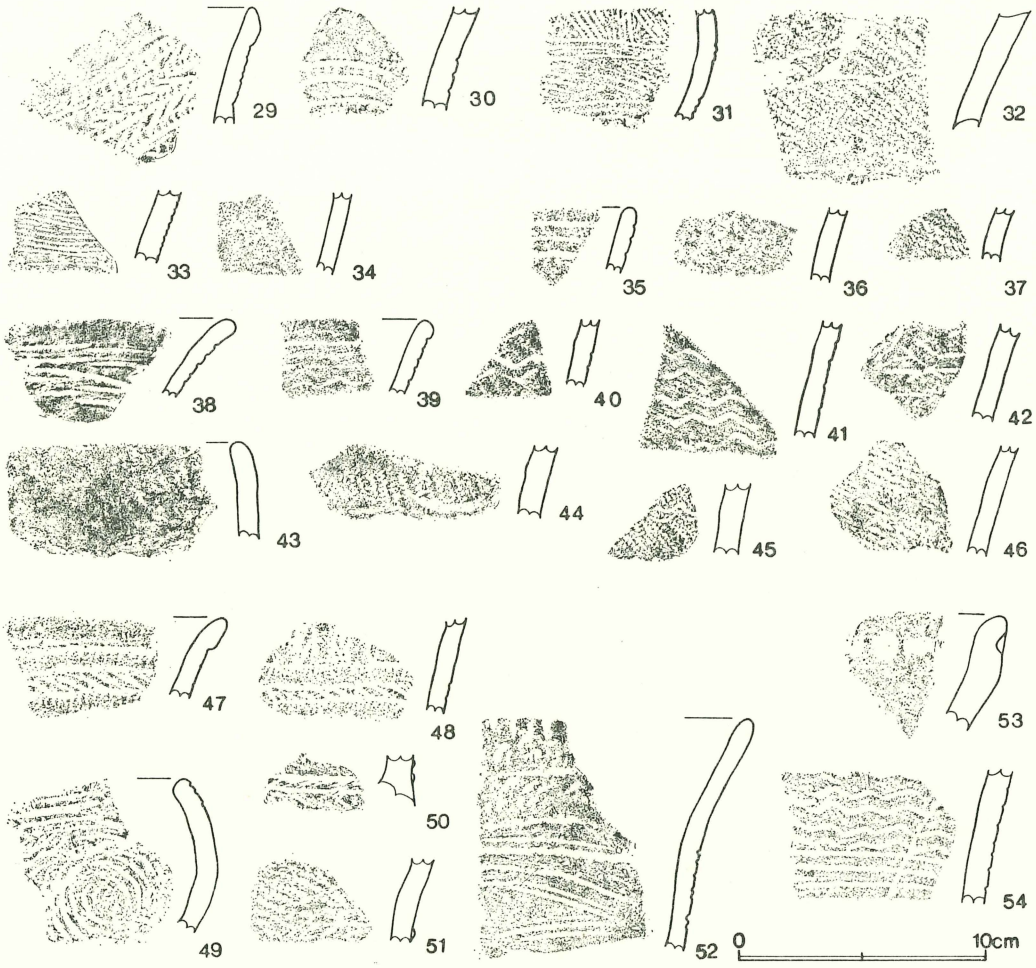


第51図　土壙出土土器　(1)



第52図　土壙出土土器　(2)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
4	筒状の胴部形態の深鉢。口縁部には、平行沈線が数条巡り区画し、内部には波状に沈線を埋める。胴部下半には縄文ＬＲを施文している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は赤褐色。	第19号土壙。諸磯ａ式。
5	胴部下半の破片、平行沈線が数条施文されている。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	第１号土壙。
6〜9	6は平口縁深鉢で爪形文を施す土器。口縁に沿って２条の爪形文、７〜９は胴部破片で縄文ＲＬが施文されている。	胎土は共に緻密。焼成良好。6は暗赤褐色。７〜９は赤褐色。	第２号土壙。
10〜18	10〜14は深鉢で爪形文を施す土器。10、11は波状口縁、12は平口縁、13、14は胴部上半の破片である。10、13は爪形文間に刻目を加えている。12、14は巾広の爪形文である。爪形はＣ字状に施文されている。15、16は平口縁深鉢で平行沈線をもつ土器である。15は木ノ葉文系、16は助骨文系、17、18は波状文系の文様を構成する。	胎土は共に緻密。焼成は良好。色調は10がにぶい橙色、16が黒褐色、他は暗赤褐色である。	第７号土壙。
19〜21	深鉢の胴部破片。器面には平行沈線の集合により文様を描く。19は縦区画内に矢羽根状に沈線を、20は口縁下に横位区画、21は縦区画内に斜位の平行沈線が埋める。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	第８号土壙。諸磯ｃ式。
22・23	深鉢の口縁部および胴部破片で共に沈線が集合して巡る。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	第９号土壙。諸磨ｃ式。
24	深鉢の胴部破片。平行沈線が集合して区画を行い内部には曲線的に集合する沈線を埋める。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は暗赤褐色。	第10号土壙。
25〜28	キャリパー状口縁をもつ深鉢。浮線文が巡る。浮線上には刻目を加える。28は縄文ＬＲを施文している。	胎土は緻密。焼成は良好。色調は25、26がにぶい橙色、27、28は暗赤褐色。	第11号土壙。
29・30	深鉢の胴部破片。29は微隆帯の区画をもち無文部縄文帯をもつ。30は沈線が曲線を描く。内部には縄文ＲＬを施文する。	胎土は荒い。焼成は良好。色調は黒褐色。	第12号土壙。



第53図　土壙出土土器　(3)

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
29・30	波状口縁をもつ深鉢の口縁部および胴部破片。器面には爪形文を施す。29の爪形文の間には刻目を加える。爪形は共にC字状に施文する。	胎土は緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	第13号土壙。
31・32	深鉢の胴部破片。31は平行沈線、32は縄文ＲＬの原体を用いている。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。32は暗赤褐色。	第16号土壙。
33・34	深鉢の胴部破片。33は沈線の集合、34は縄文ＲＬが施文される。	胎土は緻密。焼成良好。色調は共に暗赤褐色。	第17号土壙。

番号	器形、文様の特徴	胎土、焼成、色調	備考
35〜37	35は平口縁の深鉢、平行沈線が口縁を巡る。36、37は縄文をもつもので共に原体はＲＬである。	胎土は緻密。焼成良好。色調は暗赤褐色である。	第18号土壙。
38〜46	38〜42は平口縁深鉢の口縁部および胴部破片で、平行沈線を施すもので、36は数条が巡る。他は沈線が山形に施文されている。43は内湾する口縁部をもつ破片で、縄文ＲＬを施している。44〜46は縄文ＲＬを施文している。	胎土は緻密。焼成良好。38〜41はにぶい橙色、他は暗赤褐色。	第20号土壙。
47・48	深鉢の口縁部および胴部破片である。爪形文を施す土器である。47は平口縁で、爪形文で２条巡り、爪形文の間に刻目を施す。48は胴部区画帯、縦位の爪形を構成する。爪形文はＣ字状に施文。	胎土は共に緻密。焼成良好。色調は赤褐色。	第25号土壙。
49〜52	49はキャリバー状口縁をもつ深鉢。平行沈線が渦巻状に施される。50、51は深鉢の胴部破片で浮線文を施す。浮線上には刻目、地文には縄文ＲＬが施されている。52は平口縁深鉢。口縁には縦位に刻目が連続する。口縁下には変形爪形文、胴部には平行沈線が施されている。	胎土は共に緻密。焼成は良好。色調は49がにぶい橙色。50、51が暗赤褐色、52が黒褐色である。	第26号土壙。52は浮島系土器。
53	深鉢の口縁部破片。口縁部文様帯に円刻と太い沈線が巡る。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	第28号土壙。
54	深鉢の胴部破片。平行沈線が波状を描く。	胎土は緻密。焼成良好。色調はにぶい橙色。	第27号土壙。

4. 石　　器（第54～60図）

遺跡は縄文前期諸磯a・b式期の単独時期に営まれた集落であり、出土石器は該期に属する。図化された石器が出土石器の大半であり、他に剥片が若干量出土している。

石器は次のように分類し、記述する。Ⅰ　打製石斧、Ⅱ　磨製石斧、Ⅲ　両頭打製石斧、Ⅳ　石匙、Ⅴ　石鏃、Ⅵ　スクレイパー、Ⅶ　敲石・凹石、Ⅷ　石皿、Ⅸ　その他。以下各々石器を説明していく。尚、打製石斧・磨製石斧はその遺存状態について次のように分類しておく。基部側のみ⅓余りをa_2、½余りをb_2、⅔余りをc_2とし、刃部側⅔余りをa_1、½余りをb_1、⅓余りをC_1とする。基部・刃部を欠損し胴部のみのものをdとし、完存品をeとする。さらに、割れ口が斜めのものは「ダッシュ」をつけた。

Ⅰ　打製石斧（1～38、42～44）

分類上、長さが幅の2倍程度のものをa類、長さが幅の2.5倍以上あるものをb類とする。

1a類（1～5）

両側縁が直線状で刃部がわずかに広がり、基部に抉りのあるもの。1～5は整った形をしており、1・2は表面に自然面を大きく残している。1～3は比較的厚みがあり、4・5はやや薄い。2の表面は抉り部の剥離が大きく、裏面の刃部に階段状剥離がみられる。3・4は両側縁の階段状剥離で薄くなっている。4は基部を欠損する。1・3は円刃、2は偏刃であり、4・5は直刃に近い。

2a類（7・8）

両側縁が直線状で刃部がわずかに広がるもの。2点とも薄手で7はほぼ円刃、8は直刃で隅は丸味をおびている。

3a類（6・9～11）

両側縁が直線状でほぼ平行であり、浅い抉りのあるもの。6の基部は同幅で、刃部は基部より幅広で円形を呈し、丸刃となっている。9は厚く、断面は湾曲して、形態は歪み、刃部を欠損する。10は厚手で表面左側縁と裏面左側縁で急角度剥離調整されている。刃部も裏面より急角度剥離調整される。11は刃部が欠損するが、基部は薄く、胴部は厚みがあり湾曲している。

4a類（12～14）

両側縁が直線状でほぼ平行のもの。3点とも基部を欠損する。13は基部に若干抉りがみられる。14は両側縁で急角度剥離調整されている。13の刃部の隅は丸味があるが、3点ともほぼ直刃である。

5b類（16～18）

両側縁が直線状でほぼ平行であり、側縁中心に抉りのあるもの。17は胴部の整った抉りにより基部と刃部が対称形をなしている。18は縦断面の中央部が厚く、側縁部が薄くなっている。

6b類（15・19～22・27）

両側縁が直線状で刃部がわずかに広がり、基部にやや抉りのあるもので、1a類より長く幅狭のもの。15の両側縁はほぼ直線で薄手である。19の基部は幅狭で、胴部⅔下半は幅広になって、整った形態である。20は左側縁で急角度剥離調整され、刃部は偏刃で調整剥離はないが鋭い。21は基端

を欠損し、刃部から基部に向って狭くなり、刃部は偏刃となっている。22は基部が狭くなり刃部は一部欠損する。27は刃部に凹みがみられる。

7 b類（23・24）

両側縁が直線状で刃部が広がり、基端が尖っているもの。6 bに比して尖りが顕著である。23は刃部を欠損し、24は自然面を残し偏刃である。

8 b類（25・26・28・29）

両側縁は中央部から刃部にかけて広がり、基端部が刃部幅の½程度のもの。25は自然面を基端および刃部側に残し、基部を大きく剥離している。刃部は片刃で直刃である。26は丸刃で薄手であり、裏面右側縁に急角度剥離調整がみられる。28は基部が厚く剥離され、中央で稜をもっている。刃部は表面が小剥離で、裏面は急角度の調整剥離が施されている。29は薄手で、刃部は自然面と裏面の平坦な成形剥離とで鋭くなっている。

9類（36）

小形の打製石斧である。尖った基部を有し、刃部を欠損する。両側縁に調整剥離がみられ、薄手である。

10類（37・38）

大形の打製石斧である。37は台形状をなし厚手であるが、成形剥離がよく施されている。38は分厚く塊状であるが、成形剥離がみられる。刃部を欠損し、基部のみである。

欠損品（30～35）

30は基端・刃部を欠損する。32は刃部のみの遺存状態であり、表面に自然面を残す。33は基部のみの遺存であり、台形状をなし、側縁は急角度調整されている。34は刃部のみであるが円刃で、断面はやや歪んでいる。35は刃部のみの遺存である。31は基部を破損するが、剥離調整されている打製石斧と思われる。ただし、石質は磨製石斧と同じ輝緑岩であり、磨製石斧の敲打調整が行なわれない段階の可能性がある。

その他（42～44）

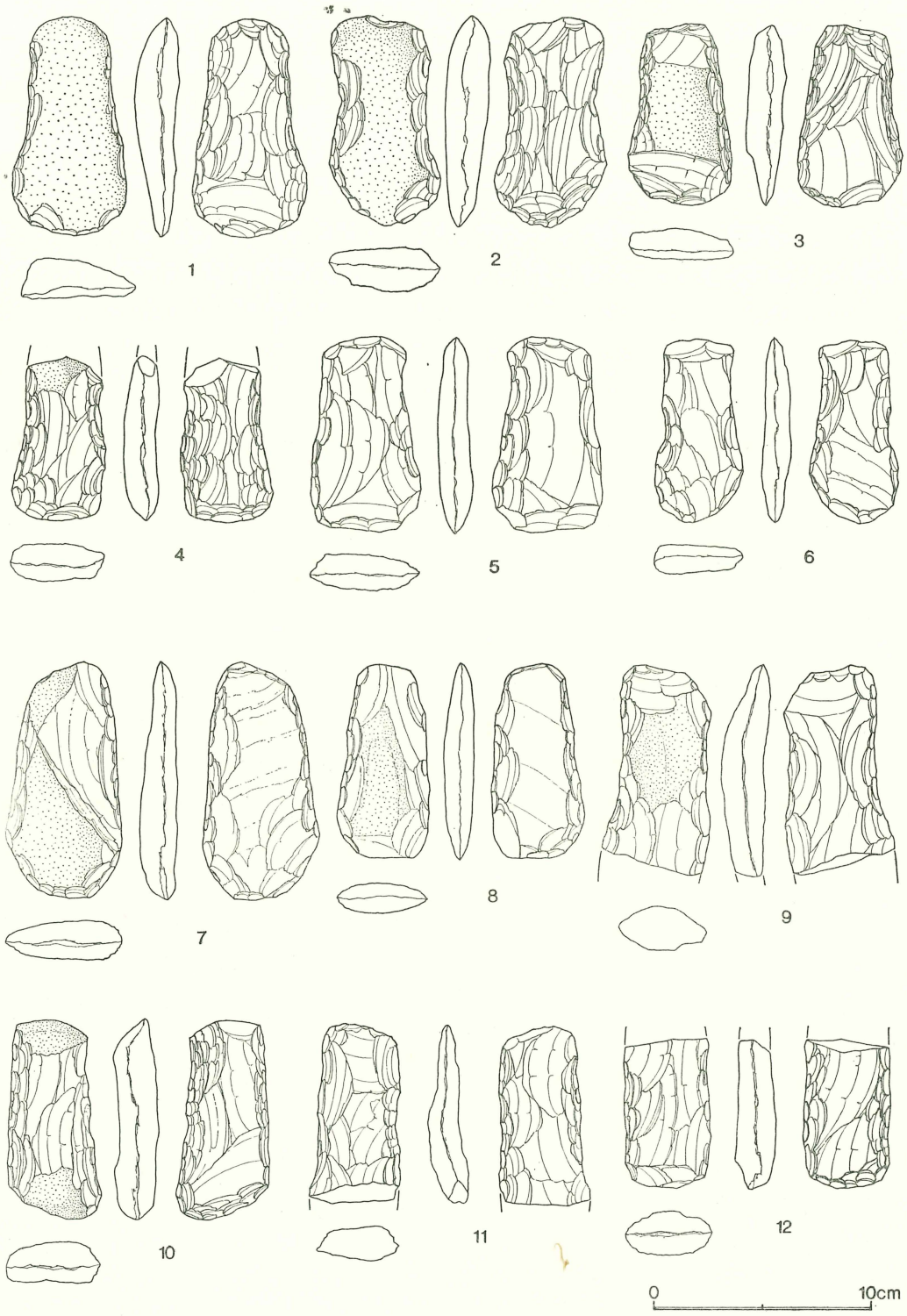
44は節理面より折断され、基部を欠損している。裏面の自然面周辺と剥離痕の稜には、敲打調整が施されている。また、端部には敲打痕がみられる。42は断面が三角形をした棒状を呈していて、端部はそれぞれ欠損し、剥離が各面に施され、稜には敲打痕がみられる。43は断面が平行四辺形状を呈し、厚く、剥離はわずかにあるが敲打痕はみられない。

Ⅱ　磨製石斧（45～55）

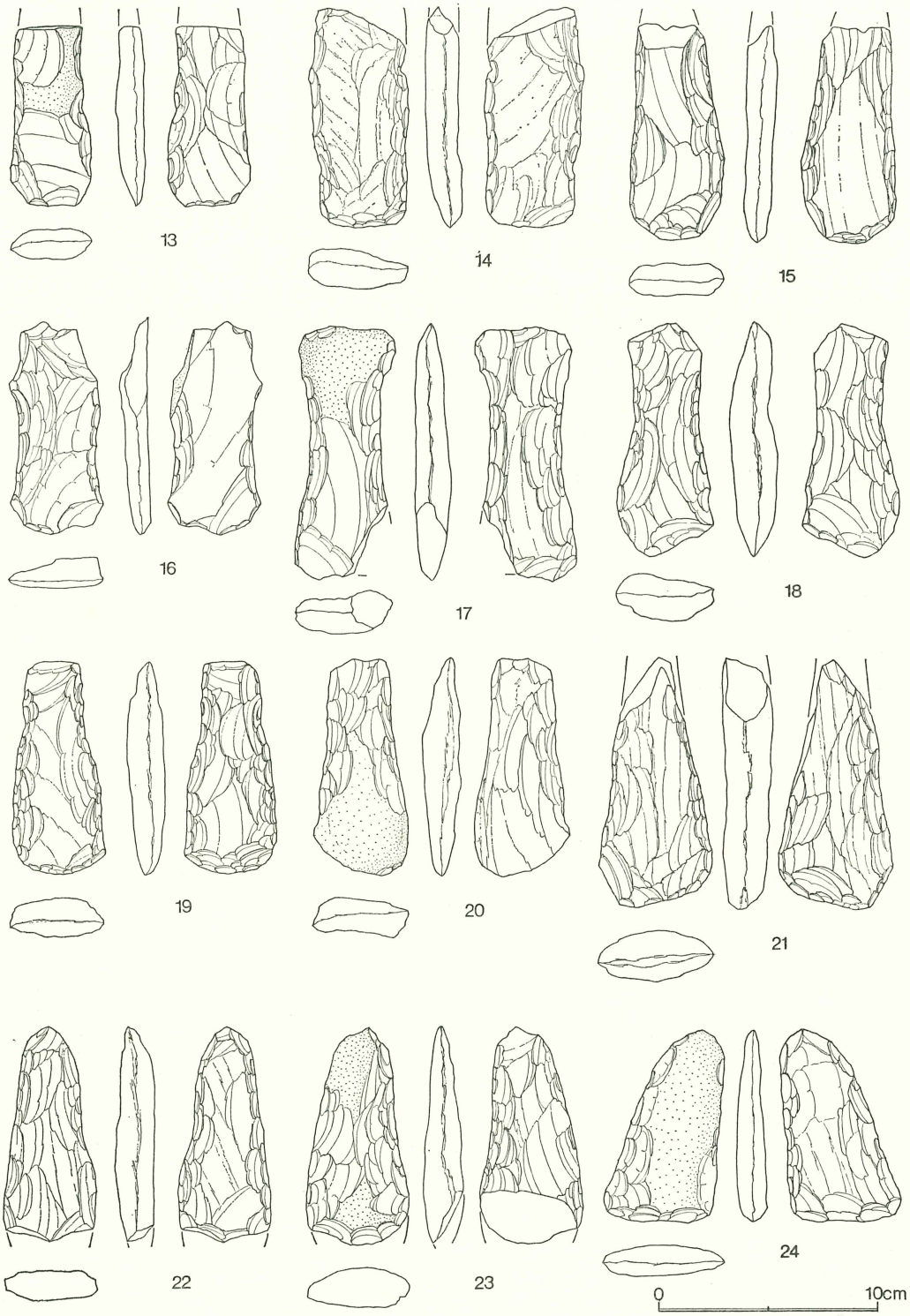
輝緑岩を原材とし、定角形磨製石斧、乳棒状磨製石斧、研磨調製されたものと敲打調整されたものがあり、剥離調整後に一部敲打調整されたものがみられる。乳棒状磨製石斧の製作址をもつ尾崎遺跡（1977鈴木）では、磨製石斧の未成品・欠損品・剥片を多量に出土するが、この製作工程の解明により当遺跡出土の石器も各工程の一部を示している。

1類（45・46）

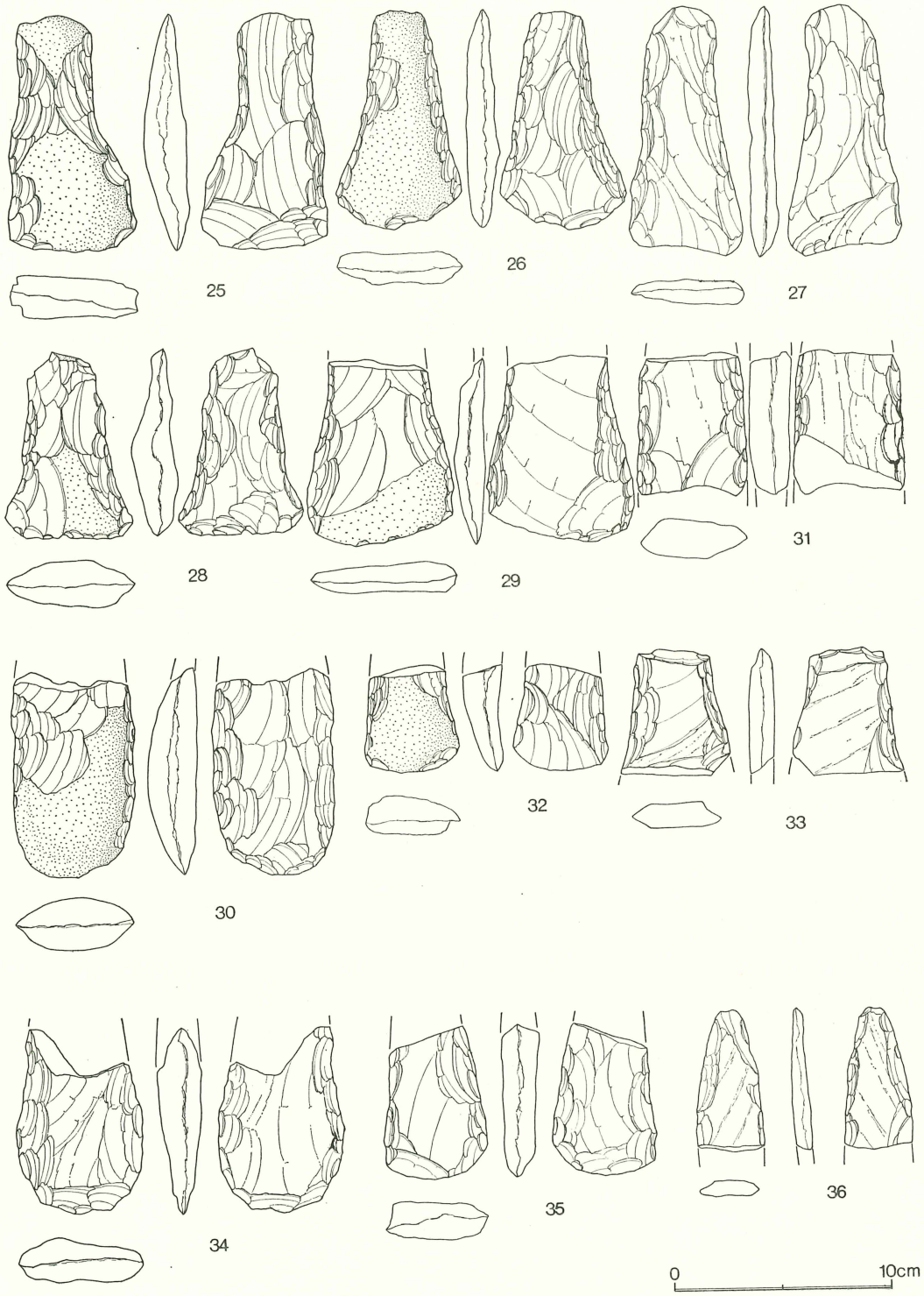
定角形磨製石斧で全面が麗美に研磨調整されている。2点とも両蛤刃であり、基部を欠損している。45は刃部に欠損個所がみられる。



第54図　石　　器 (1)



第55図　石　　器 (2)



第56図　石　　器 (3)

2類（47）

定角形磨製石斧であるが研磨調整されずに、全面が敲打調整されている。基部が斜めに欠損するが、両側縁は平行であり、刃部は両蛤刃である。

3類（48・49・51）

磨製石斧の未成品である。48・49は定角形磨製石斧を目的としたものであろう。48は剥離痕があり、一面は自然面を残し、他面は敲打調整されている。49は大形石斧で、一面は敲打調整が全体になされ、他面では自然面を残し一部敲打調整がみられる。刃部は調整剥離があり、偏刃となっている。51は剥離痕・敲打調整および自然面がある面と敲打痕の面がみられる。3点とも基部を欠損する。

4類（52・55）

基部を尖らせた大形の磨製石斧であり、2点とも刃部を欠損する。乳棒状磨製石斧に近いものかもしれない。欠損部位は2点とも斜めである。2点は両側縁に面をもつ。55では、一面の中央に自然面を残すが、両面とも敲打調整された平坦面をもっている。

5類（50）

敲打調整された乳棒状磨製石斧である。基部に剥離痕を残し歪んでいる。刃部は両蛤刃である。

6類（53・54）

乳棒状磨製石斧の欠損品である。53は基部を残しており、50と同じく剥離痕を残し敲打調整されたものである。54は基部のみ残し、断面三角形を呈し、3面のうち2面は自然面を残す。残った面と側縁が敲打調整されている。

Ⅲ　両頭尖頭器（39）

片頭部のみ遺存している。中央の抉り部が残され、他方にも同様の刃部をもったものと推測される。薄く小形で、刃部は尖っている。両側縁に調整剥離が顕著である。

Ⅳ　石匙（40）

横形石匙であり、刃部と肩部の調整剥離が丹念に施されている。

Ⅴ　石鏃（41）

基部に抉りをもち、正三角形に近い形をしている。

Ⅵ　スクレイパー（57・58）

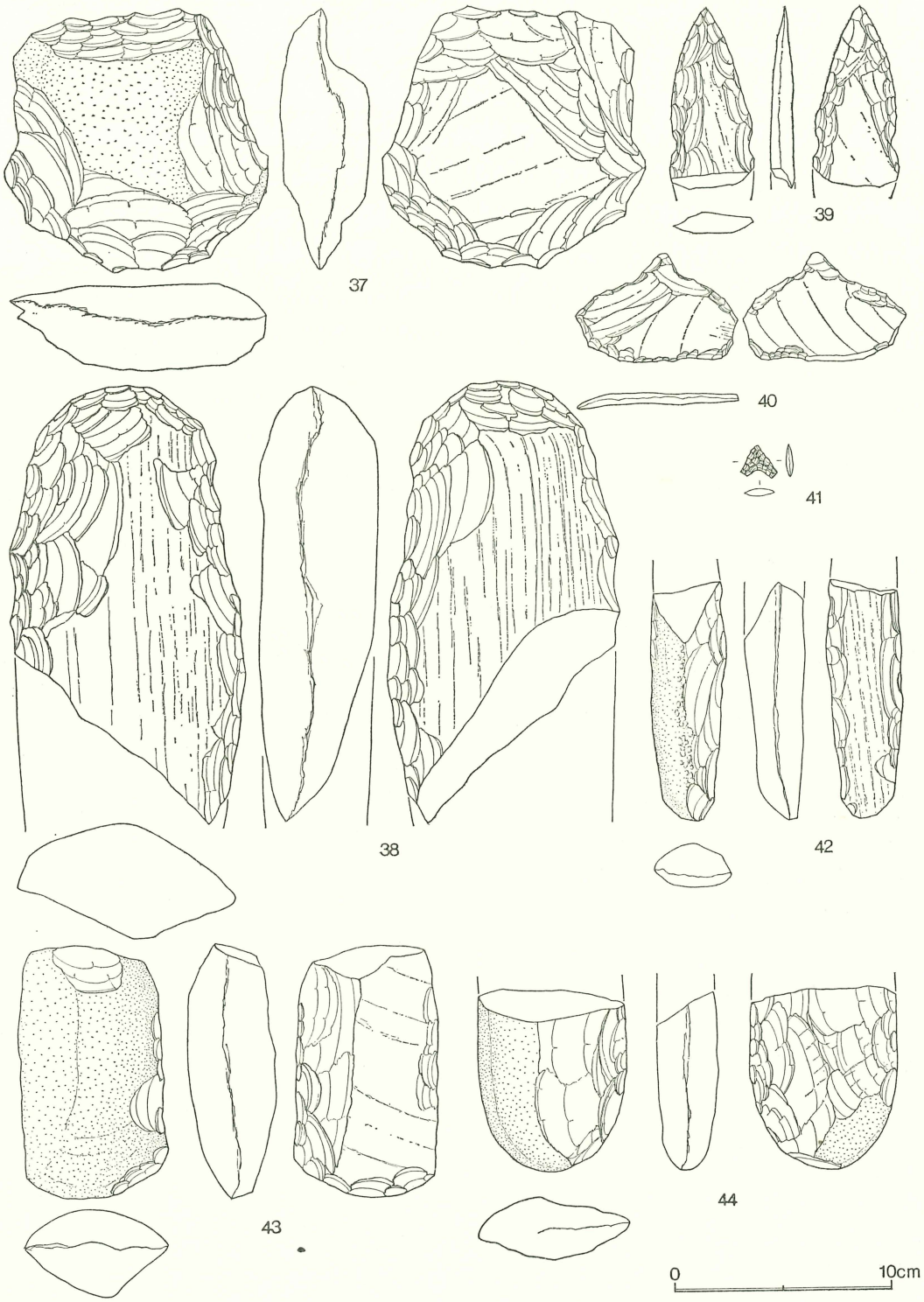
57は刃部・背部が急角度に調整剥離されている。58の刃部の剥離は顕著でない。

Ⅶ　敲石・凹石（59～61）

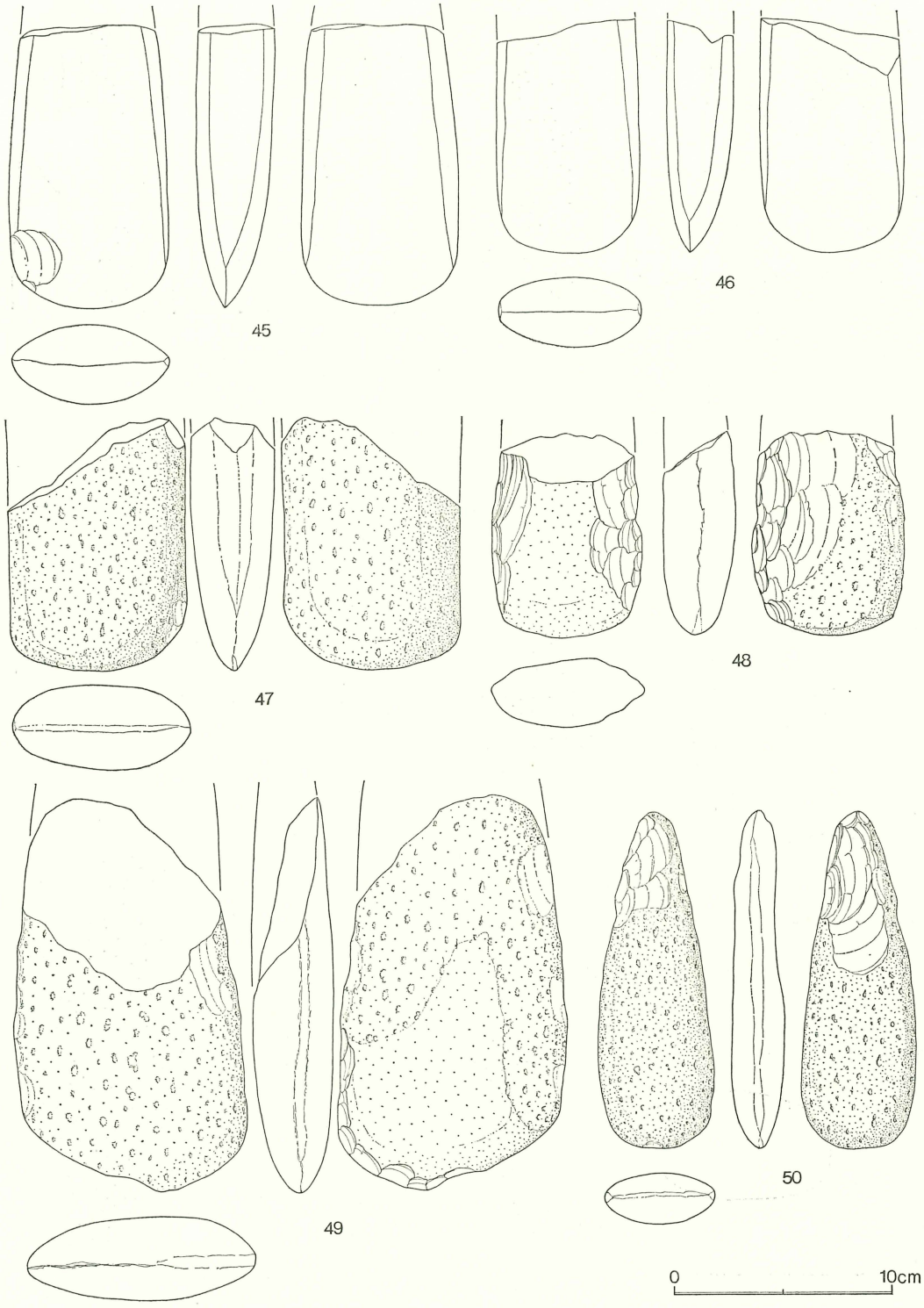
59は両端部に敲打痕がある。凹みは一面に2つ、他面は1つで、この面は摩耗しているため凹みは浅くなっている。各面ともよく磨られており、両側縁が面を形成している。60は円形に近く、両面に1つずつ凹みがみられる。この凹みは2～3個が重なっているようである。端部に敲打痕が若干みられる。61は一面に2つの凹みがあり、両端に敲打痕がある。60・61ともよく磨られて丸味をおびている。

Ⅷ　石皿（62・63）

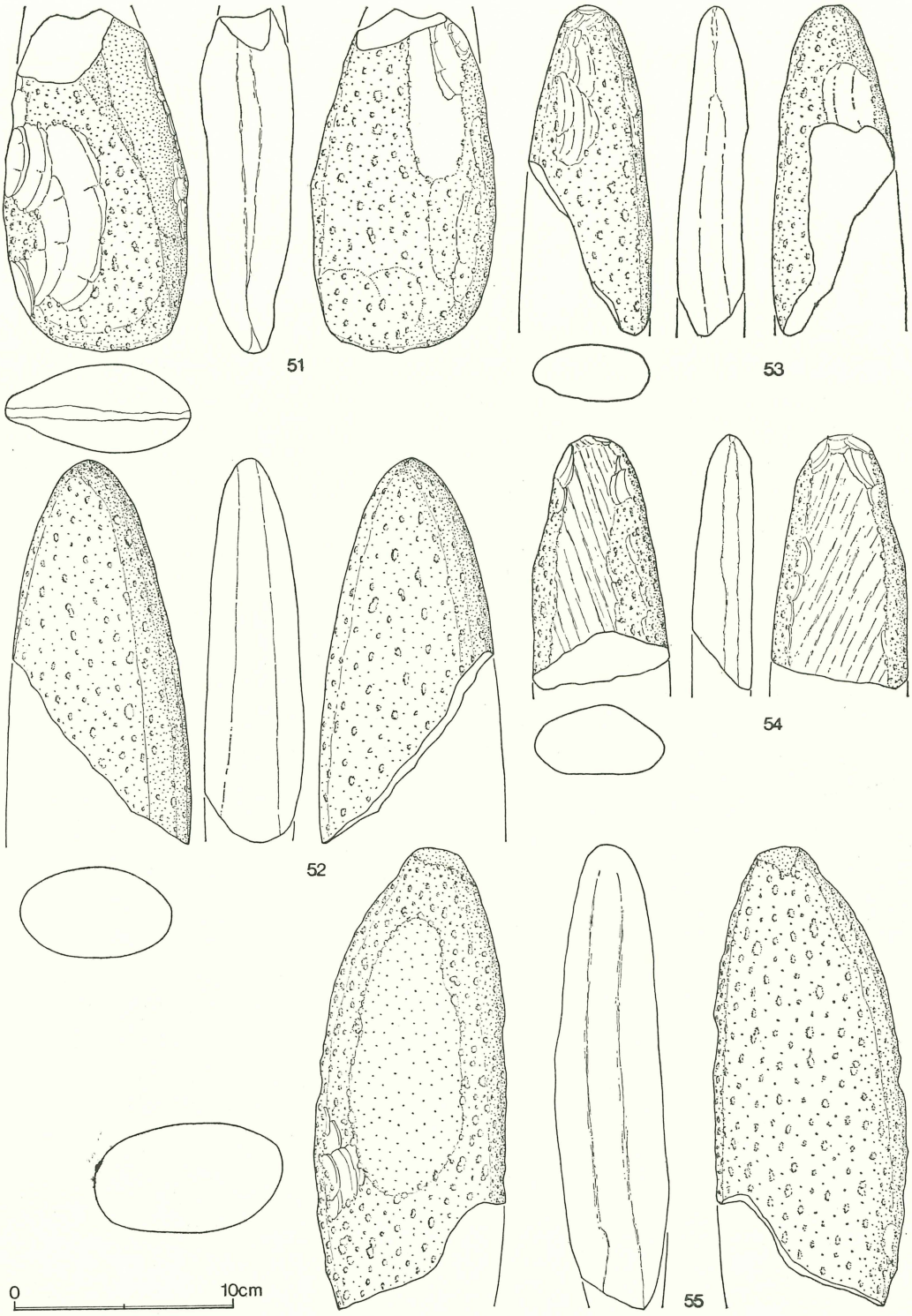
62は石皿の破片であり、皿部は深く削られ、底部は裏面に接近している。表面の周縁部には小さな凹みが4つあり、裏面の平坦部も同様に多数の凹みがみられ、蜂の巣石状を呈している。63は凹



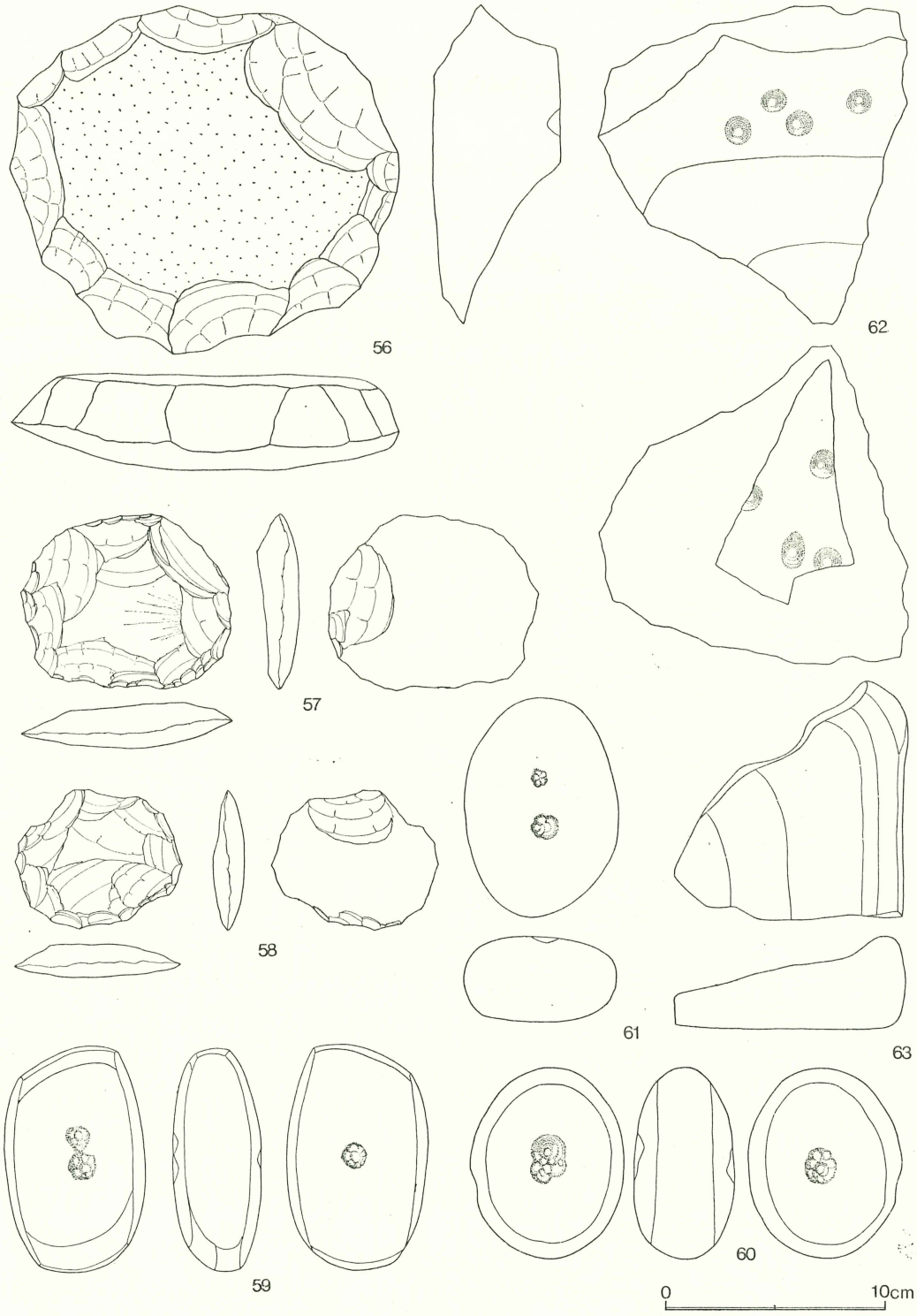
第57図　石　　器 (4)



第58図　石　　器 (5)



第59図　石　　器 (6)



第60図　石　　器 (7)

み部は浅く、周縁部は幅狭である。。石皿の底面は周縁が平坦で内側に向って凹んだ状態となっている。裏面はほぼ平坦である。

Ⅸ　その他（56）

上面は平坦で、下面は球面形を呈する円形磐状の石で周縁部が大きく急角度剥離されている。形は象の足状を呈し、性格は不明である。

原材は輝石安山岩であり、群馬県の榛名山・赤城山周辺に産出する火成岩で搬入品であろう。

（曾根原裕明）

石　器　一　覧　表

図　番	類　　別	石　　質	重さ(g)	長さ(cm)	幅（cm)	厚さ(cm)	出土地点	遺存状態
(1)—1	Ⅰ—1a	中粒硬砂岩	105	10.0	5.3	2.07		e
〃 2	〃	ホルンフェルス	125	9.62	5.2	2.1		〃
〃 3	〃	珪質頁岩	84	8.3	4.8	1.9		〃
〃 4	〃	ホルンフェルス	69	(7.5)	4.4	1.7		a_1
〃 5	〃	ホルンフェルス	81	9.0	5.1	1.7		e
〃 6	Ⅰ—3a	ホルンフェルス	49	8.4	4.1	1.4	8号住土壙	〃
〃 7	Ⅰ—2a	砂質頁岩	105	10.9	5.4	1.7		〃
〃 8	〃	ホルンフェルス	67	8.9	4.4	1.4		〃
〃 9	Ⅰ—3a	ホルンフェルス	107	(9.6)	5.0	2.3		c_2
〃 10	〃	硬質頁岩	99	9.1	4.4	2.1	8号住	e
〃 11	〃	硬質頁岩	66	(8.2)	4.3	1.9		c_2
〃 12	Ⅰ—4a	ホルンフェルス	79	(6.8)	4.1	1.9		b_1
(2)—13	〃	ホルンフェルス	50	(8.2)	3.7	1.4		a_1
〃 14	〃	石墨片岩	95	(10.0)	4.6	1.8		〃
〃 15	Ⅰ—6b	緑泥片岩	83	(9.8)	4.4	1.5		〃
〃 16	Ⅰ—5b	珪質頁岩	50	9.6	4.4	1.5	8号住土壙	a_1'
〃 17	〃	緑泥片岩	110	11.5	(4.6)	1.7		c_2'
〃 18	〃	ホルンフェルス	93	10.6	4.5	2.2		e
〃 19	Ⅰ—6b	ホルンフェルス	85	9.7	4.3	1.8		〃
〃 20	〃	硬質頁岩	69	9.8	4.4	1.9		〃
〃 21	〃	ホルンフェルス	131	(11.4)	5.2	2.4	8号住	a_1'
〃 22	〃	ホルンフェルス	84	(9.8)	4.3	1.9		c_2
〃 23	Ⅰ—7b	安山岩	80	(9.9)	4.8	1.9		〃
〃 24	〃	ホルンフェルス	68	8.7	5.5	1.4		e
(3)—25	Ⅰ—8b	ホルンフェルス	119	10.8	5.9	2.1		〃
〃 26	〃	硬質頁岩	82	10.0	5.8	1.6		〃
〃 27	Ⅰ—6b	ホルンフェルス	89	11.5	5.2	1.4	7号住	〃

図　番	類　別	石　　質	重さ(g)	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	出土地点	遺存状態
(3)—28	Ⅰ—8 b	細粒砂岩	82	8.6	5.9	2.2		e
〃 29	〃	硬質頁岩	89	(8.6)	6.8	1.5		〃
〃 30	Ⅰ	ホルンフェルス	83	(6.6)	5.2	2.0		b
〃 31	〃	輝緑岩	195	(9.4)	5.7	2.4		a_1
〃 32	〃	ホルンフェルス	39	(4.9)	4.4	1.8		c_1
〃 33	〃	ホルンフェルス	53	(5.8)	5.1	1.2		a_2
〃 34	Ⅰ	ホルンフェルス	103	(8.5)	5.9	2.1		b_1'
〃 35	〃	ホルンフェルス	79	(7.0)	4.8	1.8		〃
〃 36	Ⅰ—9	砂質頁岩	20	(6.5)	3.1	0.9		b_2
(4)—37	Ⅰ—10	ホルンフェルス	616	12.0	12.3	4.3		e
〃 38	〃	緑泥片岩	1,538	20.2	10.9	5.5		b_2'
〃 39	Ⅲ	硬質頁岩	33	(8.3)	3.9	1.2		b_2
〃 40	Ⅳ	輝緑凝灰岩	19	4.9	7.5	0.7		
〃 41	Ⅴ	チャート		1.5	1.7	0.3		
〃 42	Ⅰ	輝緑凝灰岩	135	(10.9)	3.6	2.9		a_1
〃 43	〃	ホルンフェルス	363	11.6	6.9	4.1		
〃 44	〃	細粒砂岩	254	(8.4)	6.9	2.9	8号住	b′
(5)—45	Ⅱ—1	輝緑岩	615	(12.9)	7.3	3.7		a_1
〃 46	〃	輝緑岩	373	(10.7)	6.6	3.1	7号住	a_1'
〃 47	Ⅱ—2	輝緑岩	531	(11.5)	8.2	4.0	8号住	b_1'
〃 48	Ⅱ—3	輝緑岩	341	(9.3)	6.9	3.4		b_1
〃 49	〃	輝緑岩	910	(18.0)	10.7	3.8		a_1'
〃 50	Ⅱ—5	輝緑岩	270	15.5	5.3	2.5		e
(6)—51	Ⅱ—3	輝緑岩	815	(15.6)	8.5	4.3		a_1
〃 52	Ⅱ—4	輝緑岩	680	(17.6)	8.1	4.2		c_2'
〃 53	Ⅱ—6	細粒砂岩	323	(15.0)	5.6	3.3		〃
〃 54	〃	輝緑岩	310	(11.6)	6.3	2.9		c_2
〃 55	Ⅱ—4	輝緑岩	1,405	(21.1)	9.0	5.7		c_2'
(7)—56	Ⅸ	輝石安山岩	1,693	15.7	17.8	4.4		
〃 57	Ⅵ	硬質頁岩	162	7.9	9.7	2.0		
〃 58	〃	ホルンフェルス	63	6.3	7.7	1.4	3号住土壙	
〃 59	Ⅶ	安山岩質のスコリア	353	10.3	6.5	4.1		
〃 60	〃	石英閃緑岩	390	8.7	7.1	4.6		
〃 61	〃	輝石安山岩	432	9.9	7.1	3.9		
〃 62	Ⅷ	緑泥片岩	1,041	14.2	14.5	5.9		
〃 63	〃	軽石とスコリアの間	430	10.8	10.7	4.2		

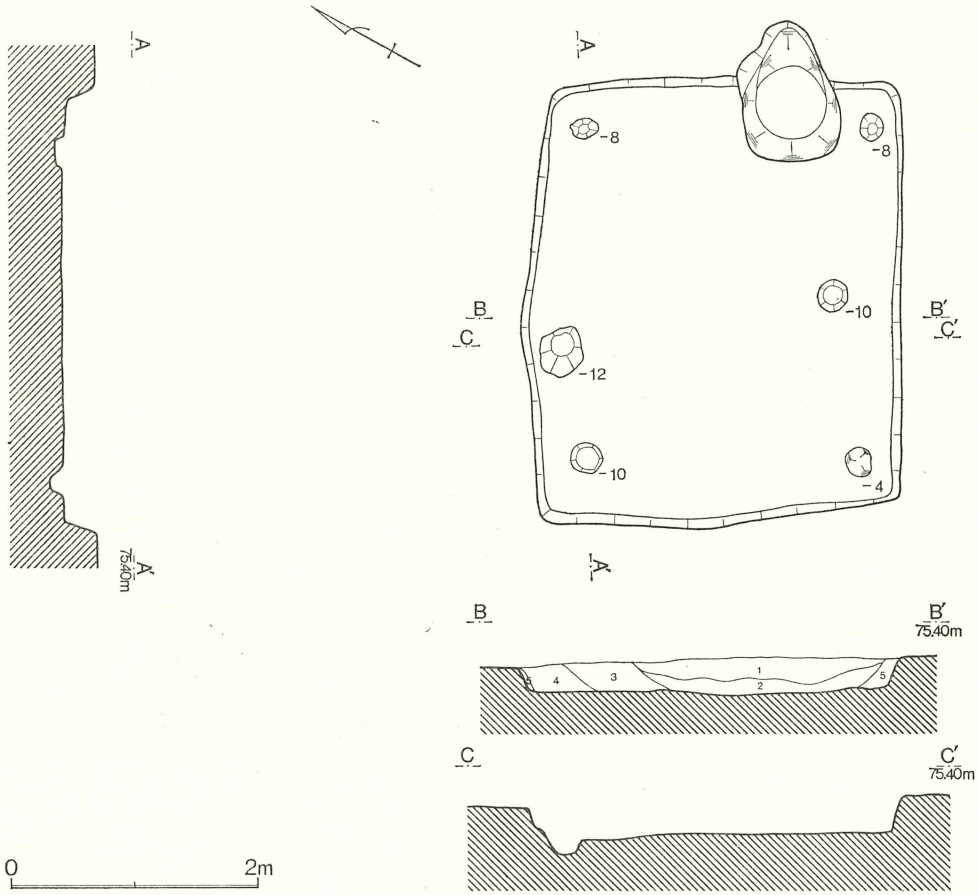
V　平安時代の遺構と遺物

1. 住　居　址

第2号住居址（第62・63図）

調査区の東側C、D—4、5区に位置している。隣接して拡がる台耕地遺跡の平安時代集落と同一の展開を示す住居址である。プランは、長辺約3.6 m、短辺約3 mの長方形を呈し、長軸方向は東西を示している。短辺東側に竈を設置している。壁高は約25cm前後である。床面は、竈周辺を除て軟弱であるが、平担面を作り出している。柱穴は6本検出され、長辺に沿って各々3本対応関係を示している。深度は4～12cm程度の浅いものであった。

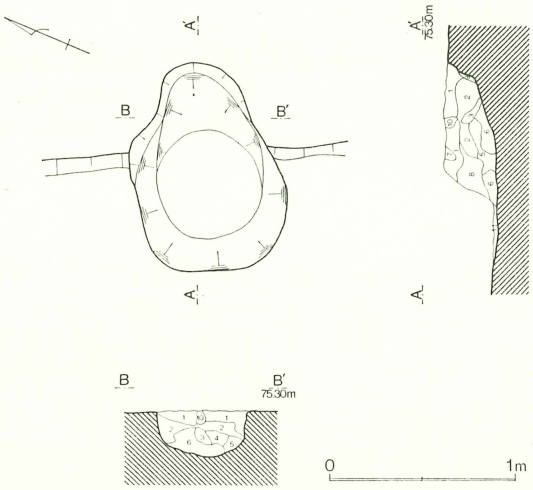
覆土は、6層に区別され、第1層、褐色土で小砂利を含んでいる。第2層、黒褐色土で炭化物を



第61図　第2号住居址

含んでいる。第3層、明褐色土。第4層は、黒味の強い暗褐色土。第5層、明褐色土でロームブロックを含んでいる。第6層はロームブロックであった。

竈は東壁の南側に、東西約1.2 m、南北約80cmの規模をもち設置されている。煙道は、壁を約45cm掘り込まれている。燃焼部は、床面を僅かに掘った楕円状を呈している。土層は、第1層、明褐色土。第2層、黒褐色土で焼土粒子を含む。第3層、明褐色砂質土。第4層、黄褐色土。第5層、黄褐色土で焼土のブロック含む。第6層、茶褐色土。第7層、黄褐色砂質土。第8層、黄褐色土で小砂利を含んでいる。第9層、黒色土。第10層、淡黄褐色土で焼土のブロックを含む。第11層、茶褐色土である。

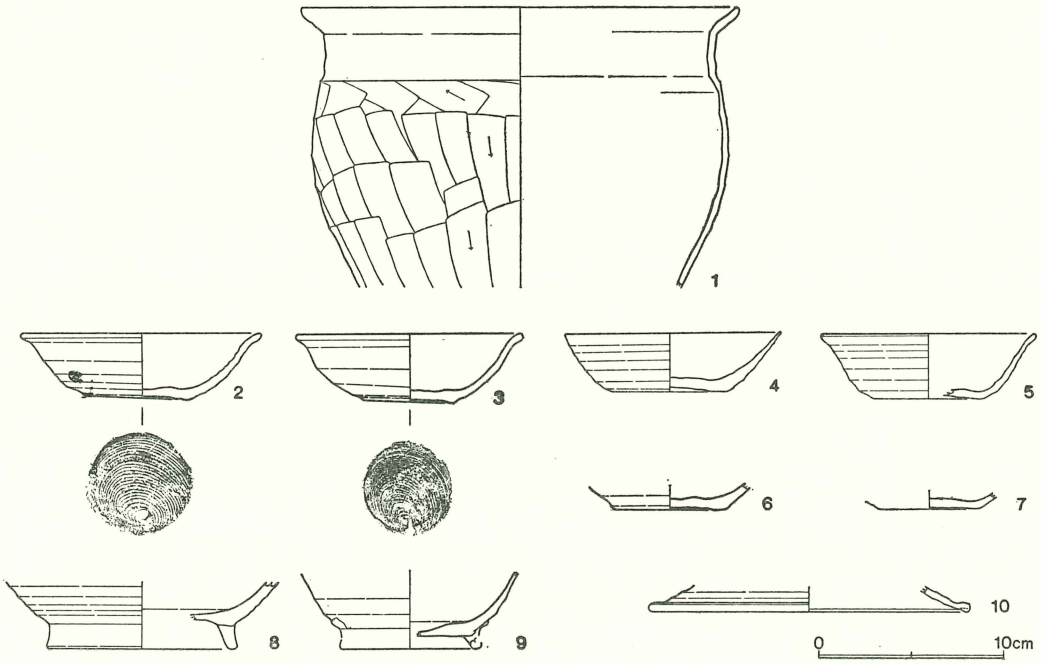


第62図　第2号住居址竈

出土遺物は、竈周辺から検出されて、図示した他は細片で少量の出土であった。

（曾根原裕明）

2. 出土土器（第63図）



第63図　第2号住居址出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 23.2	口縁部—頸部—胴部の変換点が明瞭な、「コ」の字状口縁を呈す。器肉薄く仕上げられている。	口縁部と頸部は横なで。胴部は斜め方向、縦方行の篦削りで、頸部近くは横方向の篦削り。胴部内面はなで。微細な砂粒を少し含む。焼成はやや不良。色調はにぶい橙色。	口縁部の一部と頸部胴部上半1/3残存。
坏	2	口径 11.9 底径 5.3 器高 3.4	口縁部は底部から小さく外反するが、すぐ内湾し、先端で大きく外反んる。内面底部には成形時の凹凸が残る。底部は僅かに上げ底である。	底部切り離しは回転糸切り（糸目は1cmに7つ)。他は回転なで(右轆轤回転)。 砂粒少し含み、5mm大の小礫（乳白色）も僅かに含む。焼成は良好。色調は灰色。	口縁部1/4を欠く。
坏	3	口径 12.3 底径 4.9 器高 3.5	口縁部は底部から小さく外反するが、すぐ内湾し、先端で大きく外反する。内面底部には成形時の凹凸が残る。底部は僅かに上げ底である。	底部切り離しは回転糸切り（糸目は1cmに8つ)。他は回転なで(右轆轤回転)。 砂粒少し含み、7mm大の小礫（乳白色）も僅かに含む。焼成は良好。色調は灰色。	口縁部1/4を欠く。
坏	4	口径 11.6 底径 6.2 器高 3.1	口縁部は僅かに内湾しながら開く。先端は器肉薄くなる。底部は上げ底である。	底部切り離しは回転糸切り。他は回転なで。砂粒小し含み、軟質の赤色粒子（5の黒色粒子と同じもの）が多く含まれる。焼成は不良。色調は橙色。	口縁部先端付近を欠く。
坏	5	口径 11.6 底径 6.0 器高 3.4	口縁部は底部から僅かに外反するが、すぐ直線的に開き、先端は外反する。底部は僅かに上げ底である。	底部切り離しは回転糸切り。他は回転なで（右轆轤回転)。 砂粒を少し含み、軟質の黒色粒子が多く含まれる。焼成はやや不良。色調は灰色。	口縁部1/2と底部中央を欠く。
坏	6	底径 6.0	底部は僅かに上げ底である。底部から僅かに外反し、その後内湾する器形と推定される。	底部切り離しは回転糸切り（糸目は1cmに6つ)。 右轆轤回転。砂粒少し多み、軟質の黒色粒子も少し含む。焼成はやや不良。色調は灰白色。	底部1/2と口縁部下端1/4残存。
坏	7	底径 5.3	底部は上げ底である。	底部切り離しは回転糸切り。右轆轤回転。砂粒少し含む。焼成は良好。色調は灰色。	底部のみ。
高台付坏	8・9		口縁部と底部の間に段差があるが高台貼り付でかくされている。口縁部は大きく内湾する。底部中央で器肉を薄くする。	底部切り離しは回転糸切りで、後に高台を貼付。砂粒少し含み、軟質の粒子少し含む。焼成はやや不良。色調は灰黄色。	底部および口縁部下端を1/3残存。
蓋	10	口径 17.0	器高が低く、薄いつくり。身受け部は、端部を小さく折り返しただけ。	砂粒少し含む。焼成は良好。色調は灰色。	小片。

（宮　昌之）

Ⅵ 結　　語

1. 縄 文 時 代

a　土器

上南原遺跡からは、前期諸磯a、d、c式、中期加曾利E式、後期称名寺式の土器が出土している。主体は前期土器群であり多くの遺構に伴出したが、石器と共に遺構との関連は不明となったものが多く、積極的な土器の分析は不十分となっていた。ここでは各遺構での在り方により概略的な記述に留めて、現在報告を予定している北塚屋遺跡（市川1980）において、総合的な分析、検討を行うこととする。

諸磯a式土器は、第7、8号住居址と第4、7、13、19、20、27号土壙で出土している。中でも第8号住居址の在り方は、土器の組成内容と文様構成の一括性を重視すればA式の変遷過程の最終段階に時間的な位置が可能と言える。更にb式への移行過程と成立段階という視点に大きく係る問題を含むものである。文様は半截竹管による平行沈線文が肋骨文系、山形、波状、連弧、木ノ葉文系、集合沈線文を描出するものと、連続爪形文のものに2大別される。平行沈線文系の土器は、各々系統性を有すが、整理、検討によりa式後半の様相が明確になる材料となっている。更に深鉢形態には、外反する口縁で共通するか、有段部を備える土器が存在して、口縁部に刻目を施す手法と共に地域的な関連とこの段階の特質が潜んでいる。爪形文の土器は幅の狭い原体を用いて間隔を密に施文する特徴を備えるもので、半肉彫り状に凹み、爪形間が浮き上がっている。口縁および胴部にはこの部分に刻目を施している。形態には、平口縁のものと、台形状を呈す波状形態に対応単位のものがある。この台形状形態の系統は不明な部分が多く、その成立と、b式古段階への変遷という部分に検討を必要としている。第7号住居址の内容は、b式の古段階に位置する土器と混在するが、爪形文を施す土器の位置ずけは微妙であるが、平行沈線文系、爪形文の大部分は第8号住居址と共通している。土壙土器を含めて変遷を想定すれば、第4、19号土壙→第7、8号住居址という移行段階が可能と思われる。

諸磯b式土器は現在、古、中、新という3細分で大方の一致をみている。上南原遺跡における各住居址の位置ずけは、古段階に第7号住居址の一部、第10、12号住居址の土器が該当する。第10号住居址の列孔土器と浮線文をもつ深鉢は、第10、12号住の文様化された浮線文より先行する時間位置の設定が可能かとも思われる。中段階には、諸磯b式期の殆んどが該当する。中でも第3号住居址における浮線文および沈線文土器の一括内容は端的に示すものであり、キャリパー状口縁を備えた形態的な特徴と、口縁部文様帯の渦巻状モチーフの斉一的な構成は古段階の口縁部文様と大きな差違が認められる。第4号住居址においては、形態的に古段階深鉢の系統性を残す波状口縁が存在し、内湾の強い形態の深鉢と共に伴出関係を示して、第11号住居址の土器へと移行しよう。第11号住居址の深鉢の口縁部文様帯の構成は、渦巻文様とは若干の差違が見られる対弧状に貼付されている。この構成は渦巻文様の斉一性の崩壊期として想定が可能かもしれない。中段階の遺構単位の

変遷は第４→第３→第11号住居址という微妙な変化が見い出せる。新段階には第10号土壙が該当する。（市川　修）

b　石器

出土した石器は全て諸a、b式期に属するものであり、該期の石器群の様相を知るのに良好な資料である。石器の出土遺構、地点は不明であるがほぼ住居址（11軒）より出土したものであろう。以下、Ⅰ・Ⅱ類を主に分析していくが、石器群の組成についてはⅠ類打製石斧（41点）が多く、次に磨製石斧（11点）、次に磨石以下（８点）は非常に少なくなっている。他に打製石器３点で、計64点である。

初めに打製石斧については、大形２、小形１、未成品３が含まれる。１・２類の形態はズン胴形であるが、均勢のとれた形態である。幅広で長さが幅の２倍ほどあり、反りが比較的小さい。３・４類は１・２類よりも長さと幅の比が２倍より多くなり両側縁が平行に近くなる。９、10では厚さが2.0㎝以上であり、10は完成品で長さと幅の比は２倍前後である。基端・刃部に自然面を残し、側縁部は急角度剥離調整され、厚みを保持したままで整形されている。該期では特徴的な形態である。５・６類は長さが幅の２～2.5倍になり、18が2.0㎝以上の厚さであり縦方向の中央部に厚く稜線状を呈している。21・27は刃部幅が広く７類に入るかもしれない。８類のうち、28は自然面を利用した片刃で直刃の打製石斧である。28は自然面側に小剥離痕が見られるが直刃であり、片刃である。自然面による反りも機能に対して役割りを果しているであろう。２点はトランシエ様石器の特徴を備えている。トランシエ用石器は中期の尾崎遺跡に纏って出土しており、木工具と推定されている（鈴木1976）。42～44は打製石斧未成品であり、43自然面の側は整形剥離の段階でとどまり、表面は調整剥離にいたる。44は同段階で節理面で折れてしまったものである。Ⅰ類の法量は幅4.0～6.0㎝、長さ8.0～11.5㎝、厚さ1.4～2.4㎝に纏まりを示しており、この数値は中期打製石器と同様である（小田1977）。これらのⅠ類の特徴は該期打製石斧の特徴をよく表わしている。

Ⅱ類磨製石斧は成品、未成品を合わせて11点出土している。石材は53（細粒砂岩）以外全て輝緑岩である。１類は研磨された定角形磨製石斧であり、45は両側縁の面取りが不十分で、やや稜線上を呈している。２類以下は研磨のみられない磨製石斧である。敲打調整が全面に施されたもの（47・52）と整形剥離され自然面や剥離面を残し一部に敲打調整されたものである。２・３類は定角形磨製石斧であり、全面に敲打調整された２類(47)と一部敲打調整された３類である。46・54が両面の30％余の敲打調整であり、他の３～６類は50％以上である。３類のうち48・49は未成品である。51は基部を欠損しており、使用中基端を欠損したのち、敲石として利用されたもので、刃部がよく磨かれている。４類52・55は幅が広く乳棒状磨製石斧としては大きすぎるが、厚みを持ち、石材を薄くする作業をせずに敲打調整を両面に施している。断面は楕円形状を呈するため乳棒状磨製石斧として使用されたであろう。

乳棒状磨製石斧の製作工程については、既に尾崎遺跡で解明されている。尾崎遺跡では磨製石斧の完成品、未成品が400点余、又、調整剥離剥片を多量に出土しており、磨製石斧の製作址と断定ができ、制作工程の解明がなされている。荒い剥離→荒い剥離と細部調整剥離のくり返し→敲打調整→研磨調整の順である。上南原遺跡では１類を除き全て敲打調整の段階でとどまっている。２～

6類は明らかにされた製作工程より諸磯期における磨製石斧の制作工程が同様に行なわれていると同時に、磨製石斧の生産活動における役割りが諸磯期において中期におけるそれと同様のものとなっていることを示すものと考えられる。ただし尾崎遺跡においては乳棒状磨製石斧に集約されていたのに対して上南原遺跡では、定角形磨製石斧がほぼ同量あるいはより多く出土し、その製作工程が示されたことは相異する点である。

他に両頭尖頭器1点は諸磯器における類例は知らないが、鳥浜貝塚にミニュチュア石器が出土している（網谷1980）。石鏃、石ヒは各1点と非常に少ない。

縄文前期における打製石斧、磨製石斧のあり方、石器群の組成について、今後、上南原遺跡における石器群組成のあり方をもとに更に解明していく必要がある　　（曾根原裕明）

2. 平 安 時 代

a 土器

上南原遺跡からは（平安時代の竪穴住居跡が1軒検出された。出土した遺物は、土師器甕1、須恵器坏6、須恵器高台付坏2、須恵器蓋1である。住居跡からは、直接に実年代を知ることのできる遺物の出土がないため、他遺跡の調査資料や諸先学の成果をもとに、これらの土器の年代的位置づけを検討したい。

奈良時代から平安時代の土器編年を行う際の基本的な軸となるのは、須恵器の坏である。この土器は、関東地方西部に限れば、土師器の坏や甕よりも、技法的・地域的なバラエティーが少なく、編年の指標とするのに適当であると思われる。須恵器の坏は、粘土柱から坏身を切り離す際の方法と、切り離し後の底部に施す調整手法の違い、口径と底径の比率の値によって時期区分されている（高橋一夫1972・1974　小出義治1971　河野喜映1976　星野達雄1977　服部敬史・福田健司1979・1981）。

小出義治氏は、底部が糸切り離しのままの須恵器坏が、口径と底径の比率関係によって、口径＜底径×2倍、口径≒底径×2倍、口径＞底径×2倍の順で推移することを示した。河野喜映氏は、神奈川厚木市鳶尾遺跡の資料を用いて、この方法を発展させた。底径÷口径の値によって、0.70～0.60（底部に調整を施し、時代は、8世紀中葉～9世紀初頭）0.60～0.52（8世紀末～9世紀前半）、0.52～0.47（8世紀末～9世紀代）、0.47～0.42（10世紀第1四半期）、0.42～0.37（10・11世紀代）、0.35（11世紀代）の6類に区分した（注1）。南多摩窯跡群を分布調査した服部敬史・福田健司氏は、採集した坏の口径と底径を窯ごとに座標上におくと、一定のまとまりを持つ傾向があることを指摘し、その様相の差を時間差として捉え、代表する窯の資料を用いて窯式編年を示した。その後国平健三氏は、服部・福田氏と微妙に異なる年代を示し（国平1981）、服部・福田氏も新しい資料を加えて、編年を再検討した。前回のG37→M7→G25→G41→G5→G14の窯式変化のうち、M7窯式を資料の豊富なG59窯式に差し変え、G41窯式が省かれた。しかし服部氏は、別な論巧において、G5窯式を、G5窯式（古）、G5窯式（中）、G5窯式（新）の3期に区分した（服部1981a・b）。各窯式の年代は、福田氏との論文と異なり、両氏の年代観の相違が明らかになった。

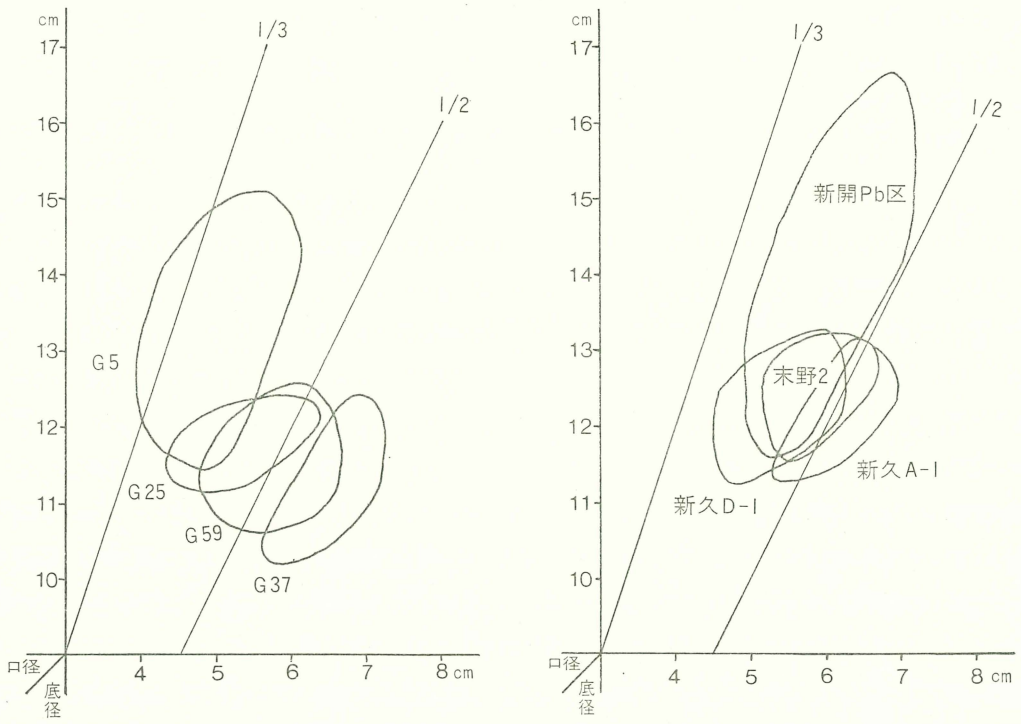
次に県内における窯跡出土の須恵器について触れてみたい。県内の窯跡の調査は、30箇所近くに

及ぶが、その内容が報告された例は少ない。底部が糸切り離しのままの坏を出土する窯跡を、口径と底径の比率関係、ならびに生産器種を基準として想定した変遷は、入間市八坂前第４・５・６号窯（坂詰秀一・小林昭彦1971）・入間市新久Ａ地点号１・２窯（坂詰1971）・寄居町末野（花園支群）２号窯（野部徳秋・高木義和1977）・入間市新久Ｄ地点１・３号窯（坂詰他1971）、三芳町新開Ｐｂ区窯（松本富雄他1981）・富士見市栗谷ツ１号窯（佐々木保俊・田代隆1979）と考えられる。

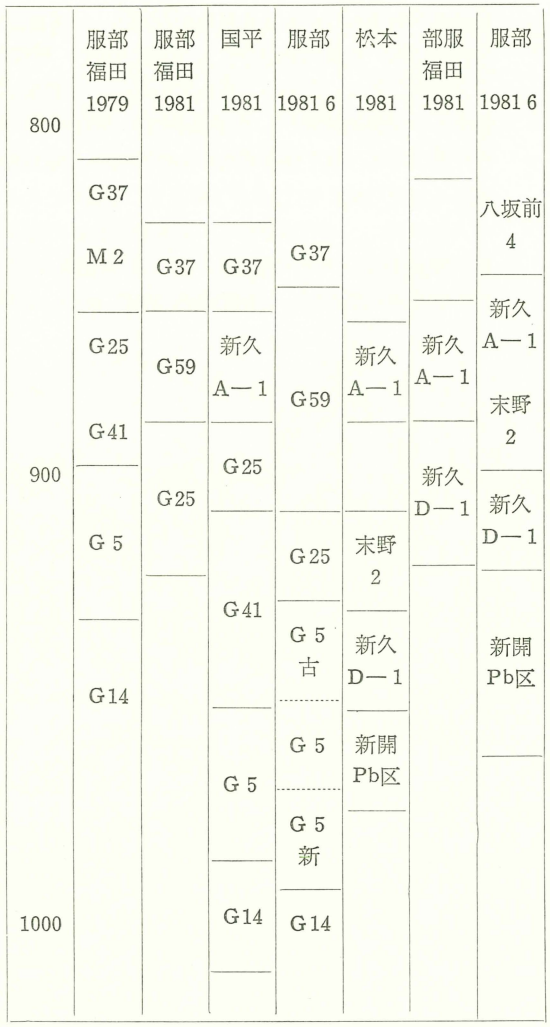
八坂前第４・６号窯は、底部の周縁にヘラ削りを施す坏を焼成、あるいは焼台として利用している。また武蔵国分寺七層塔再建瓦を焼成している事で知られる。再建瓦焼成前後に須恵器を焼成しているが、それぞれの区別はされていない。底部の周縁にヘラ削りを施す坏、つまみの付かない蓋、皿を焼成しているなど、南多摩窯G37窯式より、操業期間の幅がやや広いと考えられる。

新久Ａ地点１・２号窯は、塔再建瓦を再利用していると考えられており（有吉重蔵1981）、塔再建時以後の操業と理解される。底部周縁にヘラ削りを施す坏はなく、１号窯の皿や２号窯のつまみの付かない蓋の存在から、操業期間は八坂前窯の再建瓦焼成以降の時期に、そのほとんどが包括されていると想定される。底径÷口径の値は平均0.52である。

末野２号窯は、焼成面で２面認められており、古い面から出土した蓋は、口縁端部が内側へ屈折しない、あるいは丸まってしまうなど、退化した造りとなる。皿には新たに高台が付く製品が現われる。蓋の口縁端部や高台付皿の様相から、南多摩窯G59窯式より後出の時期と想定される。なお新しい面では、蓋が出土しておらず、本窯の操業中に消滅したと考えられる。底径÷口径の値は、平均で0.47である。



坏の口径底比図表



新久D地点1号窯は、坏の底部径がさらに小さくなる。底径÷口径の値は、平均で0.42ある。3号窯は、1号窯より底径の大きい坏を含んでおり、操業の開始は、1号窯に先行すると考えられる。その様相は南多摩窯G25窯式に類似する。

新開Pb区窯は、坏が全体的に大形となり、椀との区別が無くなる。この様相は、南多摩窯G5窯式（古）に相当するG62号窯（服部1981に）以後に一般的であるが、底径÷口径の値は、新久D地点1号窯と変わらない。また頸部に波状文を施す甕や高台付皿を含まない。

栗谷ツ1号窯は、遺物が少なく、器種構成が不明な点がある。出土した坏は雑な造りであるが、還元焔焼成の坏も残る。

これら窯跡の年代決定の根拠は、武蔵国分寺七層塔再建に関係する承和12（845）年を上限とする年代に限られる。八坂前第4・5・6号窯では、再建瓦を焼成。新久A地点1・2号窯では、窯体の構築材として利用していたと考えられており、（有吉1981）出土した須恵器は、塔再建瓦焼成以後の製品と判断される。また消費地において、火山灰・古銭・灰釉陶器の伴出などから、年代が推察される（註2）が、問題も多く、新久A地点窯以降の時期については、主観的な年代観に依ることになる。各窯の年代は、八坂前4・6号窯を9世紀第2・第3四半期、5号窯を9世紀第2四半期・第3四半期、新久A地点1・2号窯を9世紀第3四半期、末野2号窯を10世紀第1四半期、新久D地点1号窯を10世紀第2四半期、新開Pb区窯を10世紀第3四半期、栗谷津1号窯を11世紀第1四半期と考える。

住居跡から出土した須恵器は、胎土の特徴から、末野窯跡群中の製品と考えられる。蓋の口縁端部の特徴は、末野2号窯に類似する。坏は座標上の分布外の製品も含まれ、消費地特有の現象がみられる。土師器甕にも同時期が与えられる。

註

(1) 河野氏は、個々の区分に年代を与えていないが、本文と編年表から推察した。なお編年表に記されている年代の一部は、正誤表によって訂正されている。

(2) 近隣地域の火山堆積物として、富士山給源の延暦の噴火（800年）、貞観の噴火（864年）、剣丸尾溶岩（10～11世紀代）や、浅間山給源の浅間B軽石（1108あるいは1284年）などがあり、出土遺物との前後

関係が研究されている（小野真一他1978　石川正之助他1977　杉山博久1980　井上太他1980　奥隆行・堀内真1981　小島弘義他1981）。灰釉陶器は、楢崎彰一によって研究され、氏の年代観は現在までほとんど変更されていないが、高島忠平氏は、平城京三坊大路東側溝出土土器の検討から、黒笹90号窯式の始まりを9世紀後半として（高島1971）、本報告でも同様の年代が示された（奈良国立文化財研究所1975）吉田恵二氏は、黒笹14号窯式を825年前後、黒笹90号窯式を900年前後、折戸53号窯式を973年（奈良薬師寺西僧坊焼失年代）以前と考えた。斉藤孝正氏は、折戸53号窯式の開始時期を973年頃に（斉藤1981）井上唯雄氏は、折戸53号窯式の小瓶を出土した住居跡に、9世紀後葉から10世紀中葉の年代を与えている（井上唯雄）。県内の例としては、中堀遺跡（駒宮史郎1978）出土の灰釉陶器を浅野晴樹氏は黒笹90号折戸53号窯式に比定し（浅野晴樹1980）、伴出した須恵器は新久口地点3号窯段階と考えられる。

（宮　昌之）

参考文献

浅野　晴樹　(1890)　「埼玉県内出土の平安末期の施釉陶器」『埼玉県歴史資料館研究紀要』第2号　埼玉県立歴史資料館
有吉　重蔵　(1982)　「武蔵国分寺跡出土の平城宮系字瓦について」『シンポジウム〝関東地方における9世紀代の須恵器と瓦〟—埼玉県入間市八坂前窯跡・同新久窯跡を中心として』—立正大学考古学研究室
石川正之助　(1979)　「遺構の年代と火山噴出物の降下年代」『考古学ジャーナル』157　ニューサイエンス社
井上　唯雄　(1978)　「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号　群馬県史編さん委員会
井上　　太　(1981)　「本宿・郷土遺跡の調査報告書」富岡市文化財保護協会
市川　　修　(1980)　「北塚屋遺跡発調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会
今村　啓爾　(1980)　「伊豆七島の縄文文化」武蔵野美術大学考古学会
　　(1981)　「施文順序から見た諸磯式土器の変遷」『考古学研究27—4』考古学研究会
梅原　末治　(1935)　「京都市北白川小倉町石器時代遺跡」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告書第16冊京都府
大野政雄他　(1960)　「村山遺跡」
奥　　隆行　(1981)　「富士吉田市の遺跡」『富士吉田市遺跡分布調査報告書』富士吉田市教育委員会
小田　静夫　(1977)　「縄文中期の打製石斧」『どるめんん10』
小野　真一　(1978)　「永原追分遺跡」御殿場市教育委員会
金子　浩昌　(1973)　「古和田台遺跡」船橋市教育委員会
佐原　　真　(1977)　「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会編
国平　健三　(1981)　「相模国の奈良、平安時代集落構造（上)」『神奈川考古第12号』神奈川考古同人会
栗原　文蔵　(1961)　「中川貝塚」大宮市教育委員会
久保常晴他　(1969)　「本町田」『立正大学文学部考古学研究室調査報告1』立正大学考古学研究室
小出　義治　(1974)　「秦野下大槻遺跡」秦野市教育委員会
河野　喜映　(1976)　「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論—歴史時代を中心として—」『神奈川考古第1号』神奈川考古同人会
小島　弘義　(1981)　「四之宮上郷・下郷調査概報」神田、大野遺跡発掘調査団
駒宮小史朗　(1978)　「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　中堀・耕安寺　久城前」『埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集』埼玉県教育委員会
斉藤　孝正　(1981)　「桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ」小牧市教育委員会
酒詰　秀一　(1981)　「武蔵八坂前窯跡」立正大学考古学研究会
　　(1971)　「武蔵新久窯跡」雄山閣
佐々木保俊　(1979)　「針ケ谷遺跡群Ⅰ」『富士見市遺跡調査会調査報告第6集』富士見市教育委員会
杉山　博久　(1980)　「秦野盆地周辺の火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル178』ニューサイエンス社
鈴木　次郎　(1976)　「尾崎遺跡」『神奈川埋蔵文化財調査報告13』神奈川県教育委員会
鈴木　敏昭　(1980)　「足利遺跡」久喜市教育委員会
　　(1980)　「諸磯b式土器の構造とその変遷（再考)」『土曜考古2』土曜考古学研究会
鈴木　徳雄　(1980)　「白石城」『埼玉県遺跡調査会報告書36』埼玉県遺跡調査会
高島　忠平　(1971)　「平城宮東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌57—1』日本考古学協会
高橋　一夫　(1972)　「中馬場遺跡・妻子原遺跡」日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団
　　(1974)　「前内出窯跡発掘調査報告書」『埼玉県遺跡調査会報告書24』埼玉県遺跡調査会
中島　　宏　(1977)　「金堀沢遺跡」入間市金堀沢遺跡調査団
　　(1980)　「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ、伊勢塚・東光寺裏」『埼玉県遺跡発掘調査報告書19』埼玉県教育委員会

並木　　隆　(1978)　「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」『埼玉県遺跡調査会報告書35』埼玉県遺跡調査会
奈良国立文化財研究所　(1975)　「平城宮発掘調査報告Ⅶ」『奈良国立文化財研究所学報35』奈良国立文化財研究所
野部徳秋他　(1677)　「末野窯址（花園支群）発掘調査」寄居町教育委員会
服部敬史他　(1978)　「南多摩窯址群　御殿山地区62号窯址発掘調査報告書」八王子バイパス鑓水遺跡調査会
　　(1981)　「武蔵、平安時代の窯址出土須恵器編年」
　　(1979)　「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古６』神奈川考古同人会
　　(1982)　「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古12』神奈川考古同人会
原田　昌之　(1980)　「藤の台遺跡Ⅱ」藤の台遺跡調査団
野村　幸希　(1975)　「飯山満東遺跡」千葉県都市公社
西村　正衛　(1966)　「茨城県稲敷郡浮島貝塚―東部関東における縄文前期後半の文化研究―その１」『学術研究16』早稲田大学教育学部
星野　達雄　(1977)　「いわゆる国分式土器について」『原始古代社会研究３』板倉書房
松本　富雄　(1981)　「新開遺跡」三芳町教育委員会
村田　一二　(1979)　「野田市北前貝塚」野田市郷土博物館
森川　昌和　(1979)　「鳥浜貝塚」福井県教育委員会
吉田　恵二　(1980)　「日本考古学会第12回例会発表要旨　猿投窯の瓷器生産をめぐって」『考古学雑誌60―30』日本考古学会